

易經研究

特257

473



始





時 257  
473



飯島忠夫先生講

經  
研  
究

信  
濃  
教  
育  
會





## 序

昭和六年の十月、信濃教育會埴科部會から招かれて、屋代中學校の講堂で、三日に亘つて易に関する講義をした。それは、前の部會長保崎熊藏氏の時、同氏から佐久間象山先生の礮卦の講義を依頼されたのが動機となつたのである。自分も象山先生と同じく松代に生れたので、先生の事蹟については早くから興味を有し、礮卦についても多少研究したことがあつたから、其の依頼に應じたのであつた。然るに、礮卦は元來易經の應用であるから、それを知るには先づ易經を知らねばならぬ。そこで、終に、易經の講義をしてから礮卦に及ぼすことになつた。此の時の講義筆記が即ち本書である。

易經は儒教の經典の中で最も難解のものであるが、それをよく咀嚼すれば、津々として盡きない妙味が出て来る。そこには豊富なる常識が深遠なる哲學から湧き出して居るのである。單にそれを占卜の書としてのみ見るのは誤である。易の哲學は希臘哲學と共通する所があり、且つそれと同じく哲學と科學とがまだ分離して居ない。象山先生は、青年の時から、其の當時の學風に満足しないで、特に易



の科學的方面に重きを置いて居たが、これが壯年に及んで西洋の科學に進んで行く因縁となり、遂に易の中に銃砲の原理と同一のものがあつたのを認めて、それを發揮して、礮卦の一書を著したのである。先生は嘗て「シクシテ宜會シテ東西、ヲ以作ス一家書」と言つた。先生は易の中に西洋の科學を攝取し、精神文化と物質文化とを綜合して一としようと思つたのであつて、礮卦は實に其の大なる識見と抱負との一端が現れたものである。此の書を知らなければ學者としての象山先生を論ずることが出来ない。

易經の講義をするについて、自分は多少突込んで新しい説き方をしようとしたのであつたが、短時日の爲、僅に其の片鱗に觸れたに過ぎず、又礮卦著作の苦心についても充分述べることが出来なかつた。しかし、此の小さな講義筆記が、此の方面の研究に志す諸君に對して、何等かの助ともなることが出来るならば、誠に自分の幸福である。

昭和七年七月

飯島忠夫

目次

序……………一

一 支那古代の宗教思想……………一

二 支那古代の學術……………六

三 支那思想に於ける易の地位……………一三

四 易の作者に關する傳説……………一七

五 易なる語の意義……………二二

六 易の組織……………二六

七 占筮法……………三〇

八 河圖・洛書……………六一

九 陽卦・陰卦……………六四

十 上經講義——乾・坤——……………六五



十一 下經講義—家人・睽—	九四
十二 易の占法	一〇二
十三 繫辭傳	一〇五
十四 易經參考書	一三〇
十五 象山先生の易學	一三三
十六 礲卦	一五九
附録	
春秋占筮書補正序	一
邵康節先生文集序	四

### 易經研究

易經の講義をせよといふ御依頼がありましたので、お受けは致しましたが、これはなかなか難解な本で、それを三日間に大体なりともお話するには如何いふやうにしたらいいかと可なり苦心いたしました。

ここへ拔書ぬきがきしました講本は易經の中の小部分であるが、これだけでもその大体の筋はわかるかと思ひます。併しこれだけでも短い時間で詳細にお話することはできないから、ただその概略をお話して、將來皆様の御研究の基礎となる程度にいたし、今度の講義をすませたいと思ひます。それからこの講本の終りに副へたのは佐久間象山先生の礲卦はちくくわであります。易經の本文の方に時間を多く費しますから象山先生のことを御話するのは少い時間となりますが、象山先生が工夫して



易經を活用された興味あるものであるから、出来るだけ委しく申したいと思ひます。

初めの二日間で易經の本文を終へ、終りの日に象山先生の易學——象山先生の生涯は易で始まつて易で終るといへる——先生がその易を學ぶやうになつた事實についてお話し、それから爻卦について申し上げます。もつとも第三日はじめはまだ易經の本文を講義せねばならぬかも知れないが、進行の様子によつて適當に處理いたします。

さてこの講本をすぐお話ししても、話すものも困るし、皆様もお分りにくいことと思ふから、先づ易の概説的の事を御話してそれからこの本の講義をいたさうと思ひます。

### 一 支那古代の宗教思想

第一に支那古代の宗教思想を申し上げます。易といふものはやはり宗教的の

意味をもつものだからこの支那古代の宗教思想を御話するのが順序かと思ふ。

支那の古代の宗教とはどんなものか、このことをまとめて書いたものは昔のものにはない。現代ではこれをまとめて研究してゐる人もある。それで支那古代の宗教を知るには、支那の昔の書物を見、又現代に残る民間の信仰を調査して判断するのである。其の結果をつまんでいふと、古代の支那の宗教は、今でも朝鮮や日本に残つてゐる巫女みこの取扱ふ原始的の宗教と類似したものである。西洋の學者はこれをシャマニズムShamanismといふ、シャマンShamanとは蒙古で神に仕へるものにつけた名前名前で、それからシャマニズムといふ名稱が導き出されたのである。

巫女の「巫」は「ブ」と讀み、「巫」に並んで「祝」といふものがある。支那古代の宗教はこの巫祝ぶしゆくの取扱ふ宗教であつた。支那の文字は繪畫から變じたもので、「巫」の字の「工」は人の坐つた形であり、「巫」は兩方の袖を振つて舞ふ形である。舞をするのは神様を招き降す作法である。「巫」は元來女であつて、若し男がする場合場合は「祝」といふ。巫女が舞つて「祝」といふ神主が祈いのちの詞を宣へる、つまり祝詞のりとを上げる。「祝」といふは本來いふのといふ意味の言葉である。そのやうに舞を舞つたり祝詞を上げる作法は



現代の日本の神道にもある。それ等の行事を考へると支那の昔の行事に似てゐると思ふ。

巫祝の取扱ふ神は、天の神、地の神、人の神であり、天の神を神といひ（これは天に於ける目に見えない神や、目に見える太陽・月・星の神である）、地の神を祇といふ（地の神とは山の神、川の神、草木の神の類である）。それを合せて天神地祇といふ。人間の神は死んだ人の靈魂で、それを鬼といふ。即ち天神地祇人鬼の三つを拜み、献物をして幸福を授かるといふのが昔の宗教である。この場合神の思召し即ち神意を伺ふことが必要で、その方法が「うらなひ」である。「卜」といふのは一種の占である。支那では昔龜の甲をすべらかに磨つてそれに切れ目を「卜」の形のやうにつけ、それを火に當てて焼くとひび割れが出来る。之を見て神意を考へたのである。だからこれを龜卜といふ。支那以外の地方では龜は用ひなかつた。それぞれの地方で得易い材料を用ひるのであらう。蒙古などでは、今でも鹿の肩の骨を用ひてゐる。日本でも大昔は鹿の肩の骨を焼いて占つたのである。神意を伺ふことは宗教では大切なことで、その思想の系統は易の中にも傳はつて居るのである。

易によつて神意を伺ふことを筮といふ。「筮」といふ字は竹冠に巫といふ字であるから、筮はもと巫の使用したものであつたらう。竹などを數へて占をすること、は巫が行つた原始的のものと認めて差支はないが、しかし易による筮法は、新しい學問が興つて來てから始めて行はれるやうになつたものであつて、それを取扱ふものは巫祝ではなく、學問社會に屬するものであつたのである。原始的宗教の立場から見れば、神意を伺ふ正統の方法は龜卜であつて、易筮は傍系に屬するものである。

古代宗教の序に言つて置くが、「社」といふのは、文字の構造が示す通り、土地の神を祭るところである。神様のお宮の周圍に、部落の人が集り、あらゆる相談や儀式を行ふ。即ち部落の中心となつて、宗教的に政治を行ふのである。「社」に類似したものは日本にもたくさんある、各部落の「やしろ」は本來それである。故に「やしろ」に「社」の字が當ててあるのである。

支那と朝鮮と日本との古代の社會状態はよく似てゐる。社は神社がその本義であつて、後世になつてはただ組合といふ意味だけでも用ひられる。組合は團結



を意味し、その團結の中心は神様であるべきであるが、唯團結だけを意味するやうに言葉が變遷した。それで古代の各部落は社によつて宗教的に統一され、更にその各部落を總括する大きな君主が出来るやうになつた。その君主を天子といふ、即ち天の子である。天の神の最も重いものは、上帝或は天帝又單に天ともいふ。此の上帝の子なる天子をいだけて、各部落のものはよき政治の下に幸福を得るのである。だから古代の宗教は政治に關係がある。即ち宗教は同時に又政治であつたのである。天子といふのは支那の言葉であるが、日本の天皇も天つ神の御子と稱せられるから、双方の考へ方がよく類似してゐる。

## 一 支那古代の學術

かういふ思想の行はれてゐた時代には、學術は宗教的行事に結びついてゐて、知識的に獨立した學問といふものは無かつた。學問は社會事情の複雑になつてから發生するもので、最初は倫理とか政治とかに關係したものが發生する。即ち日常生活が完全な道德に合し、立派な政治の下に於て幸福を享けようとする倫理學とか、政治學の基礎となる常識的の學說が發生するのであつて、此の時には未だ哲學は起らぬ。支那で哲學の起つたのは、學術が或る域に達してから後であると思ふ。

支那哲學とは如何なるものか、最初に發生したものはどんな組織をもつたものであつたらうか。それは哲學と言つても實は物理學的のものであつた。先づ宇宙人生を説く一つの根據として、宇宙の元は唯一つの稀薄な物質であるとする。物質といふと語弊があるが、極めて稀薄な、生きて居る力(活力)のやうなものが最初に存在して、恰も人の口から出る「イキ」のやうなものであつたと考へた。それを「氣」と稱す。「氣」は「イキ」と譯してもよい言葉である。この氣が動いてゐる間に自然と種種の變化が起る。初めは厚いも薄いもない一塊で渾沌こんとんとしてゐたが、だんだん厚い部分と薄い部分とが出来、それが次第に落ちついて濃い方のものは下に沈み、軽い方のものは上に浮ぶ、濁つた水など置くと泥の部分かたまりが下に沈むことから考へたものであらう。それが天と地との別れた初である。天は輕くて浮いたものであ



り、地は重くて沈んだものである。軽い天は暖くて澄んでゐるものであり、重い地は寒くて濁つて居るのである。天と地との二つの「氣」は常に通つてゐて、天から下る氣と地から上る氣との二つが相交はつてはたらいてゐる場所が生物の居る此の世界である。

然らば生物は如何にして出來たか。人間は天の氣と地の氣との合したもので、人間の精神は天の氣であり、肉体は地の氣である。而して生きてゐる間はこの二つの氣が結びついて居り、死ねばこの二つの氣はそれぞれ天にかへり地にかへるのである。生きてゐるとは、肉体と精神とが結合してはたらくことで、その中から感情とか慾望とか良心とかの作用が起るのである。今用ふる精神といふ語と、本來の精神といふ語とは、その意味を異にする。即ち本來は物理學的の意味であり、今は物理學的の意味を有しない。このことを了解してゐないと、支那の古典に用ひられる精神といふ語の意味は分らない。

人間が自由のはたらきをする時には、肉体と精神とは互に相制し合ふ。若し肉体に制せられる時は、感情慾望に走り、精神のはたらきの強い時は、良心が活動し、聰

明睿智が現はれ、誠が行はれる。つまり善は精神に屬し、惡は肉體に屬する。従つて道徳的行爲をば、精神の自由なる活動がよく、肉体を制馭し得た状態として考へるのである。今迄のことを換言すると、渾沌たる一塊が分れて天と地となり、天と地との二つの氣が結合して、人間及び萬物を發生させた。而して人間の精神は天より享けたもので善であり、肉體は地より得たもので惡の元ともなるものである。此の如く、宇宙及び人生を一つの學理で統一したものが、古代の哲學である。

さて、渾沌たる一つの氣のことを、太一又は太極と名づける。一番元といふ意である。上に昇つた軽く暖く澄んだ氣を陽と名づけ、下に沈んだ重く寒く濁つた氣を陰と名づける。故に精神は陽であり、肉体は陰である。この陰陽の結合によつて、宇宙及び人生の現象を生ずるのである。この陰陽が一層複雑に説かれる時は五行となる。即ち陰と陽との組合せを五通りに考へるのである。

一、陰陽平均して調和せる場合。

二、陽が陰より強い場合。

三、陰が陽より強い場合。



四、陽のみが表に顯はれてゐる場合。

五、陰のみが表に顯はれてゐる場合。

この五行の思想は、天體の現象に注意して、五個の惑星即ち木星・火星・土星・金星・水星——これが肉眼で見られる惑星の全部である。——を知つたとき、それと結合して成立したもので、五行は五つの元素と考へられたのである。そこで、陰陽は日月に配せられる。陽の代表を日、陰の代表を月とする。日は天にある陽氣の凝り固つたものであり、月は地から上昇した陰氣が凝り固つたものである。五行は木・火・土・金・水の五つの惑星をその代表者とする。その名は、先づ天の惑星の數に因んで、五つの異なつた性質のものを地上に求め、それらを以て各五つの惑星と連絡があるものとして、それらの名を取つて星の名としたのである。此の如くして、五行思想には、本來陰陽哲學と天文學とが含まれて居るのである。而して太極・陰陽・五行は宇宙人生を統一する原理となつた。今迄の常識的なる政治學や倫理學は、終にこの哲學を背景として發達するやうになつた。五行は陰陽の展開したものであるが、古典の中には、五行説がまだ成立してない時代に、陰陽哲學のみが存在したこ

とがあつたと認むべき證據がない。それ故に、支那哲學に於ては陰陽と五行とが殆ど同時に説き始められたものと考へねばならぬ。

すべての學問は、哲學が出来ること、それを背景とする様になるものである。孔子や老子の教へも、哲學を背景としてゐる。支那でかうした哲學が發生したのは、私の古代天文學の發達史を研究した結果から見れば、今から二千二三百程前で、支那の戰國時代に當る。それは西紀前三四百年の頃で、學者には孟子・鄒衍（すゐん）・孟子の直ぐ後に出た學者で、陰陽五行を調へるには、是非此の學者を知らなければならぬ。さか、老子（老子は年代不明だが）の後を繼ぐ莊子とか、所謂戰國の諸子百家が多く輩出した。

かうした素朴な支那古代の哲學が、果して現時の人に興味を持たせることが出来るであらうか。しかし、そこにはやはりうち捨て難いものがある様である。今の學問でも、天から降る氣をば認める、光線は即ちそれである。光は電磁波の一種であるといふから、電磁波も天から下るものである。光線の一種であるところの宇宙線 Cosmic Ray も、天から下るものである。地上に原形質（プロトプラズマ）が現はれて、それが太



陽の光を受けて生長し、それからすべての生物が蕃殖する。然るときは天の氣と地の氣と結合して、生物を生ずるといふ考へは、昔も今も變らないと言ふことが出来る。ただ昔の考へ方は素朴で今のサイエンスのやうに精密でないだけであつて、決して全然誤つて居るのではない。既にのべた古代の知識に於ける人間の精神と肉体との關係も、今の學問からはエネルギーと物質とに配して考へられるもので、昔の思想に打捨て難いものがある。今の西洋の學問といつても、希臘あたり  
の古代思想をむしかへし、それに新しいものを加へたのであつて、近代哲學にギリシャ哲學の影響をうけないものはない。哲學者はすべて皆最初にギリシャ哲學を學んだものであつて、若しそれが無かつたなら、西洋の學術も今日の如くに發達しては居らぬ。故に東洋に於ても、また東洋古代の哲學を一顧すべきである。古いものと雖も、その時代の聰明な人物が其の時代に於て知られたすべての知識を綜合して、其の時代相應の深奥なる所に到達してゐるのであつて、新しく起る哲學もこれを基として生れ、而して今の人を指導する力となることができるのである。

此の意味に於て、易の研究も無意味ではない。易經には時としては奇怪の事もあるが、其の中にはやはり眞理が含まれてゐて大なる價值を有してゐるのである。

### 三 支那思想に於ける易の地位

支那思想に於ける易の地位といふことを考へると、易の中には只今お話した哲學は勿論入つてゐるが、哲學發生以前の常識的な政治學や倫理學の知識も入つて居り、それから巫祝の取扱つた神意を伺ふといふ思想も入つてゐて、哲學で明にするところの宇宙の理法と、原始的宗教で言ふところの神の意志とは、全然融合してしまつて居る。これに依つて考へると、易經は哲學が發生してから作られたものであるといふことが分る。支那の哲學は前に述べた通り、戰國時代に發生したものであるから、易經は戰國時代以前に作られたものとする事は出來ぬ。易經は儒教の經典であるが、儒教の經典には易經の外に、詩經・書經・禮記・春秋がある。合せて五つになる、これを五經といふ。五經に並べて四書があるが——四書



こは大學中庸論語孟子である——これは五經よりずつと後に古典の中から抜き出されたものである。五經と數へたのは漢時代からで、四書を抜き出したのは宋時代からである。四書が行はれる以前は五經を尊重したのである。尤も、大學と中庸は、何れも禮記の中の一編である。

此の五つの經典の中で、易經は哲學的であり、深遠のものとして尊重された。老莊の學問をするものも易經に注意した。老莊の學問をする方を儒家に對して道家といふ。後には佛教家も易を研究した。それは易經に哲學的のところがあるからである。

易の思想といふものは、今もいふ如く、哲學があり、常識(政治倫理の)があり、原始的宗教がある。然らば易の全體の仕組は何を示し、何を教へるものであるかといふと、人間が社會に立つて行爲する標準を指示するものであつて、道德に歸着させるのが易の仕組である。たとへば、それぞれの境遇にあつて如何に考へ如何に行爲すべきかといふ時に、神意を伺ひ、神のお示しに従つて易經の中に書いてあることをよく讀んで見て、その指示する所によつて行爲の標準を定めるのである。つま

り易の精神は道德的のところ、に歸着するものであつて、人殺しをし、泥棒をしてもよいとは書いて居ない。

人間日常の道德に歸着するのは儒教的精神であるから、易の中には儒教的精神が織込まれてゐるわけである。従つて此の書は孔子の教をうけ繼げる人が手をかけてゐることがわかる。故に古い神意を伺ふ方面、即ち巫祝の方にも同情を持ち、而も儒教の眞理を体得したものが、易經を作るに大いなるはたらきをしたのである。

戰國時代に出た孟子は詩經と書經と春秋とを説いたが、易經をば全然説かなかつた。其の時にはまだ易經が著されて居なかつたかも知れぬ。荀子は孟子の活動時代から約五十年後に活動した人である。荀子は經典を讀む方法を示して、詩經・書經・禮・春秋の四つは是非子供の時から學べと言つてゐるが、易經を學べとは言つて居らぬ。然し荀子の時代に、易經はあつたので、荀子の著書の中には易經の文句を引用してゐる。しかし易經を重要な經典としなかつたのである。ところが漢代に至ると易經は重要な經典となり、而も五經の第一におかれるやうになつ



た。のみならず詩經や書經や春秋まで豫言を含むものとして論せられるやうになつた。その様な時代であるから易經が五經の第一におかれたのは當然のことである。

易經の思想と儒教の他の書物のものとを比較して見ると、易經の思想はそのまま中庸の中に表はされてゐるから、中庸を讀むものはまた易經を讀まねばならぬ。易經と中庸とは相携へてゐるものと思はれる。易經の中の言葉が中庸の中にも澤山出てゐる。「中」といふことを重んずるのは易經でも中庸でも同じである。「庸」といふことは易の中でも言つてゐる。例へば中庸に「庸徳之行、庸言之謹」とあるが、易經の中にもこれに似たことがある。中庸でも「まこと」「誠」といふことを言ひ、易經でも「まこと」といふことをいふ。易經の「まこと」といふ字は「孚」となつてゐる。その他よく比べると兩者は非常に密接の關係をもつてゐる。

論語と易經との關係を見ると、論語の中に「加我數年、五十以學、易、可以無大過矣」とある。五十歳になる頃まで易を勉強させてくれれば大なる過が無いやうになるであらうとの意である。又「不恆其徳、或承之羞、子曰、不占而已矣」とある。其の

意味は、易に、いつも一すぢにまじめな心を持たないと羞を取るといふことがあるが、それは占はなくても前から分つてゐることであるといふのである。論語は易經を豫言的方面のものとして取扱はず、道德の規範として取扱つてゐる。つまり儒教の經典としての易經は哲學を根據として道德的規範を示すもので、豫言を主とするものではない。宇宙の理法を説くところの哲學は必然的に將來を指導するところの原理となるのであるが、易經は豫言を目的として哲學を利用するのではない。易經を豫言に用ひるのは傍系である。論語の中に易經が引かれて居るのを見れば、論語は易經が著された後に完成されたものであらねばならぬ。

#### 四 易の作者に關する傳説

易といふものは誰が作つたかといふことは、繫辭下傳に記してある「古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之徳、以類萬物之情」とある。易は八つの卦を立てるから、此の



文にある八卦とは易のことを指すのである。包犧氏とは大昊伏羲氏の事で、太古の神様である。蛇身人首であつて、始めて八卦を作つた。是は神話的のものである。その次に周の文王が易の文章を書いたといふ傳説がある。それも繫辭下傳に「易之興也其於中古乎。作易者其有憂患乎」とあり、又「易之興也其當殷之末世周之盛德邪。當文王與紂之事邪」とある。「邪」と言つてあるところから見れば、易の作者を正確に文王と指したのではない、文王の作つた文句といはれて居るのは、上經と下經とである。そこで後世の説では、易經は伏羲氏が基礎を作り、文王が擴張し、更に孔子がそれを説明したといはれて居るのである。孔子が説明した文章と傳へられるのは、象上傳・象下傳・象上傳・繫辭上傳・繫辭下傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳の十である。これを十翼と稱する。十翼には「子曰」といふのが澤山見えるから、一應孔子の意見だと考へるのも無理ではない様である。兎に角、漢時代にはこの三人が、易經を作るに關係した人とされて居た。十翼が孔子の作であるといふことは史記の孔子世家に始めて明記されてゐる。史記は漢の武帝の時に司馬遷が作つたもので、今から二千年前のものである。後漢の末になつて、易經の中の經文

の初の方の象辭は文王の書いたものであり、細目を説く象辭は周公が書いたものであるといふ新しい説が起つて來た。周公は文王の子である。かうして易の作者は以上の四人であるとして、ずつと後まで傳へられた。

宋の時代、歐陽修が易の作者について初めて異論を唱へた。十翼の作者は孔子で無く、戰國時代の學者であると言つた。これが批評を加へた最初であつて、その後十翼は孔子の作にあらずといふ説が、段々有力になつて來た。伊藤東涯も孔子の作にあらずと言ひ、その論據には歐陽修の説の外に、自身の創見をも加へてゐる。支那の近代にもその類の説が行はれてゐる。併し乍ら、上經下經が文王周公の作であるといふことを併せて疑つたものは、まだ殆ど無いのである。經典に批評を加へるといふことは容易なことではなく、それは注意しないと、時としては教を破壊するといふ結果に導く恐れもあるから、慎重な態度をもつてせねばならぬ。しかし我々が、今の時代に於て、古典を其まゝ信じなければならぬといふ理由はない。(例へば佛說阿彌陀經を、釋迦自身の言葉から出たものでは無からうと考へることは自由である。是非さう信じなければならぬといふ理由はない。)私が儒



教の經典の成立年代を批判すると言つたら、徳川時代なら或は強い批難を受けたかも知らぬが、今は安心して言へる。文王、周公、孔子の教と雖も必ずしも全部を其の儘に信じなくてもよい、ただ我國の皇祖皇宗の遺訓に一致したものがあればそれを採るだけでよい。それで私は、易經の經と翼とを合せて、戰國時代の著作とする。而して伏羲、文王、周公、孔子の作とするのは傳說的のものであり、實は儒教の或る有力な學者で而も原始的宗教に興味を持つ者が、此の人々にかこつけて作つたものであると考へる。何故なら、私が支那古代の天文學を研究した結果から導けば、哲學は戰國時代に發生したものと考へねばならぬこととなり、而して易には既に哲學を含んで居るから、易經を戰國時代の著作であるとするのも止むを得ない議論である。

易には三通りある。夏の時代のものを「連山」といひ、殷の時代のものを「歸藏」といひ、周の時代のものを「周易」といふと、周禮に書いてあり、又同書に、大卜の官は三易の法を掌るとも書いてある。周禮は周代の官制を書いたものである。（此書は漢代に出來たといふ説が有力である。）連山、易、歸藏、周易、皆何れも六十四卦である。

後世に傳へられて存在するものは周易だけで、即ち周の文王が作つたものだと傳へられてゐるものである。

孟子の中にある思想と、易經の思想とは大分關係が深い。けれど孟子には、易の中の文句も、易といふこともない。だから易は孟子歿後に出來たものかも知れぬ。孟子より五十年ほど後の荀子には、易經が引用されてある。それで易經は、戰國時代の荀子以前に於て、孟子の學説を繼ぐ、或る學者が作つたものではないかと思はれる。其の年代は西紀前三世紀の前半の頃に當る。

## 五 易なる語の意義

易といふ言葉は「カハル」といふ意味を持つ。易は「カハル」ことを説く學問である。「カハル」とは宇宙の現象が常に易つてゐることを指したものである。宇宙の現象には、晝あれば夜あり、夜あれば晝がある。暑が行きづまれば寒となり、寒が行きづまれば暑となる。左に進んで極に至れば右にかへり、右に進んで極に至れば左に



かへる。宛も振子のやうに。あらゆるものは常にさういふ變化をしてゐる。甲があれば甲に反對する非甲があらはれる、ヘーゲルの辨證法は易の理論に相當するものである。ギリシャの哲學者ヘラクリイトスは「萬物は流れる」といふことを原理とした。易では「かはる」といふ。「かはる」と「流れる」とは同じことである。又佛教でいふ諸行無常即ち盛なる者は必ず衰へ、生れる者は必ず死すといふのも「かはる」といふことである。「かはる」は、易哲學ギリシャ哲學佛教哲學に共通する思想である。易では「かはる」がそのまま學說の名前となつて居るのである。

易の思想は「一陰一陽之謂道」(繫辭傳)といふ語の中に盡されて居る。これが即ち宇宙の理法である。一たび陰の極に達すれば陽に易り、陽のはたらきが強くなりきると陰に易る。例としてよいのは、冬のおしつまつた陰氣の極點に達すれば、少し暖氣を生ずる、暖氣の進んだ極點が夏で、この極點に達すると陰氣が発生して遂に再び冬となる。春夏秋冬は陰陽のうつり變りである。易は即ち一陰一陽を説くもので、自然界の理法は即ち人間界の理法である。天地を支配する理法と人間を支配する理法とは、別のものではない。自然界と人間界とを同一の理法の下に取

扱ふといふことは、支那古代の哲學を見るについて注意すべき大切な點である。理法は、自然界の變化の形迹の中からして、人間が発見するものである。支那古代の哲學では、理法其者が別に存在して、それが物理的現象を左右するとは言はない。「道」といふのは現象其物の動き方を言ふのである。

宋代の學者(程子朱子等)になつて、その説明を變へた。程朱は理法が物理的現象を離れて、最初から別に存在するといふのである。これが即ち「理」と「氣」の對立である。支那哲學はつまり二段に分れる。古代のものは、自然の現象の動くところに理法が形造られるのだといひ、宋代のものは、理法と現象とは區別して見るべきものだといふ。宋代の哲學は、佛教哲學から導かれたものである。其の頃儒學は衰へ佛教(禪)が盛であつたので、此等の學者は儒教の古典の中に、佛教の思想に負けないものがあると言つて、佛教を排斥しようとした。そこで古典の中にある「理」を、佛教で言ふところの「眞如」と類似のものとした。そして理と氣とを切離してしまつた。程子朱子等は敵の武器を取つて自分の武器としたのである。此の如く哲學を對等のものとして置いて、その立脚地からして佛教の出世間的な態度を攻撃



し、儒教の世間的道德を鼓吹した。これによつて佛教は其の勢力を失ひ、程子朱子等の哲學が支那全體の思想界を支配するやうになつた。

其の後に王陽明が出て、朱子の哲學に反對する。王陽明は理と氣とを對立させないで、理の中に氣を含ませてしまつた。そして自然現象を以て理法の現はれであるとし、其の理法は人心の内省によつて把握さるべきものとした。是は朱子よりも一層佛教の唯心論的哲學に接近したものである。併し朱子や王陽明の考へ方では、古代哲學が満足に理解されないもので、だんだんと學者が出ていろいろに研究した。日本の學者の中で、伊藤仁齋は今より二百五十年前に既に、自然現象の動くところに理法が形造られると説いた。支那ではこの種類の説は初めはあまり有力のものでは無かつたが、今から百五十年程前に戴東原が唱へてから有力になつた。自然現象の動く「スヂ」が理である。理はもと「スヂ」を意味する語で、木理は木のすぢであり、玉理は玉のすぢである。自然現象の動いて行く跡を認めて理とするので、これが古い哲學の思想である。王陽明は理の中に氣を含ませたもので、古代哲學は氣の中に理を含ませたものと言つてよい。



古い思想では一陰一陽するのが道で、朱子のは一陰一陽させるのが道であるとする。朱子の説で研究しては、古代思想のありのままをつかまへることはできない。朱子の易の註釋書を「周易本義」といふ。

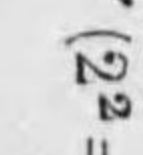

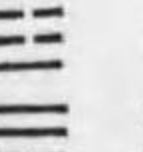
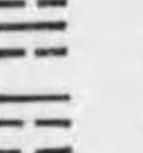
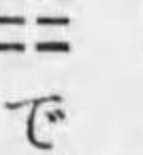
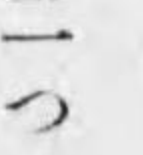
易は「かはる」といふことばであるが、古字は「易」で「蜥易（トカゲ）」といふ爬虫の形である。宋時代の説に、蜥易は一日に十二度色がかはる。それで易の學問は蜥易の色を變へるところから、それを借りて名としたものだといふ。これまで行つては行き過ぎた解釋である。一日に度々色を變へるのはカメレオンであつて、蜥易ではない。宋時代には西域と交通してゐたからカメレオンを知つてゐたのであらう。支那本土にはカメレオンはゐないと動物學者は言つてゐる。私の考へでは「かはる」といふ意味を持つ易なる語が、蜥易の「易」と同一の音であるから、其の字を借りて使つたまでだとするのがよいと思ふ。又「易」の字は日と月とを合せたのであるといふ説もある。「説文」には易の字をトカゲの象形と解き、一説に日月を合せたものといふとある。この日と月とを合せたといふ説は巧妙な様であるが、信じ難いものである。



## 六易の組織

易は哲學を應用して立てた。そのことは繫辭傳に「易有大極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。八卦定吉凶。吉凶生大業。」とあり、この大極・兩儀・四象・八卦が易の組織の本となる。易は宇宙の理法に基づいて人間界を處理して行かうといふので、理法としては自然界が本で、落ちつくところは人事界である。

大極は渾沌である。大極だけでは變化が起らぬから、それが二つに分れる。この二つに分れて變るところに易の根本がある。故に「易有大極。是生兩儀。」と言つてある。その兩儀は陰陽でもよいが、乾坤といふが一層適切である。大極が分れて乾坤の二つになるといふことを、大極  があつて、 となつたと圖解する。數學的に言へば、一が分れて二となつたとする。二即ち二つの反對する力が現はれ、いろいろに組合はされて宇宙の現象を生ずる。二を本とすれば、複雑なる現象をも二の幾乗で説明し得べきわけである。易は哲學に數學を加味したものである。

乾の印を一とし、坤の印を二とする。記號ではあるが、意味もある。一は奇數であり、二は偶數である。最初の組合せは二の二乗で、四が出来る、。二二二の四通り、これが「兩儀生四象」である。四つでは宇宙の現象や人事を説明するには足らぬから二の三乗を取つて八つにする。である。これは便宜的なことである。それは     で、二つあるものを三つづつ取つてあらゆる變化を作ると、この八つになる。宇宙の現象及び人間の道德的規範をこの八つを本として考へる。四象には別に名が無いが八卦には名がある。(卦は卦といふ。漢音「くわ呉音け」で「かける」といふこと。) 前に記した順序によつて、それらを

### 乾兌離震巽坎艮坤

と名づける。この並べ方は、乾兌離震は下が皆續き、巽坎艮坤は下が皆きれて居り、上の段で言へば續いたのときれたのが一つづつ代る代るになつて居り、真中は二つづつ代る代るになつて居る。かう組織が立つてゐるから、すぐ覺えられる。

この八つの名は道德的意味をもつたものである。即ち「乾、健也。」で「すこやか」の性



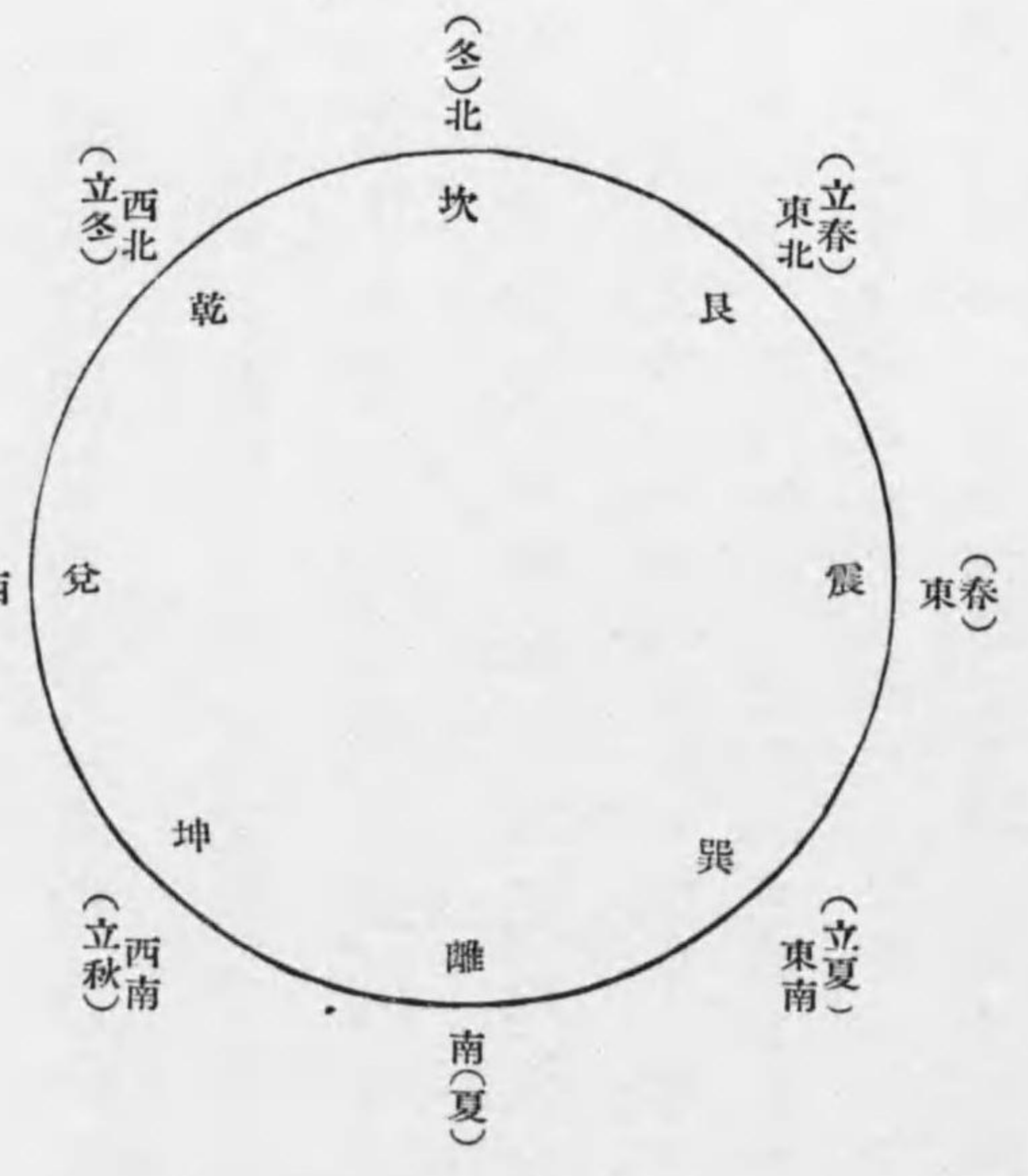
質を示す。「坤順也」で「やさしい」。乾と健とは音が同じく、坤と順とは音が似て居る。健順と言はずに乾坤としたのは特に言葉を神祕にしたのであらう。この様に易は宇宙現象を數であらしたものであるが、同時に又人間界の事をも示して居る。八卦の相互の關係を述べたものが説卦傳にある。「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯、數往者順、知來者逆、是故易逆數也。」これは自然界のものを取つて八卦に名前をつけたもので、前の乾兌離震巽坎艮坤に當てると、

天澤火雷風水山地

となる。澤は沼のやうなところ、沼澤である。不相射とはお互にくつつく。將來のことをはかることは逆へること。過去のことを知るのは順である。かういふ様にして八つのうち二つづつの組合せを生ずる。もう一つの並べ方に、

- 乾父      震長男      坎中男      艮少男
- 坤母      巽長女      離中女      兌少女

といふのもある。前の四つをば男性としてそれを陽卦といひ、後の四つをば女性としてそれを陰卦といふ。まだ其の外に一つある。それは方角と季節とに配當する方法である。(左上圖)



「帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、說言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮、萬物出乎震、震東方也、齊乎巽、巽東南也、齊也者、言萬物之潔齊也。」

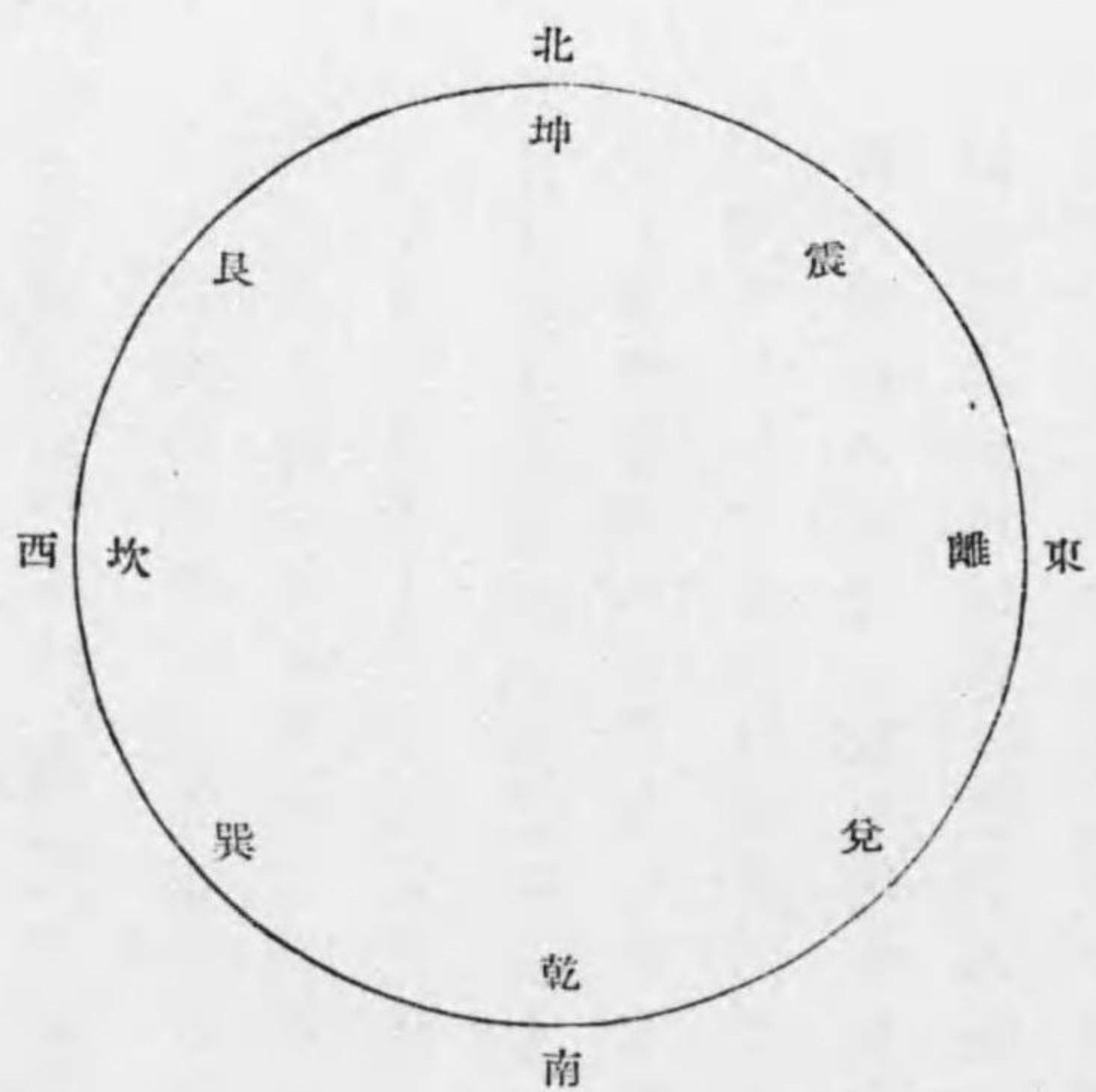


離也者。明也。萬物皆相見。南方之卦也。聖人南面而聽天下嚮明而治。蓋取諸此也。坤也者。地也。萬物皆致養焉。故曰致役乎坤。兌。正秋也。萬物之所說也。故曰說言乎兌。戰乎乾。乾。西北之卦也。言陰陽相薄也。坎者。水也。正北方之卦也。勞卦也。萬物之所歸也。故曰勞乎坎。艮。東北之卦也。萬物之所成終而所成始也。故曰成言乎艮。

帝は天帝、上帝。天帝が萬物を作ると考へる。哲學であつて宗教である。說言はよろこぶ。勞は休息。潔齊はきよまる。相薄は顔を見合せる。南面、天子南面といふことは離の卦をもととして考へたとする。致養は地から養分を取る。兌を秋とするから、震が春となり離が夏となり坎が冬となる。従つて巽は立夏、坤は立秋、乾は立冬、艮は立春となる。立春は節分の翌日で、春の初に當り、萬物が終る時であり、而して再び發生を始める時である。このやうに季節や方角を織込んで八卦の順を説いたのである。

宋の邵康節は、八卦の順序に二通りありとした。(朱子は邵康節の説を大分うけ入れてゐる。)即ち今迄述べたものを後天の順序とし、先天の順序は別にありといふ新しい説を立てた。

先天の順序といふのは(左圖)



である。併し古代の易を考へる場合には、この先天の順序は全く捨ててしまつてもよろしい。

說卦傳の初の文は、伏羲氏が易を作つた時の考へ方を書いたものである。

「昔者聖人之作易也。幽贊於神明而生蓍。参天兩地而倚數。觀變於陰陽而立卦。發揮於剛柔而生爻。

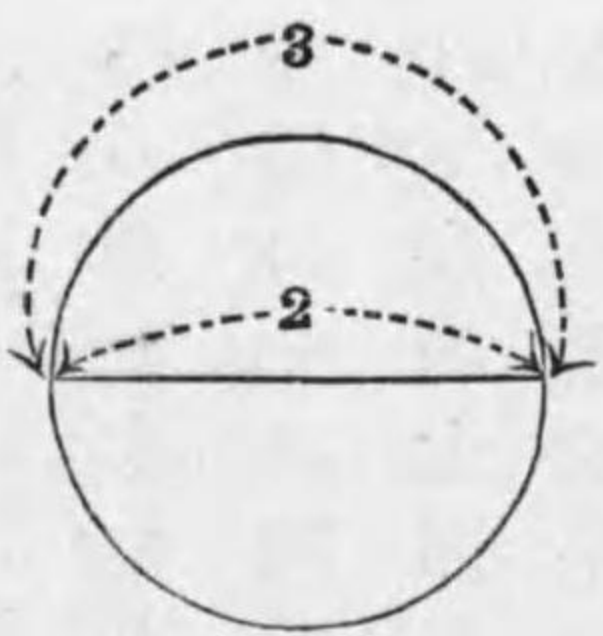


和順於道德而理於義窮理盡性以至於命

これは易の思想をよく言ひ表してゐる。易は全く道德的のものである。幽賛は自然に感得する。神明は上帝。生善。善は「メドギ」と讀む。長い莖をもつてゐてぞくぞく生える草である。蒿の類と記してある、今の「のこぎりさう」又は「はごろもさう」と呼ぶものである。神様の思召で発見したとして神秘的の意味を加へる。今は竹で作り筮竹といふが、竹は代りのもので、善草の莖を用ふるのが本當である。これは數を計算する器械である。

參天兩地は乾坤に數を與へたのである。乾に三、坤に二といふ基礎數を與へ、計算の場合には、乾は三の三倍の九を用ひ、坤は二の三倍の六を用ふ。どうして天三地二であるか、これは數學的のものである。支那の古く用ひた圓周率は三であつた。其の後追々精密になつた。圓周率を  $\frac{355}{113}$  で表はすのは西洋でもやるが、支那の方には西洋よりも古い書物にある。西洋人はそれを西洋から傳はつたものと見て後で書き入れたのだといふがさうではない。それで圓周率を三とするのは  $\frac{355}{113}$  を用ひたより以前のことである。  $\frac{355}{113}$  の記録

は隋書にある。「天圓地方」などと漢代の書に出てくるが天は圓いと考へて三とし地は方形と考へて二としたのである。(次圖參照)



天地の現象の變化するところを、陰陽の二種の作用に歸して、それを本として卦を立てることにした。陰陽といふことは、陰は「かげ」で暗い寒い縮まるといふことを意味し、陽は「ひなた」で明るい暖かい伸びるといふことを意味する。陰陽は又剛柔といふ形で表はれる。陽は

剛で陰は柔である。剛柔の思想を充分に表はして、ここに爻といふものを作る。「發揮於剛柔而生爻」といふのである。爻とは卦の六本の一つ一つをいふ。「和順於道德而理於義」と言つて道德といふことを何時も離れぬ。

性は即ち良心である。孟子の性善論と同じである。性を盡して命に至るといふことは、良心を充分に發揮して天命を全うする義で、中庸の「天命之謂性」と併せて考ふべきものである。又カントの「無上命法」と似て居る。天の神様の命令は、一陰一陽即ち道で、夫が人々の心に備はつてゐるのが良心である。良



心に順ふのは天命に順ふのである。  
 天命に順ふのは、即ち天命に歸するのである。天を楽しんで命を知るのが易の目的である。換言すれば自然界の理法に従つて如何なる時に於ても充實した道徳的生活を行ふにあるのである。

昔者聖人之作易也。將以順性命之理。是以立天之道曰陰與陽。立地之道曰柔與剛。立人之道曰仁與義。兼三才而兩之。故易六畫而成卦。分陰分陽。迭用柔剛。故易六位而成章。

良心の動き方を考へて易を作つたのである。

天の道の中に陰と陽とがある。即ち動いて夜となり晝となり互に交代する。それで晝の太陽を陽のかたまりとし、夜の月を陰のかたまりとする。地の中にも剛い陽と柔い陰とがある。良心のはたらきの中にも陰と陽とがある。仁が他人を博く愛するのは、陽の伸びるやうなはたらきであり、義が自己を正しく保つのは、陰の引きしめるやうなはたらきである。だから天の道を陰陽

とし、地の道を剛柔とし、人の道を仁義とする。而して宇宙の理法は一貫してゐる。故に人のはたらきは萬物に通じて、それを支配する力をもつ。それで天神地祇に對して、人の神即ち聖人がある。この三つを三才といふ。そこでこの三才の三つに陰陽の二つを組合はせると $2 \times 3 \times 2$ となる。即ち三と二との最小公倍数六を得る。この六の數の中に宇宙の變化の基礎が籠められると見る。この見方は餘程面白い。

八卦といふのは $2^3$ であり、更に $2^6$ で、六十四卦が出来る。三乗は三畫卦であるところの八卦になる手續を示し、六乗は六畫卦であるところの六十四卦になる手續を示す。一寸見れば、こじつけのやうだが、數學的の意義は充分備はつて居るのである。

六十四卦は、二通りのものを六つづつとつて、あらゆる變化を盡した數である。例へば一だけ六つ重なる $3 \times 3 \times 3$ の場合もあり、一だけ六つ重なる $3 \times 3 \times 3$ の場合もある。この六つ重なつたものを二段に分けて考へる。上を上卦といひ、下を下卦といふ。又上を外卦といひ、下を内卦といふ。(左圖參照) 内外といふ意味



外(☰)上  
内(☷)下

は、この一つの卦の意義を説く場合に、はたらきかける性質を與へてあるのが外卦で、受身の性質を與へてあるのが内卦である。人民と君主との關係は、はたらきかけられるものとはたらきかけるものとの關係である。自分と自分でないものとの對立である。即ち内と外との關係である。今この六つに就いていふと、下から上へ上る程はたらしきかけるものとなる。六つに名をつけるに、

- 君主を離れた超然たる位置
- 君主の位
- 役人の更に上の階級
- 役人の上の階級
- 役人になつたところ
- 人民

となり、昔の人は

- 事外人
- 君主
- 卿
- 大夫
- 士
- 庶人

とも考へた。これを今のことはでいふと、

- 位を去つた人
- 天子
- 親任官
- 勅任官
- 奏任官
- 被治者(平民)

となる。かう下から上にいく程はたらしきかける性質に於て勝るものとなり、上下の二段に分けていふと、下三つがはたらきかけられるものとなる。内外上下の關係は、受身と能動即ち Passive と Active の關係と見てもよい。

六十四卦は、天地人三才と、陰陽二元との上に現はれた三と二との最小公倍数なる六を基礎として、一と一との有らゆる組合せを盡したものであるから、自



然界及び人間界のすべての現象は、この六十四卦の中の何れかに當てることのできるものと考へられた。六畫を上下に分けて三畫づつにしたのは、天地人の三つで宇宙に存在するものの大區分が示されるからである。物はすべて上と下と中との三に分けて考へられ、三の數で一まとまりがつく。二ではまだまとまりがつかない。木を二本ぶつちがへただけではしつかりしない。三本をぶつちがへて立てるとしつかりする。又一本の棒を考へても後と先と真中の三つの部分がある。すべて真中の無いものはない。人間の瞬間の行爲にも、ほどよい「中」のことで、過ぎたことと、及ばないことの三つがある。それ故に、特に中に重きを置く。飯を食ふべき時に食はなければ中を得ない。話を聴くべき時に聴かなければ中を得ない。又人の身分でいふと、勅任官は行き過ぎてあやふくなるが、被治者では沈みすぎる。中を得た奏任官がよい。上卦でも大臣となるに危い。いろいろの目に遭ひ、又君主の御機嫌を損ずるやうなこともある。君主となるに、ごつしりとして中を得てゐる。位を去れば行き過ぎてゐる。だから中が肝腎である。中を考へるといふことは、即ち

三を考へることである。「兼三才而兩之」といふ易の文句は、三畫を宇宙の間で最も大なる天地人の三者に比較したのであるが、大きな事物でも小さな事物でも三つに分けて考へるといふことは必要のことである。「兩之」は、三畫を内外上下の關係によつて、二つ重ねて六畫にすることを言つたのである。内外上下の關係は、即ちまた陰陽の關係である。

易は自然界の理法をとつて、直に人事界の理法としたものであるから、易によつて自然界の理法をも説くことができるが、人事界の理法を説いて、結局「窮理盡性以至於命」ところが最も大切である。

(六十四卦の二々を説明する前に説卦傳の殘つてゐるところを讀んでおかう。)

雷以動之。風以散之。雨以潤之。日以暄之。艮以止之。兌以說之。乾以君之。坤以藏之。

八卦のはたらきが、それぞれ特色を有することをあらはしてゐる。

艮は山である。兌は澤である。地は萬物を藏するところであるから「藏之」と



いふ。

神也者。妙萬物而爲言者也。動萬物者。莫疾乎雷。撓萬物者。莫疾乎風。燥萬物者。莫熯乎火。說萬物者。莫說乎澤。潤萬物者。莫潤乎水。終萬物始萬物者。莫盛乎艮。故水火相逮。雷風不相悖。山澤通氣。然後能變化。既成萬物也。

萬物の中には八卦のはたらきが入つてゐる。或は雷のはたらきを強く持つてゐるものもあるであらう。或は風のはたらきを強く持つてゐるものもあるであらう。或は火、或は澤、或は水、或は山のはたらきを強く持つてゐるものもあるであらう。人の氣質も亦さうである。

神は影も無く形も無く、見ることも聴くことも出来ないが、萬物の中に籠つてゐる。萬物の中に籠つて、各種各様のものとしてあらはれてくるから「爲言者也」といふ。言とは名といふことと解釋することが出来る。即ち各種各様の

ものに附けて其の區別を示すところの名である。

天地萬物は神のあらはれであるから、何物をも皆神と言つてもよい。陰陽を神と言つてもよい。大極を神と言つてもよい。四象を神と言つても、八卦を神と言つても、山や川を神と言つてもよい。この様に、易は神を認めて居るが、而も超越的の神を認めない。易の宗教的意義は汎神論である。萬有神教である。而してそれは唯一の神に統一される。それを大極といひ、上帝、又天帝といふ。この唯一神が、限り無い種々なる形に現はれて、自ら變化してゆく。人事界の現象も神の變化のあらはれである。これが「說卦傳」の易の思想であり、又易全体の思想である。

この神の變化を六十四卦に依つて代表する。併し變化は無限で、それは二の無限乗であらはずべきであるが、説明を簡單にする爲に、天地人と陰陽との數を取り入れて、假りに二の六乗であらはしてある。陰が進むと陽があらはれ、陽が進むと陰があらはれ、陰と陽とがバランスをとつて進んでいく。かういふ變化が永久に続く。この陰陽自體の永久に続く變化、其の者は變化しない



ものであると言へる。故に易は變易へんえきにして不易ふえきである。六十四卦は即ち變  
る方面を六十四通に分けて考へたのである。

六十四卦

乾乾 上下	坤坤 上下	巽乾 上下	坎乾 上下	兌震 上下	離震 上下	坤兌 上下	兌震 上下	坤艮 上下
乾	泰	小畜	需	屯	同人	謙	隨	臨

離離 上下	兌巽 上下	艮乾 上下	坤震 上下	離艮 上下	巽坤 上下	艮巽 上下	震坤 上下	離乾 上下
離	大過	大畜	復	賁	觀	蠱	豫	大有

坎坎 上下	艮震 上下	乾震 上下	艮坤 上下	離震 上下	坤兌 上下	兌震 上下	坤艮 上下	乾離 上下
習坎	頤	无妄	剝	噬嗑	臨	隨	謙	同人

離離 上下	兌巽 上下	艮乾 上下	坤震 上下	離艮 上下	巽坤 上下	艮巽 上下	震坤 上下	離乾 上下
離	大過	大畜	復	賁	觀	蠱	豫	大有





六十四卦は變化の種類を分けて示したのであるが、この六十四卦相互の間には何等かの系統が成立つて居るだらうと、易の作者は考へた。それに系統をつけた





ものが序卦傳である。――よほど獨斷的のものではあるが、――序は順序である。これはもうあつさり讀んでゆくことにする。

有<sub>リ</sub>天地<sub>ニ</sub>然後<sub>ニ</sub>萬物<sub>ヲ</sub>生<sub>ズ</sub>焉。

最初に天とそれに對立する地とをおく。天は乾、地は坤である。

盈<sub>ツル</sub>天地<sub>ノ</sub>之間<sub>ニ</sub>者<sub>ハ</sub>唯<sub>ニ</sub>萬物<sub>ヲ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>屯<sub>ヲ</sub>屯<sub>者</sub>物<sub>ノ</sub>之<sub>初</sub>也。

屯は「チュン」と讀む。草の芽などが出かかつて何かにおさへられてゐるさまである。

物<sub>ヲ</sub>生<sub>ズ</sub>者<sub>ハ</sub>必<sub>ズ</sub>蒙<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>蒙<sub>ヲ</sub>蒙<sub>者</sub>蒙<sub>也</sub>物<sub>ノ</sub>之<sub>穉</sub>也。

蒙はかぶつてゐること。

卦を並べる仕方に理法がある。屯<sub>三三</sub>をひつくりかへしたものが蒙<sub>三三</sub>である。若しひつくりかへしても尙元通りになるものは、更に陰陽をとりかへる。乾<sub>三三</sub>の次に坤<sub>三三</sub>を置くのは、ひつくりかへして更に陰陽をとりかへ

たものである。此外陰陽をとりかへるものには習坎<sub>三三</sub>から離<sub>三三</sub>、中孚<sub>三三</sub>から小過<sub>三三</sub>、既濟<sub>三三</sub>から未濟<sub>三三</sub>、頤<sub>三三</sub>から大過<sub>三三</sub>がある。

物<sub>ヲ</sub>穉<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>養<sub>ル</sub>也。故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>需<sub>ヲ</sub>需<sub>者</sub>飲<sub>ル</sub>食<sub>ノ</sub>之<sub>道</sub>也。飲<sub>ル</sub>食<sub>ニ</sub>必<sub>ズ</sub>有<sub>リ</sub>訟<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>訟<sub>ニ</sub>訟<sub>必</sub>有<sub>リ</sub>衆<sub>起</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>師<sub>ヲ</sub>師<sub>者</sub>衆<sub>也</sub>衆<sub>必</sub>有<sub>リ</sub>所<sub>比</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>比<sub>ヲ</sub>比<sub>者</sub>比<sub>也</sub>比<sub>必</sub>有<sub>リ</sub>所<sub>畜</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>小<sub>畜</sub>物<sub>畜</sub>然<sub>後</sub>有<sub>リ</sub>禮<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>履<sub>ヲ</sub>

需は「もとむる」である。

師は「もろもろ」である。

比は「したしむ」肩を並べて親しみくつつきあふ意である。

畜は「たくはへ」る。

履は「ふむ」で禮儀を履むこと。

全體の考へが反動の形である。左へ行けば次に右へ行く。

履<sub>シテ</sub>而<sub>テ</sub>泰<sub>シ</sub>然<sub>後</sub>安<sub>シ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>泰<sub>ヲ</sub>泰<sub>者</sub>通<sub>也</sub>物<sub>不</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>終<sub>ト</sub>通<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>受<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>否<sub>ヲ</sub>物



不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>否<sub>レ</sub>。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>同人。與人<sub>レ</sub>同者物必歸焉。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>大有。有大<sub>レ</sub>者不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>盈。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>謙。有大而能謙必豫。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>豫。

否は「ふさがる」

同人は同志を集める。

謙は謙遜、儉約、ひきしめていく。

豫は「やすんずる」こと。

豫必有<sub>レ</sub>隨。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>隨。以<sub>レ</sub>喜隨人者必有<sub>レ</sub>事。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>蠱。蠱者事也。有事而後可<sub>レ</sub>大。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>臨。臨者大也。物大然後可<sub>レ</sub>觀。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>觀。可<sub>レ</sub>觀而後有所<sub>レ</sub>合。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>噬嗑。噬嗑者合也。物不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>苟合而已。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>賁。賁者飾也。致飾然後亨則盡矣。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>剝。剝者剝也。物不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>終盡。剝窮上反<sub>レ</sub>下。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>復。復則不妄矣。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>无妄。有<sub>レ</sub>无妄然後

可<sub>レ</sub>畜。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>大畜。物畜然後可<sub>レ</sub>養。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>頤。頤者養也。不<sub>レ</sub>養則不可<sub>レ</sub>動。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>大過。物不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>終過。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>坎。坎者陷也。陷必有所<sub>レ</sub>麗。故受<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>離。離者麗也。

かういふやうな考へ方で順序を立てたものである。中中おもしろい よく六十四卦を並べてかやうな理窟をつけたものだと思ふ。以上が上經の順序で、以下は下經の順序である。

○有<sub>レ</sub>天地。然後有<sub>レ</sub>萬物。有<sub>レ</sub>萬物。然後有<sub>レ</sub>男女。有<sub>レ</sub>男女。然後有<sub>レ</sub>夫婦。有<sub>レ</sub>夫婦。然後有<sub>レ</sub>父子。有<sub>レ</sub>父子。然後有<sub>レ</sub>君臣。有<sub>レ</sub>君臣。然後有<sub>レ</sub>上下。有<sub>レ</sub>上下。然後禮儀有所<sub>レ</sub>錯。

秩序の上に禮儀が起つてくる。君臣を夫婦父子の後に言つたのは注意すべきである。

易は陰氣と陽氣とが互に相感する所を微妙に説いてゐる。男と女とは感ず



るものであるから下經は咸卦から始まるのである。

夫婦之道不可不久也。故受之以恆。恆者久也。物不可以久居其所。故受之以遯。遯者退也。物不可以終遯。故受之以大壯。物不可以終壯。故受之以晉。晉者進也。進必有所傷。故受之以明夷。夷者傷也。傷於外者必反其家。故受之以家人。家道窮必乖。故受之以睽。睽者乖也。乖必有難。故受之以蹇。蹇者難也。物不可以終難。故受之以解。解者緩也。緩必有所失。故受之以損。損而不已必益。故受之以益。益而不已必決。故受之以夬。夬者決也。決必有所遇。故受之以萃。萃者聚也。聚而上者謂之升。故受之以升。升而不已必困。故受之以困。困乎上者必反下。故受之以井。井道不可不革。故受之以革。革物者莫若鼎。故受之以鼎。主器

者莫若長子。故受之以震。震者動也。物不可以終動。止之。故受之以艮。艮者止也。物不可以終止。故受之以漸。漸者進也。進必有所歸。故受之以歸妹。得其所歸者必大。故受之以豐。豐者大也。窮大者必失其居。故受之以旅。旅而无所容。故受之以巽。巽者入也。入而後說之。故受之以兌。兌者說也。說而後散之。故受之以渙。渙者離也。物不可以終離。故受之以節。節而信之。故受之以中孚。有孚者必行之。故受之以小過。有過物者必濟。故受之以未濟。終焉。

こじつけのやうだがうまく考へたものである。この間に非常な常識がある。人事界の變化を常識的にわかるやうに書いてある。その點でこじつけであつてこじつけではない。これを書いた人は人事界のことをよく理解した人である。これを讀んでゐると思ひ當るところがあつて實に教訓的である。



或人はこじつけであるといふ點から、上下經よりはずつと後世の作であるといふが、それは賛成することは出来ない。六十四卦の名は、初からこの位の順序を考へてゐなければ、つけることが出来ないと思ふ。

卦を見てゆくに重要なこととして既に「中」とか「内外」とかいふことは話した。その他重要な事柄を順次述べよう。

○「應」といふことがある。

1と4と、2と5と、3と6と相應する。相應すべきものが、一方が陽で、一方が陰ならよろしい。同じ陽と陽、同じ

陰と陰とならよくない。

卦のはたらきを見るに「應」といふことを大事に取扱ふ。

○「比」とは隣同志をいひ、それは互に親しみ合ふものである。

陰陽を直ぐ男女と考へ、これから聯想によつて夜晝も出て来る。社會現象は男女の關係によつて生じてくる。男女の關係が無ければ子供がない。子供が出来なかつたら社會は成立しない。男女の關係が社會の基礎となるもの

である。それで「有天地。然後有萬物。有萬物。然後有男女。有男女。然後有夫婦。然後有父子。有父子。然後有君臣。」となり、これが萬物發展の順序である。君臣の義を先にするといふのは國家が成立した上での道德的の立場から言つたことである。

○「中」といふことに對して「正」といふことをいふ。「正」とは

1 2 3 4 5 6といふ番號の上で、奇數番號は陽に屬し、偶數番號は陰に屬す。陽の爻が陽の番號の所に居れば「正」で

あり、それに違へば「不正」である。陰の爻が陰の番號の所にゐれば「正」であり、それに違へば「不正」である。各爻にこのやうな説明をつける。

それから序に「九」と「六」といふ數について一寸お話ししておく。これは「天三地二」繫辭傳から起つたもので、その各を三倍すると九六となる。何故に三倍したか、私の考へでは「兩儀生四象」とあり四象とは老陽少陰、少陽老陰のことで、この四象に數を與へるとして、老陽を「三」とし老陰を「二」とすれば中間の少陰、少陽に數を與へることが出来ないし、又各を二倍して老陽を「六」とし老陰を「四」としても中間の少陰、



少陽に都合よく數を與へられない。そこで三倍して老陽を「九」とし老陰を「六」とすると中間の少陰少陽に各「八」「七」といふ數を與へることが出来る。——四象にそ

二……老陰(六) れぞれ數を與へるために、老陽を「九」とし、老陰を「六」としたもので

二……少陽(七) あると推測する。そこで老陽は變つて陰となり、老陰は變つて

二……少陰(八) 陽となる。老陽老陰は行きづまりで變るのである。少陰と少

二……老陽(九) 陽とはまだ行きづまらないから變らない。行きづまるとか行

きづまらないとかいふことは、占の上で大切な事である。

### 七 占筮法

易の占筮の仕方は、繫辭傳に示されてある。

「天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。天數五。地數五。五數相得。而各有合。天數二十五。地數三十。凡天地之數。五十有五。此所

以成變化而行鬼神也。大衍之數五十。其用四十有九。分而爲二以象兩。掛一以象三。揲之以四。以象四時。歸奇於扚。以象閏。五歲再閏。故再扚而後掛。乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。凡三百有六十。當期之日。二篇之策。萬有一千五百二十。當萬物之數也。是故四營成易。十有八變而成卦。八卦而小成。引而伸之。觸類而長之。天下之能事畢矣。顯道神德行。是故可與酬酢。可與祐神矣。子曰。知變化之道者。其知神之所爲乎。」

の文章が基礎になる。

「天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。」は、天を奇數とし地を偶數として、一から十までを天地に配當したものである。

「天數二十五」は上記の奇數の合計、「地數三十」は偶數の合計である。



「十」で数は完成する。「十」で一きりつけることは自然である。指は十本で、数は指で數へるからさうなるのである。十進法は支那ばかりでなく、西洋でもさうである。

「五十五」の數によつて、宇宙の原理を解くことが出来るとする。數學と哲學とを結びつける考へは、支那のみではなく、ギリシヤのピタゴラスも同じである。ピタゴラス學派は陰陽二元の對立關係をつくり、この關係からすべてを表はして、それを數理にあてはめるのであつて、易の考方もこれと一致してゐる。現代の學問でもやはり哲學と數學とは離るべからざる關係を有する。

「大衍之數五十」衍は「ひろがる」である。「五十」の意味はよく分らぬが、「五十五」に接近した數で、計算するに都合がよいから採つたのであらう。(筮竹を五十本取つて見せる。)そして一本除いて「其用四十有九」となる。即ちはたらくものが四十九本といふことである。四十九本を二分し「以象兩」兩は陰陽である。「掛一象三」の「一」は大極で、それを陰陽と合せれば「三」となる。「揲之以四象四時」の四時は「春夏秋冬」である。即ち又四象(老陰・老陽・少陰・少陽)に相當するものである。

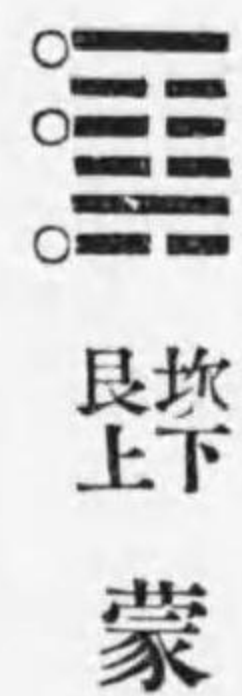
このやうに類推して考へるのは昔の人の學風で、この方法によつて宇宙の現象を取扱ふことができると思つて居たのである。

「歸奇於扚以象閏」奇は四本づつ數へた餘りといふこと。その餘りは一本か二本か、三本か、四本かである。五歲再閏は五年に二回閏月が來るといふのである。十九年に七回閏月があるとするのは、非常に精密で實際と違はぬが、これは其の概略の數を取つたのである。易の背景に天文學があることは、これによつても知られる。「故再扚而後掛」は、二分した片方を同じく四本づつ數へて餘りを出す。この二回やつて餘つたものと、初の「掛一象三」の一本とを合せたものを取除いて、更に今やつた方法を三度繰返す。三度繰返して一爻を得る。それ故に一卦即ち六爻を得るには三の六倍なる十八度繰返すこととなる。だから「十有八變而成卦」のである。

もう一度この筮法をやつて見よう。(筆者曰ふ)筮竹を取つて上に記す如く行ふ。第一爻だけを筮竹によつて求めたが、第二爻以下は「第一爻と同じこと」を繰返すので時間を費すからと言つて、算木だけ並べられた。このやうに「分掛



揲歸して假にこんな卦を得たとする。



艮上下 蒙

丁度「蒙」の卦で教育に關係のある卦である。而して○印を「九」「六」の老陰老陽となつたものと假定すると、この「蒙」の卦は「歸妹」の卦に變ずる傾向を有するものとなる。



震上下 歸妹

これを「蒙」の歸妹に之くに遇ふといふ。かうして神妙にやれば現在諸君の運命をも占ふことができるのであるが、私はそこまではまだ修行が足りない。筮竹の計算法を表で示すと次の様である。

50.....筮竹の總數  
-1  
49.....其用四十有九

$\frac{-1}{48}$ .....これを二分する } 三に象る  
二分した一方をaとし、他方をbとする。

a + b		
↓	↓	
4x+1...4y+3	— 餘りの合計	1+3=4
4x+2...4y+2	同	2+2=4
4x+3...4y+1	同	3+1=4
4x+4...4y+4	同	4+4=8

二分したa,bの各を四本づつ數へた場合  
aの方に一本餘ればbの方に三本餘り、  
aの方に二本餘ればbの方に二本餘り、  
aの方に三本餘ればbの方に一本餘り、  
aの方に四本餘ればbの方に四本餘る、  
故に餘りの合計は四本或は八本の二通である。然るに一爻を得るには、以上の變化を三回繰返す。而して各回毎に餘りは四本或は八本である。除いた一本と三回の餘りの合計を加へた筮竹の數は次の四通の中の一つとなる。

- I. 1+4+4+4=13
- II. 1+4+4+8=17
- III. 1+4+8+8=21
- IV. 1+8+8+8=25

49本から各の場合を引いて、残る筮竹の數を求め、これを四で割ると次のやうになり、

- (49-13)÷4=9(老陽)
- (49-17)÷4=8(少陰)
- (49-21)÷4=7(少陽)
- (49-25)÷4=6(老陰)

而して老陽・老陰は變化し、少陽・少陰は變化しない。



そこで「乾之策二百一十有六」といふところの策とは筮竹のことである。「乾」は陽ばかりで、而も其の各爻が變る場合をのみ取扱ふのであるから、標準的のものとしては老陽の爻が六爻ある場合を考へる事になる。老陽の一爻を得た筮竹の数は前表に示すやうに、 $120 - 13 = 107$  即ち三十六本である。故に乾之策は

$$\begin{array}{r} \text{—} 36 \\ \text{—} 36 \\ \text{—} 36 \\ \text{—} 36 \\ \text{—} 36 \\ \text{—} 36 \\ \hline 36 \times 6 = 216 \end{array}$$

「二百一十有六」となる。同様にして「坤之策百四十有四」を求め得る。即ち老陰の一爻を得た筮竹の数は  $49 - 25 = 24$  であるから、

$$\begin{array}{r} \text{---} 24 \\ \text{---} 24 \\ \text{---} 24 \\ \text{---} 24 \\ \text{---} 24 \\ \text{---} 24 \\ \hline 24 \times 6 = 144 \end{array}$$

「百四十有四」となる。

「凡三百有六十。當期之日」は  $216 + 144 = 360$  で即ち一年の日數である。ここにも

天文學の背景がある。

「萬有一千五百二十。當萬物之數」の 11520 は、六十四卦全部の策の數である。而して陰爻の數と陽爻の數とは等しいから、陰爻陽爻各の數は  $64 \times 6 \div 2 = 192$  である。故に策の數は

$$36 \times 192 + 24 \times 192 = 60 \times 192 = 11520$$

陽の策 陰の策

となる。

「能事畢」は、凡ての變化は盡くされるの意。

「酬酢は交際するの義。

「知變化之道者其知神之所爲乎。」易は上帝のはたらきを表はしてゐて、現在及將來を知ることが出来るものであると見るのである。

### 八河圖・洛書



易に關係して「河圖洛書」といふことがある。「繫辭上傳」に「天地變化、聖人效之。天垂象、見吉凶。聖人象之。河出圖、洛出書。聖人則之」といふ文章がある。黄河から龍馬が或る圖形を背負つて現れ出で、又黄河へ流れ込む洛水（洛陽は洛水のほとりにある）に此名がある。から書物が浮び出た。この河圖洛書を本として易を考へたといふのである。

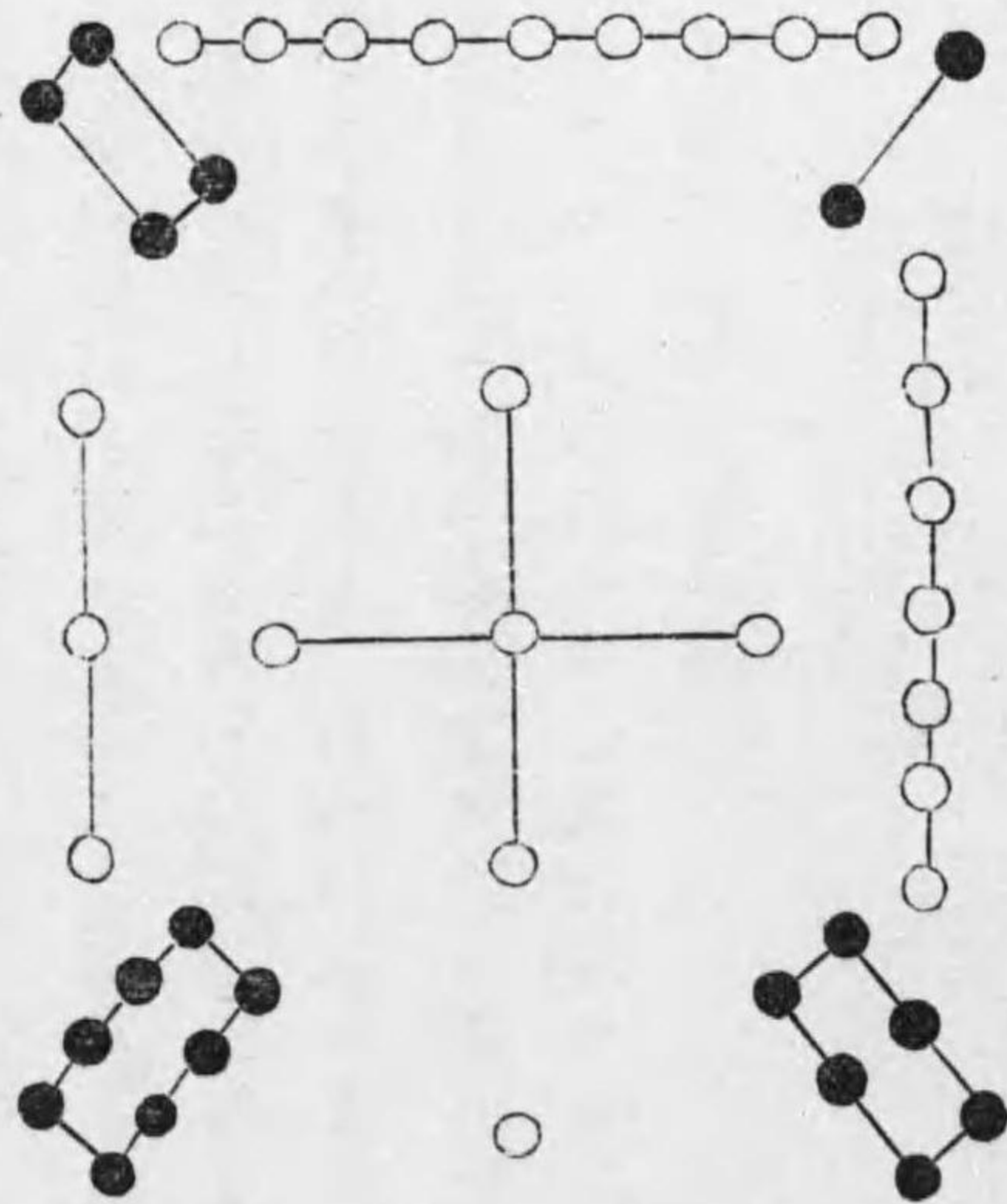
河圖洛書何れもよく分らないが、漢代の學者は河圖は八卦であり、洛書は書物のやうになつてゐるもので、書經の中の洪範の文章六十五字がそれであるといふことを言つた。其の後、洛書を以て

2	7	6
9	5	1
4	3	8

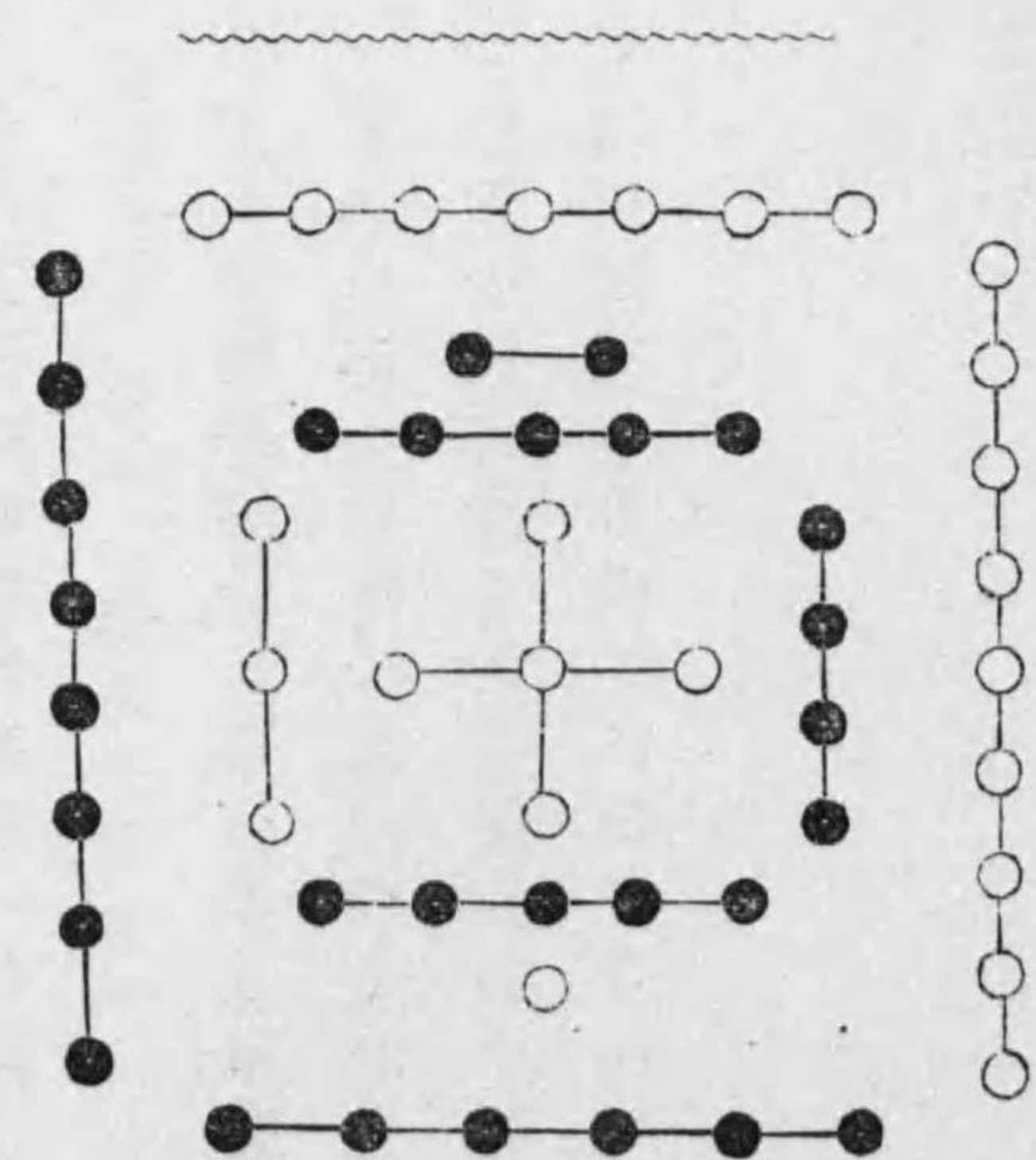
の圖形とする説も生じた。これは、どの行もどの列も、又斜に數へても、その和が十五となるものであり、西洋では Magic square をいふ。支那ではこれに神祕の意義を與へた。

西洋でも古は同様であつた。宋時代に至つて、考へ方が漢代とは變り次のやうになつた。それは朱子の易學啓蒙にも出て居る。併し朱子自身の考へたものではなく、それより以前の邵康節などの説に本づいたものである。

洛書



河圖



こんな具合に神祕の感を持たせたのである。この河圖は即ち繫辭傳にあるところの天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十を圖に作つたもので、白丸は天數を、黒丸は地數を示して居るのである。



九陽卦・陰卦

「繫辭下傳」に「陽卦多陰。陰卦多陽。其故何也。陽卦奇。陰卦耦。其德行何也。陽一君而二民。君子之道也。陰二君而一民。小人之道也。」とある。

これは、八卦に價値を與へて、陽卦・陰卦とするが、その陽卦・陰卦と名づくる原則を書いてあるのである。一つの陰が君となり、それに二つの陽の民がつくから陰の卦となり、一つの陽が君となり、それに二つの陰の民がつくから陽の卦となる。それで八卦は次のやうに陽に屬するものと、陰に屬するものとに分けられる。

I 陽に屬するもの(男)

乾(天)

震(雷)

坎(水)

艮(山)

☰ 父

☳ 長男

☵ 中男

☶ 少男

II 陰に屬するもの(女)

坤(地)

巽(風)

離(火)

兌(澤)

☷ 母

☴ 長女

☲ 中女

☱ 少女

十 上經講義 — 乾・坤 —

この位お話しておいて愈々經文の講義をしよう。六十四卦中代表的のものは上經の初にある「乾・坤」の二卦である。この二つの卦を講義し、それから下經の中にある「家人」の卦と「睽」の卦とを講義する。この「家人」と「睽」とは明後日お話しする象山先生の易に必要な卦である。即ち象山先生の「礲卦」は「睽卦」から脱化したものである。而して「睽」は「家人」をひつくりかへしたものである。

卦を解釋するに「經」だけでは何の事か分らぬから「象傳」「象傳」を添へて讀まねばならぬ。「經」即ち「象」と「象」とを文王と周公とが繫けたものとし、象傳・象傳は孔子の作とすればこの間に五百年の隔りがある。併し其の實際を考へれば「象」「象」の辞と象傳



象傳とは大体に於て同時に出來たものでなければならぬ。若し象傳象傳がなければ經の文は殆ど何の意味であるかが分らぬ。

「象」は一卦の全體につき「象」は一卦の中の各爻について其の神祕的意義を文字に表はしたものであり、象傳は「象」を解釋したものであり、象傳は「象」を解釋したものである。それから「文言傳」といふのは「乾」と「坤」の二卦を象傳象傳に基づいて更に敷演したもので重要なものである。「文」とは「かざる」といふ意味である。



乾上

乾元亨利貞。○初九。潛龍勿用。○九二。見龍在田。利見

大人。○九三。君子終日乾乾。夕惕若厲。无咎。○九四。或躍在淵。无咎。○

九五。飛龍在天。利見大人。○上九。亢龍有悔。○用九。見群龍无首。吉。

〔象上傳〕○大哉乾元。萬物資始。乃統天。雲行雨施。品物流形。大明始終。六位時成。時乘六龍。以御天。乾道變化。各正性命。保合大和。乃利貞。首

出庶物。萬國咸寧。

六龍は乾卦の一爻一爻を龍と見て六龍といふのである。即ち潛龍見龍飛龍。亢龍等の類である。乾道は健なる道である。

天命は性である。天の力が人間の精神の中に現はれたものが良心で、これが天命である。

大和はすべて良心に順つて行ふこと。利はよろしい。貞は正しくて、かはらぬこと。

良心は絶えず動くもので、時に仁とあらはれ、時に義とあらはれる。即ち仁と義とが辨證法的發展をする。仁は陽であり、義は陰である。これが即ち良心論であり、孟子の所謂性善論である。人心のはたらきには、肉体の方面から出る慾望感情と、精神の方面から出る良心とがある。精神の方面から叡智を具へてあらはれる良心は正しいもので、これによつて肉体の方面から盲目的にあらはれる慾望感情を統御し得たものは聖人である。聖人出でて萬國咸く寧く平和になる。儒教では決して慾望感情を滅却せよとは言はぬ。ただそ



れを良心によつて統御することを必要とするのである。考へて見ると易は道德的教訓を多分に持つもので、而もその良心は精神作用の變化の上について見て行くもので、決して抽象的に固定させたものではない。良心のはたらきは、即ち一陰一陽の作用である。一陰一陽は宇宙の理法であるが、直ちに又道德論の根據である。良心は誠であり、眞理である。而して人間の精神に於ける自然の作用が良心である。その良心を内省し修養して其の極に達した人が聖人である。聖人の力は中庸にある「天地位焉、萬物育焉」といふ所まで及ぶのである。聖人の力によつて天もその地位を安全に保ち地もその地位を安全に保つのである。故に聖人は宇宙の中心である。易の思想と中庸の思想とはこの様に一致してゐる。換言すると一陰一陽は道即ち眞理で、それを完全に自覺し體得した人は聖人である。聖人によつて天地位し、萬物育し、宇宙の全體が幸福となることが出来る。又「孟子」はすべて良心から出發して人を教へて居るが、これも亦易や中庸の思想と一致する。儒教の良心論は、易と中庸とを離るべきでないから、それは「一陰一陽之謂道」か

ら説き始めるべきである。

〔象上傳〕○天行健。君子以自彊不息。○潛龍勿用。陽在下也。○見龍在田。德施普也。○終日乾乾。反復道也。○或躍在淵。進无咎也。○飛龍在天。大人造也。○亢龍有悔。盈不可久也。○用九。天德不可爲首也。

象傳は六爻の一つ一つを説明したもので、これによつて經文の神祕の句を多少理解することが出来る。

「天行健」と讀んでもよい。天の運行は少しも停滯せず、一瞬間も止まつてゐない。君子は其の精神の中に天の健なる道德的性質を充分に享受して自ら彊めて息むことがなく行動していく。彊は勉強の強の字と同じ。乾卦全體は自彊不息といふことを表はしてゐる。

初九とか九二九三といふことは各爻につける名前で、陽の爻のことを九といひ、陰の爻のことを六といふ。それで下から、初二三四五上と名づける。それ



で乾卦は下から、初九九二九三九四九五上九と呼ぶ。而して九と六とは老陽、老陰で、陰と陽とに變化する傾向を含んで居る。

上九  
 九五  
 九四  
 九三  
 九二  
 初九

初九の潜龍は働かぬがよい。これは身分も低く、人にも認められない。それで働かず時を待つがよろしい。さうすれば失敗する事もない。これは陽が下にあるからである。矢張り教訓的である。

龍は神祕的の動物で實在的のものではない。神様の類である。それが靈力を具へて居るものとされて居るところから、天子の譬とする。ここでは龍をもつて乾の徳を有する君子にたとへたのである。それは天子にもなるべき程の徳を有する君子である。

九二は見龍在田で、あらはれた龍が畑の上に出て居る。それは内卦受身の卦の三爻に於て中の位置を得て居る。最もよい地位に居る。仕事もできて、そ

の徳は四方に感化を與へる。徳施普也である。利見大人はこの九二が九五と相應することはいふ。大人は聖人と同じ。即ち相應する英明なる君主に認められるに丁度よい所に居る。それで下には居るが働いてよいところである。

九三は下ではあるが、少し上へ出過ぎたところである。然し乾なる徳を以て終日乾乾とつとめ、晩になつたら惕れて反省を怠らなければ、若は副へた詞危い地位には居るが咎は受けない。

九四は大臣の地位で、人を支配する階級に近づいた。然し中を得ない。或躍在淵で躊躇する。進み出ることにはできるが淵に待つて時期を見るのがよい。さうすれば咎を受けることはないが、勢に任せ君主を無視して專横の事をしてはならない。專横の事をして咎を受けることは、歴史が證明してゐる。

九五は飛龍在天で、君主としての中正なる位に居て思ひの儘に人を支配することができ、利見大人とある大人は九二を指したので五と二とは相應じて上の立派な君主が下の立派な人物を用ひて立派な政治を行ふことを言つ



たのである。

上九になると地位は中を過ぎてゐる。亢龍は上り過ぎた龍で、後悔するやうな事があるから慎まなければならぬ。盈不可久也で、君主としておごり高ぶると久しく續くものではない。「文言傳」に「貴而无位、高而无民、賢人在下位、无輔。是以動而有悔也。」とあるは、貴い位ではあるが中を得て居らぬ。无位とは中正の位を踏まぬといふこと。君主として高い地位に上り過ぎて初九の位置にある民と相應しないから其の同情を得ない。而して九二の賢人も亦六とは應じてゐないから君を助けるものがない。あまり高く上り過ぎて下の臣民と接觸がなくなると後悔があるといふことである。前章で、上爻を事外人の地位としたのは此の場合には當筈らない。

用九は、占をするには九になつて居る所を用ひて七の所を用ひないといふ意味に解釋するがよい。九は老陽で、變化して陰とならうとする場合である。六匹の龍を見るに首の無いのは吉である。吉凶とは判断の辭である。「天徳不可爲首也。」で剛健の徳を持つものは首となつてはいけな。謙遜でなけれ

ばならない。それで群龍の頭がないのは結構のことである。

これで乾の卦の判断の仕方が終るのである。すべて修身に引きつけて考へていくのである。而も社會のあらゆる階級に居る人に應ずるやうに皆書いてある。失せ物を見つけないことや病氣の直るか否かを占ふことは易の主とする所ではない。現在の境遇にあつては如何なる態度を採つて進むべきかといふ道徳的教訓を示すのが主である。その意味で易は今でも何人も必要のものである。常識の非常に豊かな人の書いたよい教訓書である。而も普通の常識でなく「一陰一陽之謂道」といふ哲學的根據をもつたものである。

(以上第一日の分)

〔文言傳〕○元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子體仁足以長人。嘉會足以合禮。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰乾元亨利貞。

「文言傳」といふことは、文は「かざる」で、かざるところの言。傳とは註釋といふや



うな意味をもつ。本文について尙其意味をはつきりさせたもの。象傳・象傳・繫辭傳の傳も同じ意味である。「文言傳」は乾坤二卦だけを敷演解釋したものである。

「元者善之長也。」から「故曰乾元亨利貞。」までが「元亨利貞」の註釋である。

「元亨利貞」は「周易本義」朱子の註釋書の訓み方である。「文言傳」は「元亨利貞」と皆別々に引離して解釋する。文言傳は易の行はれる初にできたものであるから、其の中に「元亨利貞」としてあるのに従ひ、無理に後世の説を取つて「元亨利貞」と讀まなくともよい。「元亨利貞」とする時は、乾の四種の徳を指すことになる。「元者善之長也」「元」とは最上の善といふ意味である。

「亨者嘉之會也。」亨とは嘉いことトの集りといふ意味である。亨といふのはすべてが障無く具合よくいくことである。即ち自由を得て居ることである。

「利者義之和也。」利は正義が調和を得て行はれる所である。「大學」に「不以利爲利、以義爲利」とある。儒教ではかういふ様にして利益といふことを考へる。論語にも「君子喻於義、小人喻於利」とある。義が調和して行はれるところに利が

あらはれてくる。すべて義に由つて行ふべきものである。利を先に考へるのはよくない。

「貞者事之幹也。」貞は變らない。貞操を守る。一つの信念をもつて押通しぐらぐらしなないこと。それが仕事を行ふ心棒となるものである。仕事は飽くまで貫くものでなければできない。

乾卦は「元亨利貞」の四徳を具へてゐる。朱註のやうに讀むと少し味がちがふが結局そこに落着く。「元」には「もと」といふ意味がある。すべての元となるものは大きい。それで「元」を「大きい」と解釋してもよい。又「元」は「はじめ」とも解釋する。「始」のものは一番善いものである。「元亨利貞」と讀んでも「元」は「亨り方の大きい小さいといふ位の軽い副詞的の意味でなく、もつと重い意味がある。そこが即ち「善之長也」である。「利貞」と言へば、變りなく一筋に努力することの中によろしいことが含まれて居るといふ意味に取れるので、「利しい」といふことと「變らぬ」といふことを並立させたのは少し言ひ方がちがふが、しかし結局は同じである。「元亨利貞」は又「中庸」といふ思想に當つてゐると推測される。「韓詩外傳」といふ



書には「中庸和通」といふ語がある。「元」といふことは「中」といふことに接近してゐる。「亨」は「通」に當る。「利」は「義之和」である。「貞」は即ち「庸」の意に外ならない。このやうに比較することが出来るものであるから、「中庸和通」と「元亨利貞」とはごうも密接の關係があると考へられる。「和通」といふ意味は中庸の中に含まれる。何故なら中庸に「喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。中者天下之大本也。和者天下之達道也」とある。「達」は即ち「通」である。そして和は中の動いた所で、中のなかに和が取込まれるからである。さうなると「元亨利貞」と「中庸」とは同じことになる。

「中庸をただ程よい」といふ位に淺く解してはいけない。

「中庸其至矣乎。民鮮能久矣。」さういふ大きい徳である。

「元亨利貞」は「乾」の徳、即ち天の徳である。中庸を行ふといふことは天の徳を身に體して行ふことである。

「君子體仁足以長人。」人を支配するには仁を身につけねばならぬ。仁は一番善いことである。だから「元は仁なり」と言つてもよい。元は乾の徳であり、君子

の徳であるから人の長たることができる。

「嘉會足以合禮。」人と人との集りをよくするのが嘉會。會をよくするためには禮儀が必要である。論語に「禮之用、和爲貴」とある通りである。

「乾」のはたらきは禮に適つていく。正義に合したところで利益を與へていくから「利物足以和義」といふ。

「貞固足以幹事。」變らずに固ければ事の心棒となる。何々會幹事といふのは此處から出た語である。故に幹事といふ職に居るものは貞固でなければならぬ。「君子行此四德。」故「元亨利貞」である。

初九曰、潜龍勿用。何謂也。子曰、龍德而隱者也。不易乎世。不成乎名。遯世无悶。不見是而无悶。樂則行之。憂則違之。確乎其不可拔。潜龍也。

初九の潜龍を委しく説明したもの。

「不易乎世。」世間の力によつて自分の心をうつされぬ。天子にもなり得る程の徳(龍徳)をもつてじつと民間に隠れてゐて、世の潮流に流されない。而も「不成」



乎名<sup>ヲ</sup>で名譽も表はれてゐない。その様に「遯<sup>シ</sup>世<sup>テ</sup>てゐても煩悶すること無く、全く強い自信をもつて「確乎<sup>ト</sup>としてゐる。これが潜龍である。「勿<sup>レ</sup>用<sup>ル</sup>」とは自分のはたらきを世間に出さぬこと。

九二<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。見龍<sup>在</sup>田<sup>ニ</sup>。利見<sup>大人</sup>。何謂<sup>也</sup>。子曰<sup>ク</sup>。龍德<sup>而</sup>正中<sup>者</sup>也。庸言<sup>之</sup>信<sup>。</sup>庸行<sup>之</sup>謹<sup>。</sup>閑邪<sup>。</sup>存其誠<sup>。</sup>善世<sup>而不</sup>伐<sup>。</sup>德博<sup>而</sup>化<sup>。</sup>易曰<sup>。</sup>見龍<sup>在</sup>田<sup>。</sup>利見<sup>大人</sup>。君德<sup>也</sup>。

龍の徳を具へて正中なるものである。九二は内卦の中に當るからである。人に用ひられて自分のはたらきを發揮することができぬ。

「庸言<sup>之</sup>信<sup>。</sup>」は、中庸にかなつてゐる言<sup>ことば</sup>を信<sup>まこと</sup>にする。言ひ換へると信<sup>まこと</sup>が充實したのが庸言<sup>之</sup>で、それは元亨利貞である。又中庸にかなつた行を謹みぶかく行つて行く、それで「閑邪<sup>。</sup>誠を保つて行く。世の中を善くして行くが其功に誇らない。徳が博くて人を皆善いものに化していく。かういふのが九二の徳である。君主にはならないが臣下として顯はれてゐる。位こそ君主でないが君

主と同じ徳を持つて居る。

九三<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。君子終日乾乾<sup>。</sup>夕惕若厲<sup>。</sup>无咎<sup>。</sup>何謂<sup>也</sup>。子曰<sup>ク</sup>。君子進<sup>德</sup>脩<sup>業</sup>。忠信<sup>。</sup>所以進<sup>德</sup>也。脩<sup>辭</sup>立<sup>其</sup>誠<sup>。</sup>所以居<sup>業</sup>也。知<sup>至</sup>至<sup>之</sup>。可<sup>與</sup>幾<sup>也</sup>。知<sup>終</sup>終<sup>之</sup>。可<sup>與</sup>存<sup>義</sup>也。是故居<sup>上位</sup>而不驕<sup>。</sup>居<sup>下位</sup>而不憂<sup>。</sup>故乾乾<sup>。</sup>因其時<sup>而</sup>惕<sup>。</sup>雖危<sup>。</sup>无咎<sup>矣</sup>。

徳に進むのは忠信である。忠はまこと、信はうそを言はぬ。辭を修めて邪の辭を言はぬのは學業を勤める基礎となる。「知<sup>至</sup>至<sup>之</sup>」とは進み行くべき將來の目的を自覺して、それに向つて進んで行くことである。この様な人とならば、共々に機會を捕捉するといふことの眞の味について話が出来ぬ。「知<sup>終</sup>終<sup>之</sup>」とは終極の地位に居ることを自覺して、その地位にあつて行ふべきことを完全に行ひとげることである。この様な人とならば共々に眞に義を外れぬやうに行つて行くことが出来る。



九三の地位に居る人は、目的を立てて猛進して行く人である。この人は下の身分としては上位であるが(内卦の最上なる故)義に叶ふやうに注意して行動してゐるから驕ることはない。又上に對しては下位であるが(外卦に對する故)憂へず進む。故に乾乾とつとめつとめて、時々自分の行に對して顧みて惕れるのである。惕れるから危い境遇に居ても咎を受けることが無い。  
 (こんなやうに「文言傳」は長々と敷演し説明してあるが、時間が無いからこの後はあつさり讀んで、難かしい語だけ説明する。)

九四曰。或躍在淵无咎。何謂也。子曰。上下无常。非爲邪也。進退无恆。非離群也。君子進德脩業。欲及時也。无咎。

大臣といふやうな君主の下についてはたらく地位に至れば、無闇に突進してはならぬ。注意深く躊躇しつつ進み、時に機會を見て斷行するがよい。機會を見ること大切である。然し君主を無視してはならない。

九五曰。飛龍在天。利見大人。何謂也。子曰。同聲相應。同氣相求。水流濕。

火就燥。雲從龍。風從虎。聖人作而萬物覩。本乎天者親上。本乎地者親下。則各從其類也。

下に居る賢人は上に居る賢君を見てそれに親しまうとする。善いものがその類に從つてゆくのである。賢君と賢臣と相待つて世の中がよくなる。

上九曰。亢龍有悔。何謂也。子曰。貴而无位。高而无民。賢人在下位而无輔。是以動而有悔也。

上りつめた龍は悔ゆることがある。中を外れて上りつめた所である。君主として君主の務を行はず、ただ尊貴に甘んじて驕り高ぶつて居るのが亢龍である。上九は下に相應するものがなく、貴くして位に外れ、高くして民が附かず、賢人が下にあつても助けとならない。それ故後悔することがある。

潛龍勿用。下也。見龍在田。時舍也。終日乾乾。行事也。或躍在淵。自試也。飛龍在天。上治也。亢龍有悔。窮之災也。乾元用九。天下治也。潛龍勿用。



陽氣潛藏。見龍在田。天下文明。終日乾乾。與時偕行。或躍在淵。乾道乃革。飛龍在天。乃位乎天德。亢龍有悔。與時偕極。乾元用九。見天則。

しきりに重ね重ねて説明してゐる。

乾元者。始而亨者也。利貞者。性情也。乾始能以美利利天下。不言所利。大矣哉。大哉乾乎。剛健中正。純粹精也。

「元」を「始め」と解釋した所である。乾元は萬物を始めるもので、其のはたらきは自由である。この元亨の徳を具へた人は、性がそのまま情として現はれるもので、其れは又すべての物を利して常に正しい。

「利天下。不言所利。」は、天下の人は聖人から利益を受けてゐるが、聖人は自分が利益を與へてゐるとは思はぬ。聖人の自然の力が發動してすべての人が幸福を受けるのであつて、聖人が自分から故意に幸福を與へようとするのではない。そこがえらいところである。だから剛健中正純粹精である。強いす

ぐれた徳である。剛健中正純粹精は中庸の「中」といふことに當る。「中」はただ真中といふだけの意味ではなく、この剛健中正純粹精をすべて含んで居るものとして解釋すると、その意味が徹底する。

（中畧）夫大人者。與天地合其徳。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而天弗違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎。亢之爲言也。知進而不知退。知存而不知亡。知得而不知喪。其唯聖人乎。知進退存亡而不失其正者。其唯聖人乎。

大人といふのは、飛龍在天、利見大人。この大人と同じで、乾の徳を具へた人、即ち聖人である。つまり眞理をそのまま體得してゐるから自分の考へのやうに自然界の現象が動く。又自然界の現象の動きをそのままに受納れて邪なる心がない。そこが「先天而天弗違。後天而奉天時」で、それでこそ豫言ができるのである。自然界の現象の動きが聖人の思ふ通りになるのである。況んや人間



界の事は何でもないことである。鬼神即ち人間の靈魂も天地の間のものであるから、それも聖人の思ふ通りに動くのである。聖人は完全な力と徳とを持つて人をも神をも指導して行くことができるし、又天地の現象をも左右して行くことができる。「乾」の徳は結局これである。かういふ考へは中庸のなかにも載つてゐる。中庸と易とは思想的に最も密接な關係をもつてゐる。易の「遯世无悶」といふ語が中庸にも其儘ある。易の「庸言之信、庸行之謹」といふ語も中庸に少しちがふが「庸徳之行、庸言之謹」とあつて、思想は同じである。それで中庸とは「乾」の徳を別の語で言表はしたものである。それを程よく行ふと解いただけでは意味がまだはつきりしない。勿論程よくやればこそ思ふやうになつて鬼神も従ふのである。寧ろ自分の思ふやうになるのでは無く、外の人の思ふやうに自分が考へるのである。天子は民の心を以て心とするといふのも此の事である。程よいといふのは非常に意味の深いものである。以上で「乾」の講義は大體すんだが、少し附け加へておく。「乾」は聖人の徳で、自然

界でいふと天のはたらきである。天のはたらきは永久に盡きることがないと易の中でも考へてゐる。そこで天のはたらきと相通する聖人の徳も、永久に幾萬年の後までも傳はるものであると考へる。さうなつて來ると「易」は變るものであるが、「乾」は變らぬといふ別の意味が考へられる。根本通明博士は萬世一系の理論が易經の中の「乾卦」にあると言つた。天子は天の徳を體してゐるから「乾卦」に萬世一系の理論があるといふので、こじつけの説だといふ人もあるが、捨て難いものがある。徳川時代の學者の中には高松芳孫といふ人で日東周易蘇といふ著書がある。「乾」の徳は「太陽」の徳であると考へた人もある。普通の説では、ただ漠然たる天のはたらきとしておくが、よく考へて見ると、普通に天のはたらきとするものは實は皆太陽のはたらきである。光線は太陽から來るものであつて、光線によつて生物があらはれてくる。さういふところからして「乾」の徳は太陽の徳だと言つた。これは日本式の考へ方である。國學者は初には高天原を以て天のことであると解いたが、後には日のことであるといふ。易の「乾」を日とするのは國學の影響を受けた説である。國學者



が高天原を日と考へるやうになつたのは、又オランダから傳はつた西洋の新しいサイエンスの影響を受けたのである。これは一方からいふと、天照大神といふ日の神を第一に立てて行かうといふ我國本來の考と結合したのである。この様な考へ方は、日本にあるだけで支那には起らぬ。もつとも支那でも陽の氣の凝り固まつたものが太陽であるとはいふが、日本人のやうに取り立てては言はない。日本思想と支那思想との重要な區別は、日を主とする。天を主とするとの點に在るといふことが出来る。要するに乾卦は、聖人の完全な徳を示してゐるもので、その徳目は元亨利貞で、その性質は剛健中正純粹精である。而してこれはすべての人々の道德の規範となるものである。



坤。元亨。利牝馬之貞。君子有攸往。先迷後得。主利。西南得朋。東北喪朋。安貞吉。○初六。履霜。堅冰至。○六二。直方大。不習无不利。○六三。含章。○

可貞。或從王事。无成有終。○六四。括囊无咎无譽。○六五。黃裳元吉。○上六。龍戰于野。其血玄黃。○用六。利永貞。

〔象上傳〕○至哉坤元。萬物資生。乃順承天。坤厚載物。德合無疆。含弘光大。品物咸亨。牝馬地類。行地无疆。柔順利貞。君子攸行。先迷失道。後順得常。西南得朋。乃與類行。東北喪朋。乃終有慶。安貞之吉。應地无疆。

〔象上傳〕地勢坤。君子以厚德載物。○履霜堅冰。魏志。作初六履霜。今當從之。陰始凝也。

馴致其道。至堅冰也。○六二之動。直以方也。不習无不利。地道光也。○

含章可貞。以時發也。或從王事。知光大也。○括囊无咎。慎不害也。○黃

裳元吉。文在中也。○龍戰于野。其道窮也。○用六永貞。以大終也。

乾と坤との關係をどう考へるか。乾は健也で、すこやかである。坤は順也で、

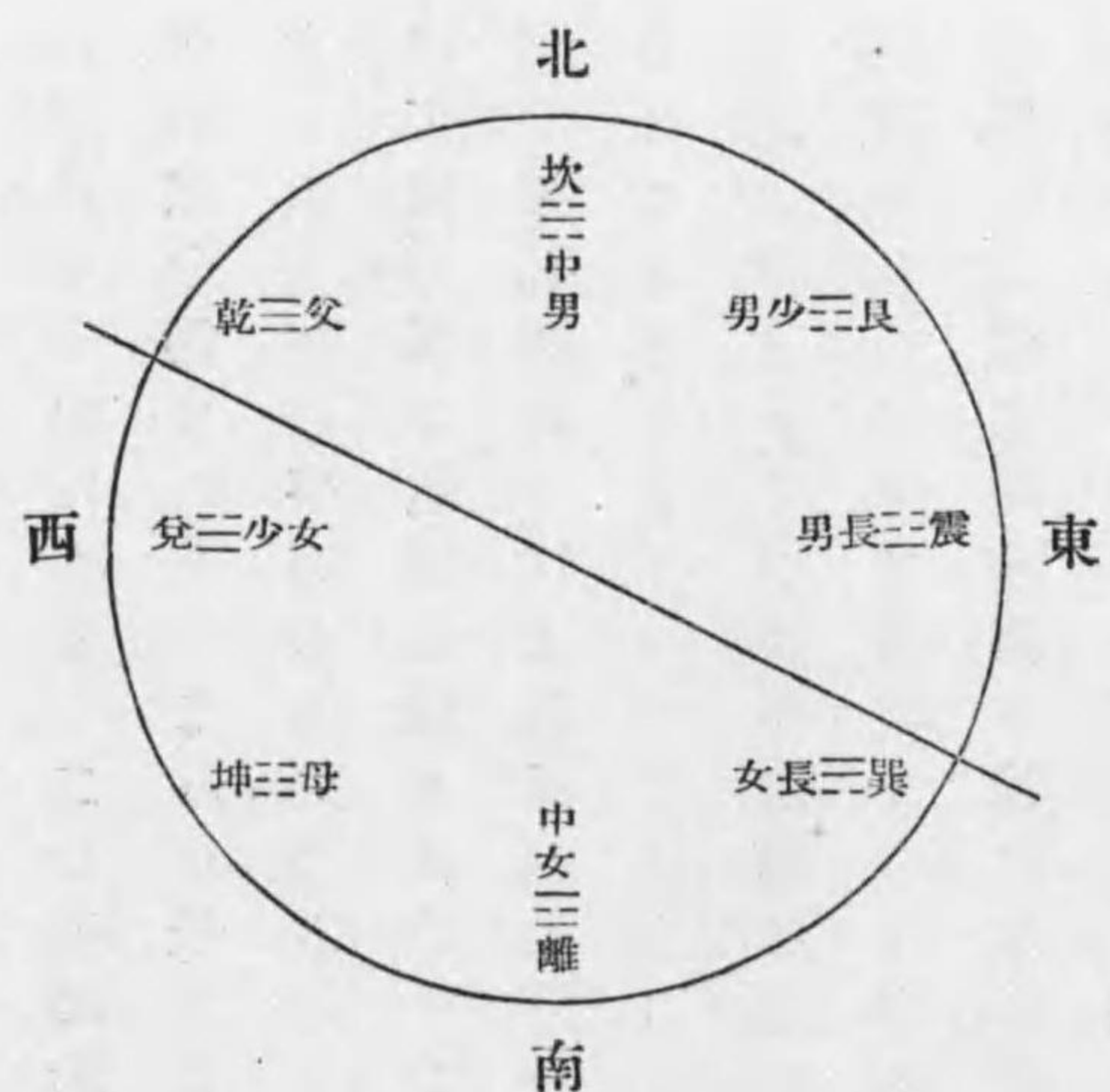


やさしくしたがふのである。太陽から来る光線を地上の炭素化合物が受取つて相接して萬物が出る。故に萬物の發生する物質的方面は地にある。目に見えないつかまへられないものが天から来て、地上の物質がそれを受取つて生物を生ずるといふのである。易に於てはこれを男女の關係として見る。男は施し女は受ける男の施すものを女が受取つて形づくり發育させる。あくまで女は從順でなければならぬ。それで「坤厚載物德合无疆」である。地の徳の无疆は天の徳の不息なるに對立するもので、而も含弘光大であるから、この故に「元亨」といふ。乾の「元亨」とは意味を異にする。「元亨利」までは乾と同じ語を並べてゐるが「貞」については、坤は「牝馬之」といふことを附加する。「牝馬地類」で坤を牝馬にたとへる。牝馬は強く驅り無く地を行く。だから從順にして利貞である。

君子が若し坤の境遇に居る時は從順でなければいけない。先に立つと迷ひ、人より後れて行くやうな態度を取ると變り無く正しい道を辿ることができない。つまり自分で獨り行ふ様な考を出さず、人に從つて行けといふことである。

る。

「西南得朋」とか「東北喪朋」とかいふことは、左圖を参照されたい。



かう八卦に男女の性質を與へると西と南には女ばかり、東と北には男ばかりゐる。坤は女の性質だから西と南とに行けば同類と一しよになり東と北とに行けば同類と離れる。然しよい男を得て慶びがある。

安貞之吉は地の无疆が如くである。「地勢坤」は地勢順と同義で、ごつしりして下に落着いて物を受けてゐるのである。「天行健」即ち乾の健に活動するのに對する。

初六は陰氣の最初に生じたところで、それはだんだん深く凝つて行く傾向に



ある。霜を履んだと思ふ中に、終には堅い氷となつて来る。この所で占ふ場合は陰氣が益々進むといふことを考へねばならぬ。六二は中を得てゐる。二の位に陰があるからまた正である。乾の卦では九五が中正を得てゐる。これが最もよい位である。地の形が平であるから直で方である。地は平面で方形のものとして考へてゐたから眞直で四角とした。直方は正直方正で道徳上最もよい。これは習ふことを待たずに、自然に具はつた徳で、此の徳があれば萬事がよいのである。地の徳のはつきりあらはれてゐるところである。

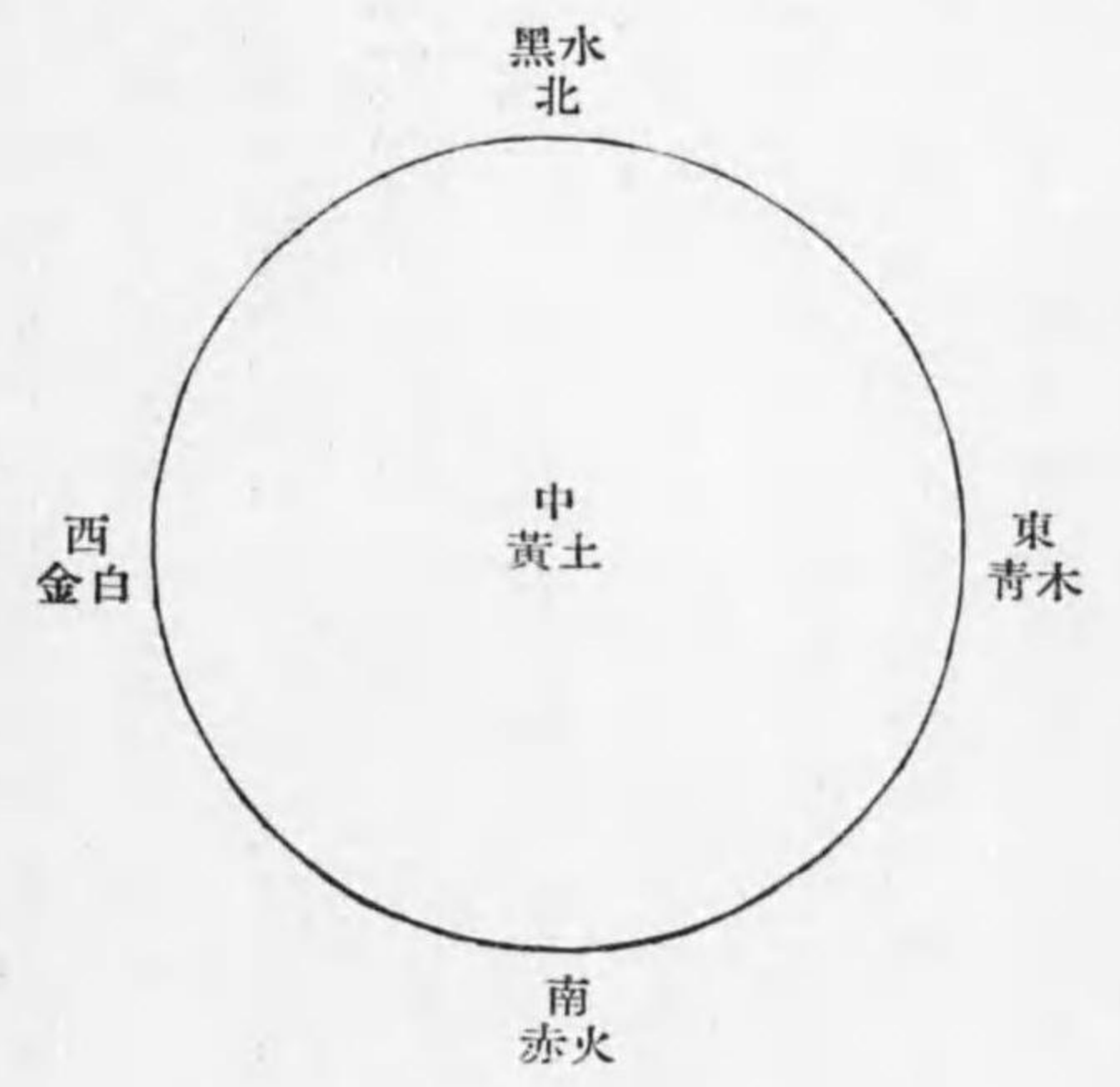
「六三。含章可貞」といふのは、麗はしい章を中に含んで表面に顯はさない。その態度をしつかりと何時までも守るべき地位である。而し中を得ないで過ぎて居る地位だから落ち着けない。時に麗はしい章、即ち立派な知を以て王事につとめるやうな事がある。然し坤の徳を以て君の仕事を輔佐すべきで、事が能く出来上つても、それは王の命令を遵奉しただけと考へるのがよいのであつて、自分の力でしたのだと思つてはならない。仕事をする場合でも自

分が頭に立たず人にさせて行くのである。——かういふ人も世間にはよくある。女房役といふのはこれである。「知光大」といふのは「含章」ことの大きいといふことである。

六四になると、偶數のところは陰があるのだから、正を得て居てあふないことは無いが、上の位になつてゐるから囊の口を括つたやうにしてゐれば、无咎である。何もせずに居る方がよいといふ時である。(餘り伸び過ぎて括囊しないといふにらまれることもある。)

「六五。黄裳元吉」といふことは「文在中」といふことである。黄色は中央の色で、それは五行説に於て五色を五方へ配當する考へから説明される。(次頁圖参照) (昔は七色とは言はぬ。五色といふ。五行は木火土金水で、天地萬物の性質を五種に總括するもので、五つの元素とも見られるのである。)そこで黄は中央の色、裳といふのは腰から下の服(腰から上は衣)。六五は上卦の中央にあるから黄である。而して上の位に居ながら下の方に着ける裳を着てゐる。かう謙遜して威張らぬから「元吉」である。——力の弱い人が上に立つた時は人に





東	木	青
西	金	白
南	火	赤
北	水	黑
中	土	黃

下るやうにしてゐれば大いに吉である。女主人がこれに當る。「文在中也」とは立派な文を具へて中央に居るといふことである。黄色の裳を着けたやうに立派な徳を具へて謙遜の態度を保てば自分の立場を危くしないで大仕事を成すことができる。これはまた賢良なる臣下の態度でもある。上六。もう一步進んで陰が頂上に至ると、陰でありながら強くなつたやうな心

持になつて戦をする。天の龍なるものと對抗して戦ふのである。女子が男子と對抗して戦ふが「龍戰于野」である。さうすると共に傷つき共に斃れる。「血」といふのは傷つく事である。「其血玄黃」といふのは、文言傳に「天玄而地黄」とあつて、戦つた男の血も女の血も共に流れて不吉の事であるといふのである。乾の上九の亢龍と同じく、進み過ぎて悪いところである。

〔文言傳〕○坤。至柔而动也剛。至靜而德方。後得主而有常。含萬物而化光。坤道其順乎。承天而時行。積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。臣弑其君。子弑其父。非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。由辨之不早辨也。易曰。履霜。堅冰至。蓋言順也。直其正也。方其義也。君子敬以直内。義以方外。敬義立而德不孤。直方大不習。无不利。則不疑其所行也。陰雖有美。含之以從王事。弗敢成也。地道也。妻道也。臣道也。地道无成



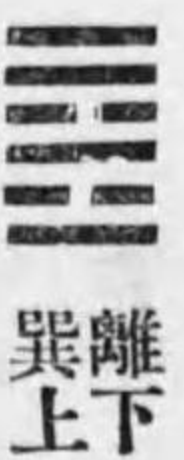
而代有終也。天地變化。草木蕃。天地閉。賢人隱。易曰。括囊无咎。无譽。蓋言謹也。君子黃中通理。正位居體。美在其中。而暢於四支。發於事業。美之至也。陰疑於陽。必戰。爲其嫌於无陽也。故稱血焉。夫玄黃者。天地之雜也。天玄而地黃。

坤のはたらきは自然界では地道家の中では妻道政治の方では臣道である。「陰疑於陽」は陰と陽との見分がつかないといふことで、陰が増長したのである。血は陰に属するものだと説卦傳にある。

十一 下經講義 —— 家人・睽 ——

睽卦を話しておいた方が象山先生の睽卦を説明するに都合がよい。睽卦は家人卦をひつくりかへしたものである。序卦傳に「家道窮必乖。故受之以睽」とあると

ころから家人と睽と連絡するのである。



離下  
巽上

家人。利女貞。○初九。閑有家。○六二。无攸遂。在中饋。貞吉。○九三。家人嗃嗃。悔厲吉。婦子嘻嘻。終吝。○六四。富家。大吉。○九五。王假有家。勿恤。吉。○上九。有孚。威如。終吉。

〔象下傳〕○家人。女正位乎內。男正位乎外。男女正。天地之大義也。家人有嚴君焉。父母之謂也。父子。兄弟。夫婦。而家道正。正家而天下定矣。

〔象下傳〕○風自火出。家人。君子以言有物。而行有恆。○閑有家。志未變也。○六二之吉。順以巽也。○家人嗃嗃。未失也。婦子嘻嘻。失家節也。○



富家大吉。順在位也。○王假有家。交相愛也。○威如之吉。反身之謂也。

家人は家の人である。又すぐに婦人と説く人もある。

家人の卦は象で言ふと下に火があつて上に風がある。離下巽上で「風自火出」象である。火が燃えたと風が出る徳があると自然に感化を及ぼす。この思想はやはり中庸にあつて「知遠之近。知風之自。知微之顯。可與入德矣」と其の末章に見える。中庸の徳を蓄へると自然に人を化して行くことができる。自己を充實するのが最も大切である。火があつてこそ風が出る。火が強ければ風はどこまでも吹いて行く。大學に「君子不出家而成教於國」とある。それで家人を婦人と考へるのは少し狭い。「君子以言有物。是、まじめのこと、心にある通りのことを言ふ。「行有恆は、論語にも「得見有恆者斯可矣」とあるやうに、普通の者は無くして有りと思せ、苦しくても安らかに見せかける。而し行に表と裏のあるのはいけない。つくり飾りのある行はおちつかない。君子は行にも言にもつくり飾りが無い。さういふ心をもつて家の中を治めて行けば、自ら感化が及ぼして行く。「家人」の卦を得た者は先づ第一に此の事を考へねばな

らぬ。

「家人」の卦では第二爻が六で、第五爻が九で、何れも中正を得て居る。それで「女正位乎内。男正位乎外」といふのである。内に於ては、從順にして夫を輔佐すべき婦人が中を得て正しい所に居り、外に活動する夫も亦中を得て正しい所に居る。内外共に中正で家がよく治まるかたちである。男は外に向つて位を正しくし、女は位を内に正しくして家を治めて行くのであるが、この家を治める事は特に女の力が重い。故に「利女貞」とある。女のはたらきが中正ならば家は富み榮える。

「嚴君」とは父母のことを言ふ。父のことのみ言ふのではない。父は父の爲すべきことを爲し、子は子の爲すべきことを爲す。兄は兄の爲すべきことを爲し、弟は弟の爲すべきことを爲す。夫は夫の爲すべきことを爲し、妻は妻の爲すべきことを爲す。一家が正しくなれば一國もよく治まる。「正家而天下定矣」は即ち大學にある「君子不出家而成教於國」といふことである。

初九は家を持つ初を指す。夫婦が新しく家をつくつた場合に、最初にしつか



りやつて、悪い事を入れない様に防禦する。最初が大事である初めだらしくやればいつまでもだらしが無い。

六二。婦人は自己の意志を押し通すことをせず、夫を輔佐して行く。中饋の饋は食べる物、食事を造ることに全力を注ぐ。食事のことは家事で一番大切な事である。よく考へて見ると嘘ではない。妻が食事を構はなかつたら一家の健康は保たれない。

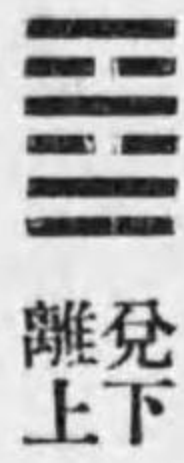
九三。下位で過ぎたところで、家族の者が出過ぎるやうになる。家の主人がやかましく言へば家族の者が嗚々と不平を訴へるやうになる。然し家の中に少々不平がある方が結構で、女や子供が嬉々と嬉しさうに騒いでゐるやうでは吝となる。「吉凶悔吝」といふが、吝は凶い方へ進んで行く傾向にあり、悔は吉い方へ進んで行く傾向にある。

六四。家を富まして大吉である。利と義とを區別すれば、利は陰に屬し、義は陽に屬する。六が四の位、即ち陰が陰の所に居るから、陰の徳を具へた婦人が丁度適當の地位に居るので、家は必ず富み榮えることができる。

九五。「有家」とは家を有つたといふ意味。九五の男は六二の女と相應するから、王様がよい后を娶つてこもごも相愛する地位である。上の真中と下の真中と應じてお互に相愛するのである。

上九。剛を以て上りつめたところに居るから、まじめにいかめしく、しつかりやつて行けば終にはよろしい。これは主人が行き過ぎた地位にあるといふことを自覺して、己の良心に反省してしつかりやるからよいのである。

自分の身をよく修めることは家がよくなる本であり、それは又國がよくなることであるといふことを「家人」の卦は示してゐる。易の各卦は道德的教訓を多分に含んでゐる、それは儒教的精神である。



離兌下  
離上

睽。小事吉。○初九。悔亡。喪馬。勿逐。自復。見惡人。无咎。○九二。遇主于巷。无咎。○六三。見輿曳。其牛掣。其人天且劓。无初有終。○九四。睽孤。遇元



夫交孚。厲无咎。○六五。悔亡。厥宗噬膚。往何咎。○上九。睽孤。見豕負塗。載鬼一車。先張之弧。後說之弧。匪寇婚媾。往遇雨。則吉。

〔象下傳〕○睽。火動而上。澤動而下。二女同居。其志不同行。說而麗乎明。柔進而上行。得中而應乎剛。是以小事吉。天地睽而其事同也。男女睽而其志通也。萬物睽而其事類也。睽之時用大矣哉。

〔象下傳〕○上火下澤。睽。君子以同而異。○見惡人。辟咎也。○遇主于巷。未失道也。○見輿曳。位不當也。无初有終。遇剛也。○交孚无咎。志行也。○厥宗噬膚。往有慶也。○遇雨之吉。群疑亡也。

離の火は動いて上に昇り、兌の澤、沼の水たまりは下の方へ降る。この二つは離れて反對の方へ進む。故に睽と名づける。睽とは「そむく」で、反對することである。「二女同居」とは三が中女、三が少女であるから其の様に言ふ。女

と女とが同居すれば必ず喧嘩をする。易は面白い。男と女と居ればよいとし、女と女と居れば悪いとする。兌は説ぶ(悦)と同じ意味があり、離は明の意がある。第二爻が第五爻に對して「得中應剛」である。全體の形は睽くが、小さい部分は説び明かで柔剛應じてゐるから小事には吉い事がある。その證據には天地の性質は反對して居るが、その仕事は共同であつて、萬物を生ずるのである。男と女との性質は反對して居るが、其志は相通じてゐる。萬物は互に反對して思ひ思ひの性質を有してゐるが、皆共々に生長發達し共存共榮して行く。それ故に睽之時用大矣哉である。睽いて行くところに一致する所があり、反對する所のものが一致するはたつきは大きいことで、一團體に於ても激論する人とおとなしく黙つてゐる人とがあつて、其の團體はよく發展するのである。「上火下澤」のは「睽」で、君子は人と氣が合はぬといふことだけを考へてはいけない。一致する點をも考へねばならぬ。

初九。馬は逃げたがすぐ復る。自分が憎いと思ふ人には會ひに行くがよい。

九二。主人と相睽いてゐて、直接主人の家へ行く事はできぬが、途中で偶然行



遭つたら一寸話をするがよい。別れたと言つて全然別れてしまつてはいけ  
ない。

六三。

九四。

六五。

上九。自分の立場は睽で孤立してゐる。相手の者は醜惡なること泥まみれ  
の豕のやうだ。又、化物の様なものの一の馬車に満載して来る。弓を張つて  
それを射ようとしたが思ひ直して又弓をはづした。よく考へて見ると寇を  
しに来るのでなく自分の所へ結婚をしようとして来るのである。睽の卦で  
はこのやうに考へて行く。

### 十二易の占法

易の占ひ方の例は古い本にどんなやうに表はれてゐるか。それは左傳・國語

(春秋時代)孔子の生れる二百年程前から孔子の卒する頃まで、の事を書いた本  
の中に周易の占ひの實例が幾つも出てゐる。古い占ひ方を知らうとする人は、こ  
の本を参考とする。それには「之卦」といふことを言つて居る。「之」とは「ゆく」といふ  
ことである。例へば左傳の莊公二十二年、西曆前六七二、神武天皇即位より十二年  
前)の條に、陳の國の厲公といふ君が敬仲を生んだ。生れてまだ小さい時に或人が  
周易で其の將來を占つた所が「觀」坤上の卦を得た。この「觀」が「否」坤上に之ゆくに  
遇つた。それはどういふ事かと言ふと、「觀」の六四が變つて九四になつた。つまり  
計算の方法によると「子」子で、第四の一爻だけが老陰となつて、陽に變る傾向を持  
つたのである。それで第四爻を主要なる標準として、「觀」の六四と「否」の九四とを比  
較して見、又全體をひつくるめて考へる。その考へた結論は、此の子供は他國へ行  
く、而してこの子供の子孫は大名になる、といふことになつた。其通りに何百年か  
の後に現はれた。即ちこの子供は陳の國から齊の國へ逃れたが、その子孫が戰國  
時代になつて齊の君をおしのけて君主即ち大名になつた。委しい事は話す違が  
ないが、兎に角左傳國語の中にはかういふ例が澤山ある。皆當つただけ書いて



ある。そこで疑が起る。先に易は戰國時代(西曆前四世紀頃)に作られたものだと述べたが、それとこの記事とは辻褄が合はぬ。これは結局こしらへた話である。後に發生した易によつて、歴史上の事實に理由をつけてかういふ話を作つたのである。併しかういふのは一種の高等批評であつて、單純に易の占ひ方や理論を考へるにはその出來た時代などの考證は不要である。兎に角左傳や國語によつて古い占ひ方を知ることが出来るから、此等の書はその點でも價値のある書物である。此等の書物は樂に手に入れられる。もつとも國語の方は少いかも知れぬ。又春秋占筮書といふ、左傳國語の占筮の部分だけ集めて研究した本がある。これは清朝の毛奇齡といふ學者の作つたもので、象山先生も青年時代に此の本を讀んで其の説を補正して「春秋占筮書補正」といふ書を著はしたことがある。

### 十三 繫辭傳

繫辭傳には上傳と下傳とがある。上經下經の經の文章が繫辭である。即ち卦と爻とに神祕的な辭を繋けてある。そのものに對してその意義を註釋的に書いたものが繫辭傳である。易の上經下經象傳象傳中に伏在する哲學は、繫辭傳によつてまとめて理解する事ができる。

〔繫辭上傳〕○天尊地卑。乾坤定矣。卑高以陳。貴賤位矣。動靜有常。剛柔斷矣。

高いものと低いものと地位を決めた。乾坤に於ては、乾を尊しとし坤を卑しとする。

方以類聚。物以群分。吉凶生。

天の方向と、地の方向とは反對して居る。天の性質に屬するものは天の方向



に聚り、地の性質に屬するものは地の方向に聚る。文言傳の「同聲相應、同氣相求。水流濕、火就燥。雲從龍、風從虎。聖人作而萬物覩。」がこの具體的の説明である。吉凶といふものは乾と坤とが種々に作用する間に生じて來るのである。

在天成象。在地成形。變化見矣。是故剛柔相摩。八卦相盪。鼓之以雷霆。潤之以風雨。日月運行。一寒一暑。

天に在つては日月星となつて、象即ちすがたが出来る。象と形とは同一でない。象はぼつとしたものであるが形はしつかりしたもので目にも見え手でもつかまへることが出来るものである。そして天にある象も地にある形も、皆常に變化するもので、一定しては居らぬ。剛柔をもう少し細かく言ふと、剛柔即ち陽と陰とは互に接觸し作用して、八卦即ち天澤火雷風水山地となる。二つの原動力が複雑化して、八つの原動力となつたと考へてもよい。八卦がお互に影響して雷霆を起し、風雨を起し、日月寒暑が交代する。

乾道成男。坤道成女。乾知大始。坤作成物。乾以易知。坤以簡能。易則易

知。簡則易從。易知則有親。易從則有功。有親則可久。有功則可大。可久則賢人之德。可大則賢人之業。易簡而天下之理得矣。天下之理得。而成位乎其中矣。

男は乾の性質を帯びて生れ、女は坤の性質を帯びて生れる。「乾知大始、坤作成物」は大哉乾元、萬物資始であり、至哉坤元、萬物資生である。物の始をつかさどるものは乾で、物をこしらへ上げるのは坤である。乾のはたらきの大きくあらはれたものが易で、易は「やすらか」ことばはらぬといふこと。剛健なる徳を以て自由に其の聰明をはたらかせる場合が易である。それ故、乾は大いに享るのである。坤の作用もやはりこだはらぬが、その仕方が乾と異なる。自分の感情や慾望に固執せず、すべてうちまかせて行く。簡は「おほまか」で、自分としてのはたらきを表に出さぬことである。つまり乾は自由のはたらきをする方で、坤はうち委せて行く方である。さうして兩方共こだはらぬ。男は頭をはたらかせる、女はうち委せて物をこしらへていく。佛教の自力他力の考



へ方でいふと、易は禪宗の自力の方、簡は淨土宗などの他力の方である。一般に男の特色は易であるべきであり、女の特色は簡であるべきである。人間の精神は天から來たもので、その性質は乾であり、肉体は地から受けたもので、その性質は坤である。

精神の作用が自由であつて易であるのは賢人の徳であり、肉体から生ずる感情や慾望が精神の指導にうちまかせてあつて、其の行動が簡であるのは賢人の業である。易と簡とによつて宇宙の眞理は體現される。これによつて完全なる人格として自分の地位を成立させることができる。以上は即ち天地の理法を本として人間の心を修めて行く方法を示したものである。昔の思想は自由の活動をするものを智慧があると見た。石よりも風の方が、風よりも光の方が智慧があると見た。人間も天から受けた精神を心の中に多分に持つて居れば智慧が多くあるとした。今の語でいふとエネルギーを澤山持つてば智慧があるのである。之に反して地から得た肉体のみが強いものは、即ち固まつた物質のみに偏するものには智慧が無い。聰明睿智なるや否やは

天から得たエネルギーの量によつて判断ができる。面白い考である。希臘哲學にもこれと同様の思想がある。此の考から言へば、我々が修養するとは、天の氣即ちエネルギーを澤山蓄へることとなるのである。

○聖人設卦觀象繫辭焉而明吉凶剛柔相推而生變化

「繫辭」といふ文字が出て來た。聖人が卦の象を見てこれに辭を繋げて吉凶を明にしたのが易の文章である。剛は柔を押しつけ、柔が又剛を押しつけ代るにおしあつて變化をするといふのは、陰と陽とが消長することを指す。陰陽消長の間に吉凶が現はれるのである。かういふことが易の原理になるのである。

是故吉凶者失得之象也。悔吝者憂虞之象也。變化者進退之象也。剛柔者晝夜之象也。

そこで吉凶は得失の象であり、悔吝は憂虞の象である。悔は吉い方へ進まんとしてまだ充分進み得ない所で、つまり後悔を生ずるから、憂慮すべき象であ



る。吝は凶くはないが段々凶い方へ行きつつある。すべて小さくこだはることはよくない。人に物を出しおしむことを吝といふのも其の類である。これも亦憂慮すべき象である。吉はよいこと、凶は悪いことで、悔と吝とは中間である。吉凶悔吝は、老陰、老陽、少陰、少陽に配當することができる。

吉(九) || 老陽 悔(七) || 少陽 吝(八) || 少陰 凶(六) || 老陰

變化は柔から剛に進み、剛から柔に退くところの象であり、剛柔は晝と夜にたとへるべきものである。

六爻之動、三極之道也。是故君子所居而安者、易之序也。所樂而玩者、爻之辭也。是故君子居則觀其象、而玩其辭。動則觀其變、而玩其占。是以自天祐之、吉无不利。

六爻の變化するのは三極の道で、三極といふのは天地人の道であるといふこと。天は一つの極、地は一つの極、人は一つの極、極とはもとといふこと。是の故に君子が自分の種々なる境遇に應じて、それぞれ其の位置に落ち着くこと

のできるのは易の變化の順序を知るからである。君子が楽しんで遊び味ふものは爻の辭である。是の故に君子が一定の境遇に居る時には易の象を見て辭を玩び工夫を凝らす。又新しい境遇の方に進んで行かうとする時には、どう變つて行くかの傾向を見て將來を考へる。居る方は現在を考へる方で、動く方は將來を考へる方である。現在の態度を決し、將來の豫想を立てるのは易にあるのであつて、易の辭によつて指導される通にすればすべてが吉となる。此の様に易には將來を占ふ部分とさうで無い部分との兩方面がある。

○象者、言乎象者也。爻者、言乎變者也。吉凶者、言乎其失得也。悔吝者、言乎其小疵也。无咎者、善補過也。

「象」は斷と同音、意味も同じである。斷の音を借りて來たもの。一卦の象を見て其の意義をきめて言つたもので、例へば乾卦の文の中で「元亨利貞」は「象」である。「爻」の辭は變つて行く場合のみを書く。つまり九なれば六に變る、乾卦の辭に用九とあるのは九を用ひることで、即ち六に變らうとする場合を取る



ことである。坤卦の辭に用六とあるのは六を用ひることで、即ち九に變らうとする場合を取ることである。同じ陽でも七の場合には變らぬから、これは書かぬ。同じ陰でも八の場合にはまた同様である。「吉凶」は失得を指して言ふ。「悔吝」は小さい疵をいふ。悪い方へ進むけれどもまだ善い部分が残つて居り、善い方へ進むけれども、まだ悪い部分が残つて居るといふこと。「无咎」といふのは善く過を補ふからである。

是故列貴賤者存乎位。齊小大者存乎卦。辨吉凶者存乎辭。憂悔吝者存乎介。震无咎者存乎悔。是故卦有小大。辭有險易。辭也者。各指其所之。

「位」といふのは爻の位置で、下爻から上爻へ行く程位がよくなる。貴賤はこの爻の位置で見て行くのである。「小大」の小は陰、大は陽である。内卦と外卦とを、其の陰卦であるか陽卦であるかによつて、小とし又大とする。「吉凶」を書いてないものは辭できめる。「介」といふことは始といふやうなことで、

判斷の緒である。吉凶の中間のものはどう動くか、その緒によつて考へるのである。「動いても咎のないのは悔である。それでまとめて言へば卦に陰陽の性質があり、辭に險しい場合とやさしい場合とがある。辭は各九や六で變化して之く場合のことを述べたのである。七や八はまだ之かないから辭には記さない。

○易與天地準。故能彌綸天地之道。仰以觀於天文。俯以察於地理。是故知幽明之故。原始反終。故知死生之說。精氣爲物。遊魂爲變。是故知鬼神之情狀。與天地相似。故不違。知周乎萬物。而道濟天下。故不過。旁行而不流。樂天知命。故不憂。安土敦乎仁。故能愛。範圍天地之化。而不過。曲成萬物。而不遺。通乎晝夜之道。而知。故神无方而易无體。

易の組方は天地の自然界の現象に準へたものであるから、自然界の理法が易に織込んであるわけである。仰いで天のあや、即ち日月星辰を觀、俯して地の



理即ち山川原野等を見る。さうして天地のいろいろの象・形すがたかたちを見て幽と明との事を知る。幽は暗い、明は明るい、即ち陰陽の關係を知るのである。生物の間に於けるいろいろの相を考へて、その始を原もとねて見ると、古代の學說に従へば、生物は天の氣と地の氣とが結び合つて發生するもので、今の學說を應用していふと、天から來る光線が地から生ずる原形質に作用して生物が發生したものである。生物が死ぬといふことは、天の氣と地の氣とが分離することである。故に生死といふことは、天の氣と地の氣とが一しよになつたり、離れたりすることである。

神様とはどんなものか。本來の意義から言へば、鬼まは人間の靈魂、神しんは天地の神であるが、然し鬼神といふ熟語となれば、それは單に人間の靈魂といふ意味である。天地の精氣が集つて人間が出來、その人間が死ぬ時は天地の精氣が分れ、而して天の精氣はしばらくの間ある象をなしてゐる。——丁度煙草の煙がしばらくの間空間に見えるやうに——それが遊魂である。遊は自由になつたといふことで、身体に籠められず自由になつて遊ぶ魂である。此處に

は書いて無いが、魂こんに對して魄はくといふものがある。魄は即ち肉体に關係するもので、地氣の生きてゐるものである。故に人間は魂と魄との集つたもので、死ぬば魂は天にかへり、魄は地にかへる。この魂魄の残つてゐる所から鬼神の有様を知る事ができる。易の思想からいふと、靈魂は不滅である。唯それが生きて居る間は地氣と合ひ、死ぬ時は地氣と離れるだけである。

このやうに、易では鬼神を認めるが、中庸でも亦鬼神を認める。中庸に「鬼神之爲德、其盛矣乎」とある。此の鬼神は即ち祖先の靈魂を指す。最初祖先の靈魂を作つたものは上帝である。我々が孝行をつくすとは自分に魂を分けて呉れた親おや祖おやを忘れないことである。それ故、生きてゐる親に孝行をつくすことを一段進めれば、死んだ祖先につくすことになり、又更に進んでは一番本の上帝につくすこととなる。結局孝行とは上帝に仕へることで、それは即ち眞理に仕へることである。親及び祖先を通して上帝に達し、眞理を尊敬し眞理に服従するといふのが儒教の思想である。祖先のお墓にお參りするのも、その窮極の意義は此の點にあるのである。



易の理論は天地の眞理をそのままに表はしたものであるから謬りはない。易の智慧は萬物を知り盡した智慧である。故に天下の人を濟ふことができず。旁く行つて而もしつかり守る所がある。さうして上帝から授かつた現在の境遇を甘んじ受けて命を知りみだりに煩悶しない。易は如何なる場合でも煩悶しない、即ち樂しむことを教へる。而して天地のすべての變化は易の六十四卦の中に縮寫してあるから、易にはまちがひはない。萬物をすべてつぶさにすみずみまで行きわたつて一つも漏らさないやうに易の中に含めてある。晝夜の道即ち陰陽の道が織込まれてある。故に自然界の現象と易の現象とは同じもので、自然界の現象は易の中に縮寫されてある。神は自然界の何處にも表はれてゐてつかまへざるところがないと同様、易もまた變化極らないもので一定の體を具へて居るものではない。このやうに易は天地と準するもので、易の哲學が如何に大きいものであるかはこれによつて知ることが出来る。又易の作者の有した哲學が如何なるものであつたかは繫辭傳を讀み味へば分ることである。

○一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣。顯諸仁。藏諸用。鼓萬物而不與聖人同憂。盛德大業至矣哉。富有之謂大業。日新之謂盛德。生生之謂易。成象之謂乾。效法之謂坤。極數知來之謂占。通變之謂事。陰陽不測之謂神。

道は一陰一陽である。陰の極に至れば陽になり、陽の極點に至ると又陰になる。常にかういふやうに變化するところに理法が見出されるので、初に理法があつて、それから此の様な變化が起つてくるのではない。この道を繼承して行に表はすのが善である。ここに良心論がある。心のはたらきの上に一陰一陽が淀みなく表はれると仁となり義となるので、これは皆善である。人間の心の中に纏つて自然に成立して居るものが性で、此の性は即ち一陰一陽の淀みなき作用をなす力である。これは孟子の思想と聯絡する。孟子は一



陰一陽とは言はぬが、易は自然界の理法なる陰陽を以て直に良心の相を説明して居るのである。中庸に「天命之謂性」とあるが、自然の理法といふも上帝の命令といふも結局は同じことである。これは單純な原始的宗教の意味では無く、裏は哲學で表は宗教になつてゐるのである。易を若しも宗教といふならば、それは哲學的宗教である。仁者から見れば性は仁であるし、又知者から見れば性は知である。其人其人の立場によつてどうにでも見える。普通の人民もまた良心のはたらき即ち一陰一陽を用ひてゐるが、別に自覺してゐない。哲學者は知者に屬し、宗教家は仁者に屬する。人々は大抵皆何れかの型に偏するところがあるから、真正の君子は世の中に少い。中庸にも「道之不行也、我知之矣。知者過之、愚者不及也。道之不明也、我知之矣。賢者過之、不肖者不及也。人莫不飲食、鮮能知味也」とあるが、同じ意味を示して居るものである。何れにも偏せず、剛健中正の行をして行くのが君子である。易と中庸の思想は非常に密接の關係をもつてゐる。易の思想を系統的に書いたもの(但し易の占ひの部分を除く)が中庸であると見ても大した誤はない。

自然界に於ける易の道は、萬物を發育させるところの仁として顯はれて居るが、其の作用は少しも人の眼に見えない。萬物を動かし變化させて居るが無心であるから、心ある聖人の様に心配することは少しもない。「盛徳大業至矣哉」とは自然の徳と其の事業との廣大無邊なることを感歎して言つた語である。

「富有」とは澤山もつてゐること。「日新」とは變化して日々に新しくなつて行くこと。こだはらないところに「盛徳」がある。易とは新しいものを作り作り作り、生かし生かし生かして行くことで、死ぬといふことを考へない。生きるも死ぬも同じであるが生きる方のみいふ。象をなすを乾と言ひ、形づくることを坤といふ。乾は力を與へる方で坤は形づくる方である。

易の變化の理法、即ち數(易は理法を數學的に表現する)を充分に極めて將來を知ることを占といふ。變に通ずることを仕事といふ、仕事は變に通じなければできぬ。陰は陽に變り、陽は陰に變る辨證法的の動きは測ることができぬ、これを神といふ。易は即ち陰陽不測で、易そのものが神様のはたらきである。



○夫易廣矣。大矣。以言乎遠則不禦。以言乎邇則靜而正。以言乎天地之間則備矣。夫乾其靜也專。其動也直。是以大生焉。夫坤其靜也翕。其動也闢。是以廣生焉。廣大配天地。變通配四時。陰陽之義配日月。易簡之善配至德。

易は廣大で、遠い所までも考へられる。宇宙の涯までも及ぶ。近い所の一身について言へば、靜で正しい行爲の標準を示して居る。天地の間の事を言へば、皆備はつてゐる。すべてのことが易の中に備はつてゐるのである。乾のはたらきは、靜な時は專一で剛く、動く時は眞直で健かであり、坤のはたらきは靜な時は翕ひ、動く時は闢く。乾が大に萬物を生ずると坤が廣く萬物を生ずるとは、天と地との徳に並べて考へられる。乾坤が互に變通するのは春夏秋冬に配せられ、乾坤に含まれた陰陽の道理は太陽と月とに比べられ、乾の徳の易と坤の徳の簡との善なることは、上帝と相配合する聖人の無上の

徳に配當することができる。

乾の圖形は「一」で一本、靜な時は專で、動く時は直である。坤の圖形は「二」で二本、靜かなときは合つて居り、動く時は開く。それで平田篤胤は伊邪那岐神、伊邪那美神を表はすと云つてゐる。二つの圖形をば古來男女を表する象形だとも言つて居る。

○子曰。易其至矣乎。夫易聖人所以崇徳而廣業也。知崇禮卑。崇效天。卑法地。天地設位。而易行乎其中矣。成性存存。道義之門。

易その者は盛徳大業で聖人はこれに法る。知は頭のはたらきで、形がなく、禮はそれが行に表はれたもので形がある。形の無いものは自由であり、形のあつるものは自由でない。それ故に知は貴く禮は賤しい。それで知は天の陽に配し、禮は地の陰に配る。その間に易の道が行はれるのである。知を充分にはたらかせ禮を充分に行ふことは、固有の善性を完成するので、それを養ひ養ふことが道義に進む門である。



「ごこ迄も易は道徳的である。即ち天地の眞理を以て人間の道徳を規定するといふのが易の精神である。」

○聖人有以見天下之賾而擬諸其形容。象其物宜。是故謂之象。聖人有以見天下之動而觀其會通。以行其典禮。繫辭焉。以斷其吉凶。是故謂之爻。言天下之至賾而不可惡也。言天下之至動而不可亂也。擬之而後言。議之而後動。擬議以成其變化。

易に繋けてある辭をどう取扱ふかといふことを示してある。

「賾」は雜亂といふこと。人間界の現象の雜多なことを指す。易の卦は多種多様な現象のそれぞれの特性に象つてこしらへたのである。それで卦を指して「象」といふ。即ち天下に於ける人事のあらゆる象に象つたから「象」といふのである。聖人は又人間界の現象の動きについて充分なる觀察をする。そしてそれらの錯綜する間に於て自由自在に行動し得べき一條の路を發見する。

「莊子」に「上手の料理人が牛を斷ち割るに同じ庖丁を十九年も用ふるが、まだ一度も研がない。おろした時と同じやうによく切れる。それは錯綜して居る筋や骨の隙間をよく見て刃を動かすから刃が毀れないのである。下手な料理人は一年に幾度も庖丁を取換へる。」といふ話があるが、それは丁度此の場合の譬喩とするに適當である。此の如くするのを指して「觀其會通。以行其典禮。」といふのである。典禮を行ふとは、それぞれの場合に應じて最も適當な行動をすることである。禮は、畢竟複雑なる人事に處して自己の自由を保持する方法である。爻の一つ一つに辭を繋けるのは動きに效つてするのである。「爻」とは「效ふ」といふ意味である。

易は世の中の極めて雜亂した千狀萬態を言つて居るが眞實のことを言ふのであるから厭ひ惡むことが出來ない。世の中の無限の變化を言つて居るが、それぞれの場合に處すべき正しい指導をして居るから亂すことが出來ない。それ故に全体の象の辭や、一つ一つの爻の辭に相談して、言動すれば過はない。即ち指導の原理を易の文辭に發見して行けば、行爲が皆禮に合して如何な場



合にも遺憾なくすることが出来る。その例は次に挙げる如くである。即ち、  
 鳴鶴在陰。其子和之。我有好爵。吾與爾靡之。子曰。君子居其室。出其言。善則千里之外應之。況其邇者乎。居其室。出其言。不善則千里之外違之。況其邇者乎。言出乎身。加乎民。行發乎邇。見乎遠。言行。君子之樞機。樞機之發。榮辱之主也。言行。君子之所以動天地也。可不慎乎。

「鳴鶴在陰」より「靡之」までは「中孚」の卦の九二の辭である。「中孚」の卦とは ䷛ 兌上 巽下 である。此の辭を讀んで、孔子が其の解説を下したとして記してあるのは「子曰」以下である。即ち部屋の中で述べた言でも、善いことであれば遠い所のものも賛成して来る。無論近い所の人は賛成する。その反對に悪い意見を述べると、遠い所のものまでも反對する。言と行とは君子が其の人格を表出して行くところの樞や機の様なものである。樞は「くるる」で、戸を廻轉させて開閉するところ、機は「しかけ」で器械じかけの弓を射出すところに附けてあるも

の、銃で譬へれば引金の様なところ。君子が其の樞機を發動させれば、それにつれて或は名譽を受け、或は恥辱を受ける。君子の一言一行は、宇宙全體に其の影響を與へるものである。かういふやうに經文をば味はつてゆくべきものであるといふことを示してある。  
 以下の例は出所だけ言つておく。

同人。先號咷而後笑。子曰。君子之道。或出。或處。或默。或語。二人同心。其利斷金。同心之言。其臭如蘭。

「同人」の卦の九五の辭である。

初六。藉用白茅。无咎。子曰。苟錯諸地而可藉之用茅。何咎之有。慎之至也。夫茅之爲物薄而用可重也。慎斯術也以往。其无所失矣。

「大過」の卦の初六の辭。

勞謙君子。有終吉。子曰。勞而不伐。有功而不德。厚之至也。語以其功下



人者也。德言盛。禮言恭。謙也者。致恭以存其位者也。

「謙」の卦の九三の辭。

亢龍有悔。子曰。貴而无位。高而无民。賢人在下位而无輔。是以動而有悔也。

「乾」の卦の上九の辭。子曰以下は文言傳にもある。

不出戶庭。无咎。子曰。亂之所生也。則言語以爲階。君不密則失臣。臣不密則失身。幾事不密則害成。是以君子慎密而不出也。

「節」の卦の初九の辭。

子曰。作易者。其知盜乎。易曰。負且乘。致寇至。負也者。小人之事也。乘也者。君子之器也。小人而乘君子之器。盜思奪之矣。上慢下暴。盜思伐之矣。慢藏誨盜。冶容誨淫。易曰。負且乘。致寇至。盜之招也。

「解」の卦の九三の辭。

以下は時間が許さないから二三のところだけ講義する。

○易有聖人道四焉。以言者尙其辭。以動者尙其變。以制器者尙其象。以卜筮者尙其占。

聖人が易を運用する方法に四通りある。言ふ時は辭を尙び、行動する時は變じて行くところを考へ、道具を發明する時は卦の象を見て、爻の組合せによつて考へる、卜筮する時は占を尙ぶ。故に易は占をする豫言のことばかりではなく、言ふこと、行ふこと、道具を作ることに用ふる。

易无思也。无爲也。寂然不動。感而遂通天下之故。非天下之至神。其孰能與於此。

占ふ時の心持を言つたものである。無念無想心にわだかまりを持たず、筮竹を分ける。無念無想であるからそこへ感じてくる。此方が空であるから何



でも有の儘に入つてくる。これは至神でなければ取扱ひ得ない。神様の心と一致した心で自然の數を發見して行くのであるから寸毫も疑ふ餘地がないといふ理窟になつていく。

○是故形而上者謂之道形而下者謂之器

形而上といふ語の出所である。西洋の語 Metaphysics を形而上學と譯するが、それは必ずしも此の意義に叶つては居ない。形而上とは形のないことで、その作用は道である。形而下とは形のあることで、その作用は器である。朱子は形而上をば物質以外に存在するところの理法を指したものと考へたが、易の本來の意義は、物質の中でいまだ形を造らない部分を指して居るのである。形を造らない部分は天の氣であり、人で言へば精神である。天の道は陰陽であり、人の道は仁義である。

○古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文。與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是作八卦。以通神明之德。以類萬

物之情。

ここから器を製作するといふことを書いてある。

作結繩而爲網罟。以佃以漁。蓋取諸離。

「離」といふ卦は 離上 離下 で、三は目の象である。兩つの目の續いてゐる形から網の目を考へた。網は大あみ、罟は魚を捕る小さなあみである。

斲木爲杗。揉木爲末。耨之利。以教天下。蓋取諸益。

「益」といふのは 震上 震下 である。下は震で動く、上は巽で入る（説卦傳參照）。下は動く、上は入る、土の中へ入れて動かすところから「すき」を考へた。杗は「すき」であり、末は「すき」の柄である。

弦木爲弧。剡木爲矢。弧矢之利。以威天下。蓋取諸睽。

「睽」は 離上 離下 で、上が火で下は澤で相乖く。相乖く力を工夫して弓矢を作つた。弧は弓である。



## 十四 易經參考書

易經を読む時に参考とすべき書物を少しばかりお話する。易には象と數とを取扱ふ方面と、義理即ち理論を取扱ふ方面との兩方面がある。漢代は象數を取扱ふ方面に重點をおいた。その反動として魏の時代に王弼わうびつが出て義理の方面に重點をおいた。その爲めに漢代のものは衰へた。(現今残つてゐる完全のものとして最も古い註は王弼のものである。)唐の時代も王弼の註が行はれた。これは老莊の哲學を加味したものである。

宋の時代となり、程伊川の「易傳」といふのが出來た。これは新しい見地から儒教的に義理の方面を説いたものである。それから後になつて、朱子の「周易本義」「易學啓蒙」が出來た。朱子の説は、程伊川と同時代の邵康節が立てた象數の説を參酌したもので、象數と義理とを並行させたものである。それからして、朱子學は天下を壓倒する程に盛になつた。

清朝になつて康熙帝の勅撰で「周易折中」といふ本が出來た。それは朱子學に本づいて象數と義理とを折中したものである。以上が易を研究する基礎的なものである。

清朝の時、惠棟といふ人が「易漢學」といふのを著した。これは漢時代に行はれた易の説、即ち古い象數の方面を復活させたものである。漢代の易は非常に複雑なことを言つて居るものである。例へば六日七分の法といふものがある。(六日七分とは六日八十分ぶつの七といふことである。(漢代の數の書方は、分母を省いて分子だけ書く。それで解釋する場合には分母を考へなければならぬ。)それは六十四卦の中の四卦を省いて、この四卦を春分夏至秋分冬至の點とする。そして一年の日數三百六十五日四分の一(365 $\frac{1}{4}$ )を六十で割ると六日と八十分の七(6 $\frac{7}{80}$ )になるのである。こんなことは易經の本文にはないことで、餘り煩瑣になつてしまつたから、前漢の末になつては、十翼だけで易を説かうといふ考が興つた。それが緒になつて、全然象數を無視した王弼の註が出る様になつたのである。

「漢文大系」にあるものは、王弼の註と、伊藤東涯の「周易經翼通解」とである。



「漢籍國字解全書」にある「周易釋故」は、眞勢中洲の解釋したもので、この人は風變りのことをした人だから、これから入るとあやまりがある。自分の意見で本文を置換へたり、文字を取換へたり、随分思ひ切つた意見も言つてゐる。例へば大衍の數四十九を四十八と改めてある如きは、それである。

「國譯漢文大成」のものは「周易折中」などが基となつてゐる。

要するに易を研究するのは随分うるさいことで、以上私のお話したことも、何とか分り易いやうにと私が説明の方法を工夫したところが澤山あるから、或はまだ充分に言ひ盡し得ないところもあるかも知れぬ。

### 十五 佐久間象山先生の易學

象山先生は學者であつたか、經世家であつたか、豫言者であつたか。先生は勿論其のすべてであつた。先生の學識の該博なことは實に和漢洋を兼ねて居た。た

だそれらを兼ねて居ただけではない。それらを組織し統一して一家の見解を立てて居たのである。現在の日本に於ても、世界の知識はまだ組織され統一されて居らぬ。それが即ち思想の混亂を來して居る基であり、文化的施設の不調和を現じて居る所以である。今の世界に於て東西洋の知識を組織し統一することは我が日本民族に取つて最も切實緊要のことであり、又日本民族に授けられた大使命である。象山先生は既に今より八十餘年の前アメリカの黒船のまだ浦賀を訪れぬ先に於て早く其の大使命を自覺したのであつた。先生が四十以後乃ち五世界に繋ることあるを知ると言つたのは、其の深い意義を玩味すれば正に此の點に接觸するのである。先生四十の時は實に嘉永三年であつて、西洋では千八百五十年に當る年である。ペリーの來たのはそれより三年の後であつた。此の年代に於て先生の如き自覺を有して居た人物は日本國中果して幾人有つたか。先生は單に自覺しただけではない。其の組織し統一した結果を既に發表して居たのである。實に驚くべきことではないか。此の點に於て先生と肩を比べることの出来る學者は其の當時に於て日本國中殆ど一人も無かつたのである。



先生の開國論は實に此の大使命の自覺の上に立つた。其の經世的の眼光は遠く當時の知者才人の上に出た。先生は西洋の學術を吸収し消化することを以て急務中の急務と考へた。吉田松陰が先生に推服したのも此の點であつた。先生の開國論は西洋の武力を畏れて屈從的に交際を始めるのではない。西洋の文化を尊敬してそれに追隨しようとするのではない。それは維新の御誓文にある「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」の大精神に外ならない。先生は此の大精神を維新以前二十年の渾沌時代に於て、既に確然として把握し、熱烈なる意氣を以て盛に鼓吹して居たのであつた。先生が大なる經世家であり、大なる豫言者であることは、これによつて明瞭に知られる。時代は先生を生んだ。そして先生は時代を指導した。先生は實に自身の生命を賭してまで時代の尖端に立つたのである。

## 二

象山先生の學術は其の根柢を易經に置いて居る。象山先生の豫言者的態度もまた其の淵源を易經に見出すことが出来る。先生は易經に於て最も深い造詣が

あり、易經の精神を最もよく體得した。先生が東西洋の知識を組織し統一したのは、此の易を通じてのことであつた。嘉永五年(西紀一八五二)に於て先生の著した礮卦の一篇は實に易の理論と大砲の原理とを組織し統一したものである。

易の原理とする所は、陰陽二氣の辯證法的發展を取扱ふ一種の物理學である。古代に於て哲學と物理學とが分化して居なかつたことは支那も希臘も一樣である。それ故に易は又一種の哲學である。天地萬物の現象は常に陰陽二氣の辯證法的發展の交錯する上に生ずるもので、それは一瞬間たりとも停止することがない。「易」とは即ち「かはる」といふことである。希臘のヘラクライトスが「萬物は流る」と言つて、上行下行の二種の運動を考へたのは即ち易の原理と同一のものを把握して居たのである。易に於ては自然界に行はれる理法も人間界に行はれる理法も同一であるとする。それ故に易に於ては物理學が其のまゝ倫理學となるのである。易經は此の意味に於てまた人生の變化極まりなき種々なる境遇に處して個人が執るべき道德的態度の指導原理を示すものである。故に易は又一種の倫理學である。それが君主及び治者階級の指導原理となる時には、又一種の政治學



である。陰陽二氣の辯證法的發展の跡をたざれば、そこに一定の理法がある。此の理法は、直に將來に向つて適用することが出来る。それ故に易は又一種の豫言學である。此の理法は即ち神意とも云ふことが出来る。易に於ては天地萬物みな神の顯現であるとする。それ故に易は又汎神的宗教學である。此の如く觀來れば、易には物理學があり、哲學があり、倫理學があり、政治學があり、豫言學があり、宗教學がある。支那古代の各種の思想はここに結晶して居る。それ故に易は儒教經典の中の最も高尚深遠なるものとせられ、儒教のみならず、道教に於ても、支那佛教に於ても、皆これを尊重して居り、古より今に至るまで支那の經典中に常に其の王座を占めて居るのである。象山先生は此の如き性質を有する易經について最も深い造詣があり、最も能く體得したのであるから、大砲の理論を爲す所の西洋の物理學を易經の物理學に結合しようと思つたのは少しも怪むに足らないのである。寧ろ先生ほどの偉大なる氣魄を有する人物として當然行はねばならぬことであつたのである。そして此の如き大氣魄を有する人物によりてのみ、智識を世界に求め大に皇基を振起することが實現されるのである。

象山先生が礮卦を著した頃、其の高弟たる越後長岡の人小林虎三郎に贈つた文章がある。それには東西學術の統一について先生の大なる信念と抱負とが現れて居る。今それを次に引用する。

宇宙間實理無二。斯理所在、天地不能異、此鬼神不能異、此百世聖人不能異、此近年西洋所發明、許多學術、要皆實理、祇足以資吾聖學、而世之儒者、類皆凡庸人、不知窮理、視爲別物、不啻不<sup>レ</sup>好、動比<sup>レ</sup>之寇讐、宜乎彼之所知、莫之知、彼之所能、莫之能、蒙蔽深固、永守孩童之見、此輩惟可哀感、不足爲商較、大丈夫當集大塊所有之學、以立大塊所無之言、小林炳文從予游、而說吾言者也、於其歸省、書以贈之。

先生は宇宙の眞理に東洋と西洋との區別があるべきものではないといふ前提からして、近世に發達した西洋の科學は皆東洋の儒教の資となるべきものとの結論に達し、進んで大丈夫たるものは世界に存在する學術を統合して、まだ世界の人の言ひ及ばない新學説を建立すべきであると喝破したのである。先生の詩に、  
東洋道德西洋藝、匡廓相依完圈模、大地周圍一萬里、還須缺得半隅無。  
とあるのも、先生の語に、君子の五樂の第五として、



東洋、道德、西洋、藝術、精粗不遺、表裏兼該、因以澤民、物報國恩、五樂也。

とあるのも、皆此の思想を述べたものである。「藝術」とは即ち科學のことである。先生は易の六十四卦の中にある睽の卦に於て大砲の理論を發見した。睽の卦とは三三であつて、上方の三離は火の性質を示し、下方の三兌は金の性質を示すものである。大砲は火と金との結合を利用したものであるから、其の點に於て暗示を得たのであらう。そして此の卦に礲卦と命名して、易經の本文に擬して文章を書いた。其の文章は易經の中に挿入して置いて、何等の見劣りもせぬ程の巧妙なものである。それは大砲の理論を説くばかりでなく、大砲を取扱ふ人に對して道德的の訓戒を與へ、且つ大砲を必要とする所の時世に處する政治家の態度を指導して居るものである。礲卦一篇は、實に東洋の道德と西洋の藝術とを結合し統一したものである。先生の君子五樂の文を説明する時には必ず礲卦の事に言及すべきである。然らざれば、東洋道德、西洋藝術、精粗不遺、表裏兼該の意義が徹底しない。

東洋の道德と西洋の藝術との結合は必ずしも大砲の事にのみ限るべきではない。

い。象山先生が特に大砲の理論を説いたのは、先生が江戸に砲學の塾を開いて生徒に教授して居たからである。天保十年（西紀一八三九）から同十三年（西紀一八四二）にかけての鴉片戰爭は支那の大敗に終つて英國は香港を取り、上海を開かせ、其の勢力は九十年後の今日に至るまで確乎として抜くべからざるものとなつて居る。勢威赫々たる大清朝廷の基礎も此時から動搖し始めた。對岸の日本も大なる脅威を感じずには居られぬ。これからして西洋砲術の研究は我が國に於て盛となつた。象山先生は此の如き氣運に乗じて興つた。東洋道德と西洋藝術との結合が砲術に於て先づ行はれたのは時勢が實に然らしめたのである。象山先生は其の砲學の塾に於て、一面には儒教の經典を教へ、一面には砲術を教へた。吉田松陰が弟子となつたのも此の時代のことである。松陰が象山先生を稱して「吾師平象山經術深粹、尤留心時務」と言つたのは、深く先生を知つたものである。先生の經術は即ち易經を以て其の根柢とするものである。

## 三

象山先生の易學の造詣は決して一朝一夕に得たものではない。先生は極めて



幼い時から易に親しむ機會を有した。先生の父、佐久間神溪先生は易を好んで占をもした人である。神溪先生は最初には、荻生徂徠の學を修めたが、後に程伊川と朱子との易に關する著述を讀んで、翻然として悟る所があつて、専ら易の研究に入つたのである。先生の幼い頃、神溪先生は每晚易の六十四卦の中の一つ二つを讀んでから寝るといふ習慣であつた。その聲を象山先生は聞き慣れて、口眞似をし、二、三歳の時には六十四卦の名稱を暗誦することが出來たといふことである。十五歳の時から非常なる熱心を以て易の研究を始めた。その爲に徹夜する様なこともあつた。神溪先生の歿したのは象山先生二十二歳の時であるから、先生の易の研究は家庭の教訓によつて其の力を得たものが多かつたであらう。かやうにして先生の易學は次第に深くなつて、天保四年二十三歳の時には「春秋占筮書補正」といふ書を著した。これは清の毛奇齡が左傳及び國語にある易筮の話を集めて一家の解釋を試みたところの春秋占筮書といふものを讀んで、感服しないところを補正したのである。先生の此の著は今にまだ發見されないから、多分失はれてしまつたのであらう。誠に惜いことである。しかし其の自序の文だけは象山

淨稿の中にある。此の序を讀めば、先生の易學は必ずしも程朱の説に従つたのみでなく、既に漢代の學説をも参照して居たことが知られる。此の年の冬、先生は松代藩から始めて江戸へ遊學することを許されたのであるが、江戸へ行く前に既に餘程學問が上達して居たことが解るのである。その頃松代藩士の綿貫新兵衛といふ人のために占をして贈つた書簡が象山全集に出て居る。これによつて他人からの依頼で時々占をして居たことも知られる。

象山先生は江戸に於て佐藤一齋の塾に學ぶこと二年で松代に歸つて、藩の學校の教授となつたが、天保十年二十九歳の時再び藩に請うて江戸に出て、神田お玉ヶ池に漢學の塾を開いた。其の時先生は一派の學を開くべく大なる自信を以て出たのである。先生が標榜する所は朱子學であつた。先に天保八年に於て大鹽平八郎が大阪で亂を起した時、先生はそれを以て陽明學の弊害が現れたものとし、學術は必ず朱子學に本づかねばならぬと痛論し、一篇の長文を作つたことがある。先生の師なる佐藤一齋も亦陽明學に傾いて居た人であつたが、先生はそれに従はなかつた。先生が朱子學を好んだのは、其の天地萬物の理法を研究する態度に賛



同したのである。それは陽明學の唯心論的であるのに反對して居る。一齋が萬物の理を窮めることを好まなかつたことは其の著した言志録にある左の一節によつて知られる。これは明に陽明學者の流である。

吾儒窮理唯理於義而已義在於我窮理亦在於我若以徇外逐物爲窮理恐終使歐羅巴人賢於吾儒可乎。

窮理も亦我に在りといふのは即ち自己の心中の内省によつてのみ道理を窮めるべきであるといふ意義である。此の如き唯心論的の態度は朱子も亦取らぬ所であつた。象山先生は朱子學を取つて其の窮理の一面に於て當時の朱子學派の人よりも深く自然界の研究に入らうとしたのである。先生はこれが爲に朱子の易に關する學說の基礎となつて居る宋の邵康節の學說を研究した。そして邵康節の短篇が種々の書に散在して居るのを集めて邵康節先生文集を作り自ら其の序を書いた。又朱子の書簡を集めて文公短牘を著した。象山先生は即ち朱子と邵子とを綜合した所に其の自家の立脚地を定めたのである。それは明に當時の江戸の學界に異彩を放つべきものであつた。先生が邵康節先生文集序を書いた

のは天保十一年三十歳の時のことである。其の中に次の如き文がある。

爲學之要在格物窮理……今之人試與之言物理輒曰吾方窮人倫日用之不暇而何暇窮物之理乎嗟乎豈有人倫日用而外於物理者耶余未見味於物理而周於人倫日用者也……善乎邵子之言曰物者身之舟車也人而不究物理猶之乘於無柁之舟立於無轂之車也雖欲利其行豈可得哉……故余嘗謂欲窮物理者必當自邵子入焉……

天保の當時に於ける江戸の朱子學者はただ人倫日用の理即ち孝弟忠信の道を窮めることにのみ止つて居たのである。象山先生は其の間に於て先づ天地萬物の理を窮むべきことを唱道し天地萬物の理と人倫日用の理とは本來同一のものであつて天地萬物の理を窮めることによつて人倫日用の理は一層明になるべきものと主張し邵康節の研究的態度に従ふべきを痛論したのである。邵康節は即ち易についての偉大なる學者である。象山先生の此の如き見識が少時からの易の研究によつて養はれたものであることは決して疑ふべき餘地がない。先生が其の頃郷里の先輩に送つた書簡に當時の江戸の學者の中で自分が尊敬すべき程の



大學者は佐藤一齋と松崎慊堂位のもので、其の他の多くの人々は皆凡庸のものであると述べて居るのは、徒に大言壯語したものとのみ批評し去るべきではない。其の儘にして時勢の變動がなかつたならば、先生は必ず此の新主張によつて江戸に於ける第一流の學者と稱せられるに至つたであらう。

四

然るに時勢は急轉した。支那は英國に敗られた。日本は強く歐羅巴の脅威を感じた。松代藩主眞田幸貫公は天保十三年に幕府の内閣に入つて海防の事を掌つた。先生は藩主の命によつて西洋の事情を研究し、又菲山に赴いて江川英龍の門に入り西洋の兵學を修め、海防八策を建て藩主に上言した。先生は此の間に於て西洋の學術を研究すべき必要を痛感した。これは先生が三十二、三歳の時のことである。先生が三十以後乃ち天下に繋ることあるを知らしめたのは、此の間のことを指して居るのであらう。象山先生は三十四歳の時、大に發奮して蘭學の研究に着手した。最初に讀んだのはカステレーンの土性書と稱するもので、地質礦物の書であつた。これは黒川良庵といふ若い蘭學者を自宅に宿らせて其の

口授を受けたのであるが、其の翌年には更に文典を學び其の刻苦精勵は實に非常なものであつた。先生が其の頃作つた詩に「讀洋書」と題したものが二首ある。これによつて先生が易からして洋學に移つて行く思想上の徑路が頗る窺はれるのである。

漢土與歐羅。	於我俱殊域。	皇國崇神教。	取善自補翊。	彼美固可參。
其瑕何須匿。	王道無偏黨。	平平歸有極。	咄哉陋儒子。	無乃懷大惑。
壯年貴苦學。	博涉宜無常。	旁執西洋書。	日日課數章。	太易本無體。
至神豈有方。	新舊互相發。	斯理生輝光。	心解真河決。	沛然誰禦防。
惜無宋明賢。	與入此室堂。			

先生は漢學をするのも洋學をするのも日本人に取つては同一の關係であるから決して一方に偏すべきではないといふ意見である。當時普通の儒者が洋學を嫌つたのに對して先生の見識は實に卓抜のものである。前に引いた一齋の言志録の一節と比較する時は非常なる距離が其の間に見出される。又「太易本無體。至神豈有方。」とあるのは易の繫辭傳に「神無方、易無體。」とあるのに本づいたもので、ここに



も易との關係が認められる。「新舊互相發。斯理生輝光」とあるのは、即ち易の理論や邵康節の學説と西洋の科學の理論とを對照して共通の點を發見した愉快さを述べたものである。「惜無宋明賢與入此室堂」とあるのは、邵康節や朱子や其他の宋代明代の學者たちも亦此の西洋の科學を喜ぶであらうといふ意を示したものである。先生が此の如くして先生は漢學の中に洋學を包容しつつ進んだのである。先生が最初に於て當時の普通の儒者の如く天地萬物の理を窮めることの必要に注意しなかつたならば、容易に此の如き思想上の轉回は行はれなかつたであらう。

先生はそれから獨りで和蘭の砲術の書を読んで、それによつて大砲を鑄た。又、兵學の書を研究した。數學の書をも獨學した。蘭和辭書和蘭語彙と稱するものをも編纂した。そして嘉永五年四十二歳の時に及んで、獨逸のゾンメルといふ學者の著した天體や地球の構成を論じた書の蘭譯されたもの三冊を、五十五兩の高價で購得して之を耽讀し「讀宋氏宇宙記」と題する詩十首を作つた。其の最後の一首は次の如くである。

春陵說太極。五材誤其圖。發源對屈問。暗中手相摹。

西儒尙實測。早已破虛誣。茫茫覆載間。萬理轉煥乎。  
我亦同此地。何爲僻一隅。宜會東西言。以作一家書。  
學弊入骨髓。聞見養空疎。世間少人傑。誰從余所知。

詩の中にある春陵とは周茂叔のこと、發源とは朱子のことである。此等の宋代の學者が宇宙の構成を暗中に摸索して居るのに對して、西洋近世の學者が望遠鏡を使用して發見した理論の精確なるを味つて、象山先生は如何に喜んだことであらう。此の書は當時たゞ三部輸入されたのみで、一部は幕府、一部は薩藩、そして一部は先生の書架に收められたのであつた。先生の得意想ふべしである。先生は此の書を読み了つて、宜しく東西の言を會して以て一家の書を作すべし」と決心したのである。但し此の思想は既に數年前から萌して居た形跡がある。そして其の一端を實現したのが即ち此の年の十月に於ける礮卦の著述であつた。

象山先生詩鈔に「讀宋氏風論喜而作」と題した長篇がある。これも亦ゾンメルを讀んだ結果であつて、先生が如何に易理と對照しつゝ、西洋の科學を味つたかを觀るべきものである。それは次の如きものである。



吾年十有五。讀易象山麓。玄夜玩辭象。或時至晨旭。  
 冥會一何欣。理妙照心目。父老嗟其精。友朋稱其確。  
 巖々張夫子。爲學真卓犖。刻苦著正蒙。兩程互相勗。  
 顧彼巽風說。義類都未燭。如何在後賢。尊奉攀其躅。  
 執異餘二紀。往來在心曲。一朝獲冥符。吾心頓慰沃。  
 射者雖殊科。所向在正鵠。誰謂万里遠。神系固相屬。

張子曰凡陰氣凝聚陽在內者不得出則奮擊而爲雷霆陽在外者不得入則周旋  
 不舍而爲風予謂陽卦主陽陰卦主陰易之通例也坎之爲陷陽陷於陰也離之爲  
 麗陰麗於陽也。可以見矣。今張子說雷風皆以陽爲主失義類也。而朱子以下來談  
 象者多取之予所不解。

先生は十五歳の時から易を研究して諸家の説を涉獵し其の頃既に宋の張横渠が  
 巽卦三の形象によつて風の原理を説明した方法に疑問を懐いたがそれが始めて  
 ゾンメルによつて解決されたと喜んだのである。それは多分ゾンメルに風の起  
 る原因を説いて暖くて軽くなつた空氣が上に昇り冷くて重くなつた空氣が下に

入つて来る爲だと記してあつたのを見てそれを巽の卦に於て二個の陽即ち二が  
 上に在り一個の陰即ち一が下に在るのに結合したのであらう。張横渠が外に在  
 る陽氣が内に在る陰氣に支へられて入つて来る事が出来ないで外を廻つて居  
 るのだと説いたのに就いて先生が十五歳の頃に既に疑を挾んだといふことはた  
 しかに先生の頭腦の鋭かつたことを示すものである。

象山先生の易の占が能く當つた例として弘化四年三月二十四日の善光寺大地  
 震に際し犀川が山崩れの爲に堰き留められたので早晚大洪水が起るであらうと  
 人心恟々たりし時松代藩の家老河原綱徳の命によつて先生が占つたことを引い  
 て見よう。それは信濃教育會出版の虫倉日記に出て居る。此の書は河原綱徳の  
 著で其の中に次の如く記してある。

予(綱徳)はいかにも此瀧の事心元なかりければ佐久間修理に判断させしに左  
 の如く申せし。

三三三 夬

三三三 豐



夬は決也。高きより物をさくり落すの象。其卦上兌下乾、兌を正西の卦とし乾を西北の卦とす。西北の山上より抜出る象あり。變じて豐となる。豐は大也。又互卦に大坎あり。水難大なるの象とす。豐の卦上震下離、震を正東とし離を正南とす。夬決の水東南に走るの象あり。本卦之卦とも其象意洪大にして變の生ずる所人力の能停むる所にあらず。

豐の象辭に云、王假有廟、勿恤、宜日中。ト。震を君とす、君上鬼神を奉祀し、鬼神感格するの象あり。神明の擁護する所、御城地には水難及ぶ間敷象意あり。後に思へば修理が判斷能當れり。

象山先生は、易の占に於ても妙を得て居たのである。此の自信が先生の生涯を通じて先生の思想を支配して居たことは實に著しいものであつた。先生が東洋の經學者であつて西洋の科學者であり、同時に又豫言者であつたことは、皆此の易から發して居るのである。先生を研究しようとするものは必ず着眼點を此の處に置かねばならぬ。

## 五

礲卦の首に記した先生の自序は二篇ある。一は嘉永五年十月のもので、他は同年十一月のものである。象山全集に載せた本文は其の初稿であつて、其の後一度訂正を行つて居る。それは全集の書簡の部の二三三號によつて知られる。先生は嘉永四年以來一家を擧げて江戸に移住し、京橋の木挽町に西洋砲術の塾を開いて居たのであつたが、其の間にゾンメルを読み礲卦を著し、五年十月十九日出版の許可を幕府に請ふこととなつた。然るに幕府では此の新奇の學說に對して疑を挾んだものと見えて、翌年四月終に却下せられ、且つ此の如き體裁の著述は今後爲てはならぬと嚴命せられたのである。先生は非常に不平であつたが、如何ともし難かつた。しかし其の後多少緩和したので、門人に與へる免許狀に代用したのが數通傳はつて居る。

礲卦に關して、八年後なる萬延元年の六月十一日に勝海舟へ宛て先生から贈つた書簡がある。海舟は先生の夫人の兄で、又先生の門弟であつた。これは海舟が米國に使用して無事で歸朝したのを祝した書簡で、其の時に免許狀の意味で礲卦を清書して贈り、其の理由を説明したのである。



(上略)某には其表に罷在候節より其印は呈し置き候はんと其念慮は絶えず有之候ひしかども、打續き候ての多事に取りかまけ、遂に其義に及ばず、嚴謹を得候て此地へ引入候後程なく執事にも崎陽の命を被爲蒙候等にて、是迄久しく其志を果さず候ひき。

これまでは免許狀を贈る機會がなかつたことを言つたのである。そこで尙文を續けて、

然る所舊臘猝に御渡洋の御様子承知仕、多年の志をも報ひ申度且は某の傳書は世間の武偏者の免狀印可卷とも致相違例の礮卦に跋文を附し候もの故に、彼の地へ御持參候て、かの邦人の漢書にたけ候者、或は清國學士の彼の邦に遊官候者等へ御示し被成下候はゞ聊か本邦の爲に御氣を吐かれ候御一資にも可相成と存じての義に御座候。左候處其節幸便を得ず、遺憾に御座候ひし所

(下略)

と言つて居る。「本邦の爲に氣を吐く」といふ所に、東西の言を會して一家の書を作した先生の意氣實に世界を呑むの概があるではないか。

嘉永五年十一月七日付で松代藩の儒者竹内錫命に宛てた先生の書狀は、礮卦を著述した時の先生の心狀を窺ふことの出来る面白いものである。今それを左に抄出することとする。

(上略)立田氏歸藩の節、拙著の礮卦持參にて御覽にも入れ候よしに、其後文通にて候ひき。其後一兩所改め候文字も有之、近日又傳を認め申候。然る所象象繫詞一字苟せざるを見呉れ候人も無之ものに付、又、後記を認め申候。此地にても、易の事に至り候ては一齋先生の外相談可申人も無御座候。一齋先生へは近日供覽候所、大に致賞譽被下、御地又先生の外、易象に通じ候仁無御座候に付、先子に見せ候も同様に存じ、今信其草稿入御覽候間、思召し被付候儀は無御伏藏御誨示可被成下候。大段の所に至り候ては百世俟聖人而不惑とは存候へ共、後記等瑣々節目或は高意に不叶事可有御座候。夫は必ず御垂示奉仰候。御電囑の後山寺へ御傳被下度奉冀候。是も承り候へば近頃散々の次第に候。而後易象にても學び心を洗ひ大過なき様に至り候様竊に所祈に御座候(下略)礮卦の出版が不許可になつた翌年、米國の軍艦が浦賀に侵入し、其翌年なる安政



元年の春再び渡來して、幕府と開港の約を結んだ。先生は此の間に處して大に活躍されたが、終に吉田松陰の密航を企てた事に連坐して、傳馬町の獄に投せられ、其の年の秋、松代藩に送られて幽閉せられる事となつた。獄中で作つたのが省營錄である。其の中にも礮卦を借りて感想を披瀝した詩文が載せてある。

少小窮易理。中年研礮火。融會著礮卦。推演訓蒙者。  
礮卦本是睽。乖戾諧情寡。邇來我所爲。拂亂躓而跛。  
憂國竭忠精。反自求飛禍。一與卦象應。或天其試我。  
志因勞苦堅。行以勇決果。前修皆如茲。猛省矻頑惰。  
予礮卦之著。不但有。益於武學生徒。兼有裨於國家武備。往日官阻其鐫版。吾不知其何意。

先生の面目眞に躍如として居るではないか。

六

安政元年以來開港論と攘夷論とが猛烈に對立することとなり、それに佐幕論と勤王論とがそれぞれ結合せられて、世の中は鼎の湧くが如き有様となつた。先生

は信濃の山中に空しく蟄居して居たが、憂國の情は益々熱烈となるばかりであつた。先生の易學はまた其の間に頭を擡げた。安政四年十二月十一日付で山寺常山に贈つた書簡の中には次の如きことが記してある。それは米國の使節ハリスとの應對に關して幕府の吏員の無學から失態を來したのを慨嘆した言葉に續けたものである。

如何様後悔候ても取返しに成らぬ事も世には有之候故事を其始に慎み弘くこれを人に詢り、疑ふ所あれば卜筮を以てこれを鬼神に質し、然る後に事を決し候には無之候哉。卜部の事は本邦に於ては神代よりのならはしにも有之、又洪範の稽疑にも汝則有大疑、謀及乃心、謀及卿士、謀及庶人、謀及卜筮、と有之には無御座候や。當今かゝる御大事の時節に、夫等の事に目を注ぎ候人、都下諸有司事を被用候内一人半人は有之筈と存じ候所、其音響を聞き不申候事、實に慨嘆の至奉存候。某近來つく／＼存じ候に、此御時節兎ても人力のよく濟す所に無之、いづれにも其助を鬼神に求め候の外無之、鬼神に求め候には卜筮の外無之、依て本邦神世よりの習はしに従ひ、洪範の教を以て、道を知るの人を



擇道を知らずび巫覡賣卜者流は皆大卜筮の人を建立し、大疑謀には必ず此人を參し、其議を聽かれ候様に相成候はゞ必ず大裨益有之べく存じ、且洪範中、時に取り格別之義御座候様存じ候て、全く今時を救ひ候爲に、今解と題し候和解の書を認めかけ申候。稿本出來に相成候はゞ可供電囑候。是等も少しく世の補ひにもと存じ候所、何もく皆時過ぎ候事に相成可申と夫のみ憤悶の事に御座候。(下略)

洪範は書經の中の一節である。先生は洪範中の一節なる稽疑のところに注釋してそれを國文で書いたのである。此の書簡の中に「道を知るの人を擇び」とある所に特に「巫覡賣卜者流は皆大道を知るに足らず」と細注を下し、そして「卜筮の人を建立し、大疑謀には必ず此人を參し、其議を聽かれ候様に相成候はば云々」とある所を玩味すれば、先生自ら其の人を以て任じて居るのがありくと見える様である。

先生の詩の中に「戊午(安政五年)春初密寄示諸友」と題するものがあつて、そこにもまた洪範のことが出て居る。

負ヒテ譴レ久ク杜ツ門ヲ 雅ヨリ非ス爲ス守ル素ヲ 坐臥愧チ素餐ヲ 聊カ自ラ勵マ志ヲ趣ム

且晝注シ洪範ニ 竊ニ擬ス萬言ヲ疏ニ 近所著有ニ洪範今解ニ 專以託諷ニ時事ニ 獨夜繙キ軍書ヲ

坐使シテム青燈曙ヲ(下略)

洪範今解は實に時事を諷した萬言の上書に擬したものであつたのである。此の書は散佚して傳はらない。しかし先生は五年の正月から京都に居る梁川星巖へ密使を送つて時局に對する意見を陳じ、盛に其の方面に運動したのであるから、恐らくは今解の著述を中止したのかも知れぬ。

七

安政五年から六年の後、元治元年は象山先生が徳川慶喜公の命に應じて京都に出て、開國の運動に従事した年である。先生は無謀の攘夷が却つて國を危くする結果を招くものとなし、先づ天皇に開國の止むべからざる所以を悟らせ奉つて開國の勅諭を煥發せらるゝ様にしようと盡力した。此の意見は既に六年前梁川星巖に其の大体を示して置いたものである。しかし其の時恰も攘夷派の志士等が續々京都に上るのに會し、政治上のもつれから先生は終に其の主張に殉じた。誠に遺憾なことである。此の開國の勅諭の草案として先生が作つたものがあるが、其の中にも亦卜筮のことが出て居る。



(上略)専ら心を戦争に決して本邦の正氣を鼓舞せんことを欲するは烈士の志取るべきに似たり。抑亦兵は國の大事死生存亡の係る所といはずや。其算なくして猥にこれを動かさば宗社生靈をいづれの地に置かんとかする。朕竊に疑ひ思召す所なり。故に今これを著筮に命じ、天つ神の御心を問ひ奉り、然る後に事に従はんぞす。嗣てまさに其得る所のうらかたを擧て商議裁度し、是を建定せしむべし。其間爾列侯以下浪士の輩に至る迄能く、朕が意を體認し謹飭に鎮靖して輕忽の擧あるべからず。(下略)

先生は實に熱烈なる豫言者の態度を持つて居た。先生の死後僅に四年にして、世は明治の維新となり、智識を世界に求め大に皇基を振起すべしの國是は確立され、先生の主張は盡く實行せられた。鎖國の日本が世界の日本に轉生するに當つて流された此の豫言者の血は誠に限りなく貴いものと言はねばならぬ。

象山先生が此年の上京の際に、自身の前途を占ひ、夬の卦三三の上爻を得て、其の凶なることを知つたといふ話が、先生の門弟なる北澤正誠の談に據つたものとして、高島易斷に出て居る。これは確なことであらうと思はれる。先生はいかにも

此の如き場合に於て易を用ひたに相違ない。そして其の判断がよく當つて居るのである。

象山先生の一生は易を以て始まり易を以て終つたと言つてもよい。先生の本領は畢竟實行的の哲學者であつたのである。

十六 礲 卦

〔敍〕予之先君子淡水先生好周易。每夕讀之。必畢一兩卦。而後就寢。故予二三歲時。既能耳熟。誦六十四卦名。稍長。受漢宋諸家易說。而讀之。潛玩之久。乃若有得其要領焉。頃日與門弟子講新礲法。其術政與易理相發。躍然有不可言之妙。於是遂演爲礲卦一篇。既以自警。且以示同志。俾無蹈危厲之地。而自取其咎云。嘉永壬子陽月。象山平啓。書求



是室。

「礮卦」も道德に歸着する。

「求是室」は先生の家の號。すべて實際に證據のあることによつて研究していただく態度を支那では「實事求是」といふ。

陽月とは陰曆十月のこと。

その翌月又別に敘を書いた。

〔敘〕予之講新礮法於江門。生徒稍々盍簪。或有問於予曰。古者兵器以弓矢爲尙。豈非以他兵弗能格耶。自銃礮流傳。致遠破堅。摧鋒陷陣。弓矢失其所長。廢之可矣。獨疑弧矢之利。聖人著諸太易。而今不足以威天下。後世蠻方創見之器。反可以警內以畏外。則聖人之知。果有所未周。而荒外侏離之氓。其才亦有所高於聖人歟。抑擬礮於易。何卦當之。

予曰。聖人有作。順從風氣。不先天以開物。各隨時而立政。結繩以治。弧矢以威。無非隨時焉者。當今之世。微銃礮。不足以制馭內外。聖人豈違時乎哉。周官司馬之屬。有蠻隸夷隸貉隸。各執其國之兵。以守王宮。亦可以見聖人大智。固有以資用外國之利器矣。如其易象。則弓矢睽也。礮亦睽也。時冬夜寒烈。予與客憑一爐。予乃爲畫爐灰。以指示其象意。客稱善不已。更請筆之。予亦欣然領之。遂演爲礮卦一篇。吾黨爲礮學之士。苟得此而玩心焉。則庶乎其可以無大過矣。至其果有益於家國否乎。則予所不敢知也。嘉永壬子冬十一月。象山平啓子明。書于江門所居求是室。

江門は江戸のこと。



蠻方。蠻には野蠻の意味があるからといふので先生は後には用ひなかつた。そして「蕃」の字を用ひた。これは單に「外國」といふ意味である。

荒外。政治の手の届かぬ遠い地方。

侏離。言語がちがふこと。

周官司馬之屬。周官は周禮とも言ひ、周の時代の官制を書いた書。司馬は軍政の長官である。貉は北方の夷。家國は國家に同じ。

### 礲卦

象山平啓 又大星  
字子明 著

夫易廣矣大矣。以言乎遠則不禦。以言乎邇則靜而正。以言乎天地之間則備矣。故達人物、橫四海、亙古今而無有乎不準、無有乎或違者也。故未有卦畫之前、所有之物、其象固存乎易、已有卦畫之後、所有之物、其象亦存乎易、見易而制器、卦固未始不備其象、未見易而制器、卦亦

未始不備其象也。礲之爲器、近古起于西洋、天文以後、漸盛於我、頃歲新礲法來自荷蘭、器之製、用之具、術之法、至是而益精、斯器雖後出、求諸易、其象與理、蓋既具于睽卦、觀其象而玩其理、不惟器之體、用術之終始、與夫學焉者之利害得失、視諸掌上、國家措置用捨之義、人心向背通塞之幾、炳然昭著、如望日星、斯可以見易之妙矣。易中直以物爲卦名、而繫詞者二焉、曰井、曰鼎、今用其例、姑以睽爲礲卦、而別繫之詞、更作傳義、以發其意、如左、

「夫易廣矣。以下天地之間、則備矣。」までは繫辭傳をそのまま引用してある。

「達人物、橫四海、亙古今而無有乎不準。」といふことは、人と物とに通じ、空間の涯までも、時間のあらん限り何時までも、易は當てはまるといふ意。

西洋の發明した器械も易の理論の中にある。







礲。貞シケレドモ厲。君子吉ニシテ无咎シ。

**傳** 礲。本睽卦。睽。乖異也。上離之火炎上。下兌之金下墜。性情相反。又卦除初九外。餘皆不當其位。故所欲爲多違異拂亂。不得如意。且礲之爲器。兵之佳者也。兵愈佳則害人愈多。天地之大德曰生。而礲之德反之。乖異之大者也。所以雖正亦危也矣。然卦才之善。可以合睽而濟事。乃君子之道也。故爲礲學者。必君子。則得吉而无咎。蓋有吉而不免咎者。有無咎而不得吉者。吉且无咎。乃完善也。

「卦除初九外。餘皆不當其位。」といふのは、

六五四三二一

☲☱☲☱☲☱

九六九六九九

のやうに、初九が一の位に陽が居るだけで其餘は皆陰陽の位が不當である。一・三・五に陽が居り、二・四・六に陰が居れば位は正當である。そこで礲卦は才能と地位とが殆ど常にくひちがつてゐる。

「天地之大德曰生。」は、繫辭傳にある。

君子の心を以て大砲を取扱へば、思ふやうにゆかぬところに（これは位皆不當なる故）思ふやうにゆくところがある。（これは二と五との陰陽相應する故）

彖曰。礲。睽也。火輕而上。金重而下。二物之性。睽而不相濟。故貞厲。

**傳** 是釋卦義也。火之性輕疾而炎上。金之性重遲而下墜。二物之性。違異而不相濟。救固爲睽義。火則厭之。金則飛之。宜上而下。宜下而上。亦爲睽之義。凡礲之事。莫不以睽爲用。雖正而不免危。蓋由此也。

輕疾炎上の火を壓し、其の反動として、重遲下墜の金を飛ばす。



内說順而外文明。柔得中而應乎剛。是以君子吉无咎。

**傳** 是釋卦才也。兌說順也。而為貞。離文明也。而為悔。故為内說順而外文明。内說順者。優柔厭飫。而心不戾於理也。外文明者。學術足於中。英明發於外。能審利害之機。而不蹈危厲之地也。六五以柔居主位。有說順文明之善。又得中道。而以剛為用。可謂君子矣。是足以合其睽。而濟其事。吉而无咎。不亦宜乎。

「内說順」は内卦兌の意味。「外文明」は外卦離の意味。

内卦のことを「貞」といひ、外卦のことを「悔」といふ。

砲術を取扱ふ人は正しい君子でなければならぬ。

欲出而人之。欲進而退之。欲伸而屈之。礲之用大矣哉。

**傳** 是推裝彈之理。而贊其用大也。未嘗入之。而遽出。則形有所不

至。未嘗退之。而猝進。則勢有所不極。未嘗屈之。而速伸。則力有所不足。形不至。則為之難。勢不極。則物易背。力不足。則功不全。物之理也。人之事也。未嘗有不如是者也。老子識之。故其書曰。將欲歛之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。亦同揆也。嗚呼。於人知出於退。知進於屈。知伸其於天下。如示諸掌。豈惟礲云乎哉。

「欲出而入之。欲進而云々」は何でも充分に張りきらせておいておさへつける。

充分力を蓄へてから仕事をする。

象曰。金上火興。礲。君子以警内威外。

**傳** 礲不常有火。故不云有火。而云火興。金火之性。雖相睽違。有時



相資爲礮之大用。君子觀礮之象而知相資之理於相睽之中。以爲天下之大用也。取其貞兌正秋肅殺之象。嚴飭節制以統邦內。不令姦完果於披倡。取其悔離南方盛大之象。震耀威武以備海外。不使夷狄萌於輕侮。警內威外。礮之能事異矣。

貞は下卦の稱で、兌は秋だから肅殺の意味がある。悔は上卦の稱で、離は南方の意味がある。

姦完はわるもの。

初九。習有素。往何咎。

傳 初九以剛陽居說體而在至下。無所係應。是有剛陽之才而從事斯學。沈潛自說。習熟有日者也。陽剛則務敏。在下則遜志。處說則能釋事理。無係則不事術鬻。學者如是而往。何其有過咎也。

象曰。習有素。其志美也。

傳 學習有素。不事術鬻。志在成器而動。豈不美乎。

初九は大礮の學問を充分にした人をあらはす。

「術鬻」とはてらつてひさぐこと。

「成器而動」は充分に器量をつくりあげてから動く。

九二。晝日叕叕。中道惵惵。悔亡。

傳 九二以剛居于陰位。宜有悔咎。然優柔處中。離體而上。又應離明。是學得其方。而知識開通。深知火術之可懼者也。故爲晝日叕叕。中道惵惵之象。而其占曰。悔亡。叕叕。顧瞻不安之貌。惵惵。畏懼之貌。蓋晝日明融。無所不照。而猶周慮顧瞻。叕叕然不敢寧處。中道坦夷。無所不達。而猶畏敬恐懼。惵惵然不敢慢易。所以亡其悔也。若乃昏



於其理而不得其道。怠於周慮而少於畏懼。有一於此。敗禍立至矣。其能免於悔乎。

象曰。九二悔亡。敬不怠也。

傳 九二以陽居陰。本當有悔。以其知之而猶未知。能之而猶未能。敬慎之心。不少懈怠。是以其悔得亡也。

九が二に居るから位が不當である。しかし九二は聰明であつてしかも注意深くし、中の位に居てしかも畏敬の心を保ち、そして上に居る明かな六五に應じてゐる。

「晝日矍矍」は晝間でもふり反つて見る。「中道愬愬」は平坦な道でも恐れる。

九二といふ砲術者は力はあつても位が不當であるから、猶力が足らぬとおそれ慎しんで怠らずにつとめなくてはならぬ。

六三。眇而能視。跛能履。焚如。死如。棄如。

傳 以柔居三。才不足而志剛者也。故濫惡之器。以爲得精。醜拙之技。以爲得巧。如盲眇之見不明。而自以爲能視。跛蹙之行不遠。而自以爲能履。其剛愎粗暴如此。而操火礮危厲之技。必罹焚燒死亡之禍。而爲明智者之所棄絕。其凶不待言而后知也。故不言凶。

象曰。眇能視。跛能履。不可以有補也。焚如。死如。棄如。其禍自取也。

傳 剛愎自用。則不能取人爲善。人亦不能親近爲補。平易之事。無補或誤。況危厲之技乎。其焚燒死棄。乃自爲之。抑咎誰也。

六三は中を過ぎてゐて而も位が當らない。眇でありながら能く見えるとなし、跛でありながらよく歩けると思ふものである。

九四。有善。大其舟。利用禦寇。用征伐。



**傳** 貞内也。故繫以學者之事。悔外也。故繫以天下之務。四。大臣之位。今以九居焉。有剛柔不偏。文武兼濟之象。能當天下之任。而為天下之備者也。司馬法曰。人習陣利。極數以豫。是謂有善。是也。言人皆習戰陣之利。極盡器之精。以豫備之。有得天下之善計也。舟者。與礮相須而為用。故雖有其舟。其礮不精。不足以盡其利。雖有其礮。其舟不大。不能以成其用。今礮精而舟大矣。貪暴之寇。安得闖闖於我乎。其猶有不率服者。則利用以征伐之。蓋兵法以守攻。以攻守。其力適足以攻伐之。故雖有強暴之國。亦顧望畏縮。不敢啓其釁矣。若其不使人備己。而獨備人而已。則勢分氣屈。而其守禦亦不固矣。何能稱雄於天下哉。

内卦は受身で砲術を研究する人をいふ。外卦は天下を治める地位に居て砲術を利用する人である。九四は位でいふと大臣である。  
 「司馬法」は七書の一つで、兵法の書。  
 「舟者與礮相須而為用。云々」は軍艦の中に大砲を備へることである。  
 「釁」はすきま。  
 「故雖有強暴之國」以下は、我國の砲と軍艦とを充實して外國を禦ぐがよい。ただこはいと云つてゐてはだめだ。早くこつちが備をして外國が畏れるやうにせよの義。

象曰。有善。思鄰戒也。

**傳** 鄰。指三也。三之暴慢自是。以取禍患。猶如滿清。不講西洋礮艦之術。率然與英夷連兵。屢致大敗。貽天下之笑。四能思其戒。知懼。防禍亂於未然。可謂勝大臣之任矣。



英夷は英國のこと、滿清は支那で、これは阿片戦争のことをいふのである。  
大其舟計之得也。

**傳** 既盡礮之精。又造大舟以佐之。國之上計也。戚繼光曰。我船高大如城。而倭舟矮小。故乘風下壓。若車碾螻蟻。設使倭舟其大亦如我船。則吾未見其必濟之策也。反而觀之。利害見矣。

戚繼光は明の將軍で、倭寇を防ぎて功を建てた人である。其の著述に、紀效新書などがある。

戚繼光の謂つたことを反對にして、日本を主として考へて見ると、大きい船を攻めるといふことの至難がわかる。

六五。革故以新。己日乃孚。終用譽命。

**傳** 六五。文明得中。以居尊位。勢柔虛己。而得二四剛陽之賢。凡在

下者。莫不說服。足以革天下之弊。新天下之治。夫事之粗糲而不可用。與經久而弊壞。皆宜革而新之。然變革其故。則人心所未能遽信。故雖明君在上。賢相在下。改爲之際。亦必詳告申令。至於終日而後人始信孚也。革之而利於天下後世。雖欲其譽之不終。不可得也。

「詳告申令」は丁寧に教へる。申はかさねること。

六五は柔が中を得てゐて、九二、九四の剛の賢者を用ひてゐる。

改革は凡ての人がかうしなければならぬといふ時まで怵へて居て、さうして一度に斷行するがよい。さうすれば必ず成功する。

象曰。終用譽命。明功也。

**傳** 事之非者。不可飾之。以是其非。理之是者。不可誣之。以非其是。於其當革。斷然革之。而不疑。所以致譽命也。非明睿之功。其孰能與



於此。

上九。執其故。貞吝。

傳 卦本睽也。上九當其終。事之乖違尤甚者也。而不中不正。又與六三之暴頑爲類。故自是自欺。執滯其故。而不能遷善。所謂正道之蠹賊也。而迷惑之甚。守以爲貞。豈不可羞吝乎。

象曰。執其故。貞吝。不知公也。

傳 所以執滯偏固。不舍其故。由不知公道也。若使之知公道。則必舍故就新。而不至於可羞吝矣。故學者尙致知。

上九は故例を守つて居ることは貞であるけれども、位に當らず、睽の極點になつてゐるから、吝となる。

「學尙致知」とは、學問は充分にしなければならぬ。學問の無い人が上九の地位

に居ると姑息の手段を取るやうになるからいけない。

傳曰。古者弦木爲弧。剡木爲矢。弧矢之利。以威天下。

傳 高者抑之。下者舉之。反戾睽乖。以取其勢。斃人於百步之外。古者之兵。莫利於弓矢。

後世知者。易之以礲。鑄金爲彈。合藥火之。碎堅及遠。以示有備。外邦以畏。中國以肅。蓋取諸睽。

傳 鉛鐵亦金也。礲之睽乖。取勢與弓矢同。而其猛烈奮迅。非弓矢之可比。當今之世。非斯器無足以威服內外也。

以上の如く大砲の理論も、砲術をつかさどる者の注意すべきことも、政治家の心得も、皆「礲卦」の中に含まれてゐるのである。

「礲卦」の後に副へた「礲卦後記」は「礲卦」の文字の出所來歴を説いたもので、一字一句



も杜撰のないことを示してゐる。これは説明を略することにするが、一寸分りにくいことだけ説明して置く。

### 礲卦後記

以易卦別命名而繫詞。自宋元即有之矣。輟耕錄載輟者等卦是也。然皆出於文人一時之巧思。而與易之觀象而繫詞者。全然不相類。且易之象象。句皆有韻。而是則闐然焉。彼方文士。擬其古徑。作之文字。而尙不識其體製。殊爲可笑。今予所爲。其可韻者。悉用古韻。至其所繫之詞。亦無一字不寓其象。如初九習有素。九變爲八。初至五體習坎。故爲習素。白也。物之質也。有從前之意。兌正秋之卦。其於色爲白。易中曰素曰白。皆取於兌。履之初九素履。取於下兌也。賁之上九白賁。取於兌位也。

此曰有素。象同於履之初九矣。志者陽剛之在內者也。美者兌之悅澤也。如九二上有離日。以中應之。晝日也。二變爲震。震爲大塗。而當其中。中道也。矍矍。愬愬。皆震雷驚愕之象也。離爲火。火主禮。禮者敬而已矣。又震有修省之意。故爲敬不怠也。如六三互離爲目。下兌毀之。眇也。又按說文。有目不相視爲睽。謂上離互離。原有兩目。而四爻間之。而爲睽。則此卦本有眇象。震爲足。兌上具震之半體。此爲不全之足。跛也。又卦自大畜來。互震之足。易爲坎蹇。亦跛也。三居離中。焚之象。又在兌體。兌爲澤。離火入兌澤。爲澤水所滅。死之象。離火飛升。兌澤流下。互相睽離。而三當其際。而在下。棄之象。不可以有補者。兌上缺也。禍者互坎多眚也。自取者。艮手之位也。如九四離爲美。故曰有善。與離之六五曰有



嘉正同離爲舟。上離互離相連。方舟之象。然中間有互坎。坎爲寇。爲隱伏。不免有寇賊出沒於舟間之象。今九變爲八。二至上成大離。而坎寇從坤土。是爲造大舟。而寇賊竄跡。仇敵服從之象。故曰大其舟。利用禦寇。用征伐。三與四相接。即鄰也。防患曰戒。離外剛。有戒象。坎爲心。思計。皆心之用也。四巽位。巽爲近利市三倍。得之象也。如六五革故以新。兌金之鏞敗者。離火鍛而新之也。離下兌上之卦曰革。革者兵也。離火鑄。兌金以爲兵也。兵者革也。順時而更革也。用兵之要在去故而擇新也。劍昔用銅。後用鐵。今則刀鏞。昔用石。後用銅。今則鐵。昔之戈戟。後世不用。今之銃槍。古昔所無。是可以見兵之所以爲革矣。此卦又離與兌。故又有此象。猶之噬嗑與豐。同震離之卦。而俱有刑獄之象。離爲日。爲孚。而卦有二日。五處其終。故爲己日。離美變爲乾。乾虞氏易爲嘉。爲好。並譽之象。

又有互巽。巽爲命。即譽命也。離爲文明。而五當君位。故曰明功。大傳曰。三與五同功。而巽位。三多凶。五多功。是也。如上九執其故。故者。兌金之經久。而鏞敗者也。蓋指三也。離火當革之。而反執之。何也。離變爲震。震者倒艮也。艮爲手。有執之義。上九在睽乖之極。故爲反戾執之之象也。離日懸天。無所不照。即公也。而上當其昃。而又兌位。兌爲西。爲澤。有日沉虞淵。昏黑不辨色之象。故曰不知公也。此數者。乃予所以繫詞之大略也。初傳中欲釋此意。而感朱子燭籠之喻。遂別筆記以附于後云。

輟耕錄は元の陶宗義の書いたもの。その輟耕錄に載せてある輟客などの卦は皆文人一時の氣まぐれの技巧であるが象山先生の礮卦はそんなものではなく真面目なものである。それは以下に委しく説明してある。  
「感朱子燭籠之喻」といふことが最後のところにある。これは燈籠を作るに骨



を澤山にすれば燈籠はしつかりするが、明りが暗くなる。それと同じやうに、この後記も、礲卦の本文の所へ一々その註釋として書入れると、その爲本文の趣旨が不明瞭となる。それ故、別にかう筆記して後記となしたといふのである。

礲卦の叙と本文と礲卦後記との文章は象山全集にあるものに據つた。しかし象山先生は其の後尙これに多少の改訂を加へたことがある。それは全集下巻書簡部第二三三山寺源太夫宛のもの、第二三五の竹内八十五郎宛のものによつて知ることが出来る。又宮本仲氏所藏の象山先生自筆の稿本には、後記の部分に於て全集のものよりも簡略になつて居るところがある。それは多分、最も早い稿本であつたであらう。

附 錄

春秋占筮書補正序

易之道。理與象而已。惟其象也。故理則象爲體而理爲用。惟其理也。故象則理爲本而象爲末。二者相因。恒輒不離。未有象而不原於理。理而不寓於象者也。大傳曰。易有聖人之道四焉。然其實則不出於象理矣。蓋象者理之象也。故理即存乎象。辭者象之理也。故象即存乎辭。變則象之動也。而非理不通焉。占則理之兆也。而非象不決焉。而是四者固亦不可以廢其一也。一廢則聖人之道闕矣。夫自聖學不明而易道遂晦。方伎之詭誕。外義理以言象數。而以欺於人。曰。易固如是。偶有得其



一端者。吾何以思之哉。彼已失其用矣。吾未見無其用而有其體者也。世儒之支離。擯象數以談義理。而以誣於人。曰易固如是。吁亦何以能得所謂真理乎。吾亦未見夫無其末而有其本者也。啓妙齡好易。專精義理之間。既乃稍覺流乎偏枯。而苦其散漫無歸。因又求諸伎術諸家。而飛伏世應。遂亦不堪其陋焉。適讀春秋傳。觀其所載占筮之迹。欣然有會於心。以爲古人盡象數變占之妙。於此可闕矣。然以其辭隱而旨微也。既莫能盡推測之所繇。而又汨於荒忽孟浪之說。可慨焉爾。其後得清人毛奇齡氏春秋占筮書。而讀之。愛其幽深隱微之際。固已多所闡明。而考論之精確。亦迥出於漢唐諸儒之上矣。則如占筮書。固學易者之筌蹄。而不可以少者。然尙竊憾其發揮之未全盡。而間亦有所謬

誤也。癸巳夏。以微疾在告。杜門讀易數旬。忽恍然若有得者。乃復取毛氏之書。而反覆之。滋覩其有罅隙斑瑕。於是僭不自揆。輒蒐錄所得爲一書。以附其後。名曰補正。蓋心之所得。不敢自匿。聊明象數之端。以拯義理之偏。而因以庶幾體用本末之一致焉耳。則吾之爲是。亦豈專乎此。而忽乎彼者也哉。嗚呼。觀吾之說。而不得其意。謂是亦徒爲象數變占之資。已也。則失之遠矣。



## 邵康節先生文集序

爲學之要在格物窮理。而方今人士皆知誦格窮之訓。正學之旨。若大明於世。然其實日就維擾偏固。旋復晦盲。余嘗潛思其故。無亦學者徒誦坐譚。不務其實之過歟。今之人試與之言物理。輒曰。吾方窮人倫日用之不暇。而何暇窮物之理乎。嗟乎。豈有人倫日用而外於物理者耶。余未見昧於物理。而周於人倫日用者也。夫三綱五常。大經大法。學者誰不知者。而臨事之際。輒已見其窒碍。政以學不足以觀物理之宜。是

以有所昏蔽而不通耳。善乎。邵子之言曰。物者身之舟車也。人而不究物理。猶之乘於無柁之舟。立於無轂之車也。雖欲利其行。豈可得哉。邵子先天之學。其議論端緒。若時有異者。然程伯子在當時。旣以純一不雜稱之。則其歸極之正。固不待辨說。而至乎夫。包括宇宙。終始古今。盡事物之變。而究天人之蘊。則秦漢以來一人而已矣。故余嘗謂欲窮物理者。必當自邵子入焉。其所著皇極經世。擊壤集。二書。固學者之所宜潛玩。顧濂洛諸公。其成書之外。後世皆傳其文集。邵子獨無。余常憾之。頃讀朱先生語類。先生嘗欲刊其漁樵問對。及一二篇書。因竊沿其意。掇拾遺文。以爲一集。但無奈其所傳無幾耳。然視朱先生之語。當時所存。亦恐不過于今。然則其文早已散佚耶。抑其所作。初止於此耶。今皆



不可考。惟其篇雖不多。其說雖不煩。學者能於此而留心焉。則陰陽造化之端。道德生命之理。治亂興亡之原。吉凶禍福之幾。皆可以窺其大略。而窮理之學。其得門也不難矣。則拯夫世儒徒誦坐譚之弊。而復斯道之明。又得而庶幾焉。抑窮理之本在養靜。而養靜莫若乎居敬。蓋聞邵子嘗闢齋於百源深山。獨處其中。王勝之常乘月訪之。必見其正襟危坐於燈下。雖夜深亦無不然。嗚呼。其所養如此。是以其深造亦如彼也。此尤學者之所宜知。故爲之序。而附以所聞如是。

## 卷 末 記

- 一、本書は昭和六年の十月廿三日より廿五日まで屋代中學校講堂に於て、學習院教授文學博士飯島忠夫先生が埴科教育部會員の爲めに易經の御講義されたものを筆記したのである。
- 一、筆記の原稿には飯島先生の精細な加筆と訂正とを賜はり、猶印刷に際しては校正までもお願いしたので、先生の御著書と言つても差支ないものである。
- 一、易經は幽深隱微の書で容易に理解され難いものとされて居るが、本書は易の概説的のことよりして、卦の詳細にまで及び、何等易に豫備知識なきものも易門に入ることができると同時に深微の易理をも把握し得るもので「易經研究」といふ書名に相應しいものである。
- 一、「佐久間象山先生の易學」は大先覺者象山先生と易學との關係を述べられ、併せて末章の象山先生發明の「礲卦」の理解を助けるものである。
- 一、附録の象山先生の「春秋占筮書補正序」と「邵康節先生文集序」の二篇は象山先生の易學を知るべき根據となるべきもので、これも飯島先生の御意見により特に訓點を附して載せたものである。
- 一、表紙の書名は飯島先生の御揮毫によるもので、内容と相俟つて本書の精彩を加へるものである。
- 一、本書刊行に際し互細に亙つた飯島先生の御厚志を深謝し併せて埴科部會の幹旋を感謝する次第である。

昭和七年七月

信 濃 教 育 會